
とある中立の貸借稼業

ナマクラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある中立の貸借稼業

【Nコード】

N4356K

【作者名】

ナマクラ

【あらすじ】

様々な暗部を抱える学園都市にとある私設組織が存在した。その組織の名は貸借稼業『レンタル』。彼らは学園都市に協力することもあるが、逆らうこともある。彼らの活動に境はない。大きかりうが小さかりうが、光だろが闇だろが、ましてや善悪など関係ない。あくまで中立の立場をとるこの組織はとある一人の少年によって動いていた。

プロローグ（前書き）

この話は最初は原作に従って進んでいきます。オリジナルが入ってくるのは後の方になるかと・・・。それでもいい方はお読みください。

プロローグ

『学園都市』——東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では“超能力開発”が学校のカリキュラムに組み込まれており、230万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいる。また、学園都市は科学技術の最先端が組み込まれた実験都市でもあり、学園都市の内と外では技術に30年以上もの開きがあるとも言われている。

そんな学園都市のとある廃ビル。数日後に取り壊しが予定されているこのビルに二つの人影があった。一つは高校生の少年、もう一つは大柄な青年——こちらも制服を着ていることから高校生だと思われる——だ。

「やあ、ナナシくん。今日はどうしたの？」

ナナシと呼ばれた青年の制服には盾の紋章が入った緑の腕章が付けられている。

「最近起こってる連続虚空爆破事件クラビトンについての情報が欲しい。」

「俺ジャッジメントよりも風紀委員の君の方が詳しいと思うけどね」

「御託はいいからさっさとしろ。」

「はいはい、これね。」

少年は手元にあった紙の束を青年に渡す。どうやら青年がどんな情報を訊きに来たのかわかっていたようだ。

「ふん、お見通しつてわけか。気にいらねーな。・・・ついかもしれないけど、わざわざデータを紙媒体にする必要があんのか？」

「俺は即物的なんだ。説明するのも楽だしね。」

「嘘付け、単なる嫌がらせだろうが。で、てめーの見解は？」

少年は少し考える素振りをしてから答える。

「そうだな・・・あくまで推測でしかないけど、犯人はいじめられっこで元のレベルが2か3。内向的な性格だろうね。動機は逆恨みかな？」

「はあ？色々とツツコミ所満載だな、おい。まず爆発の規模からいって大能力者^{レベル4}クラスだろ？」

学園都市の能力者にはその強弱によってランク分けされており、下から無能力者（レベル0）、低能力者（レベル1）、異能力者（レベル2）、強能力者（レベル3）、大能力者（レベル4）、超能力者（レベル5）となっている。今回の事件は最低でも大能力者^{レベル4}並みの能力が必要になってくるのがすでにわかっているが、『書庫^{バンク}』のデータに該当し、尚且つアリのバイのない能力者がいないので、調査が難航していたのだ。

「最近、急激にレベルを上げる『何か』が広まっていってね、力欲しさに手を出したんじゃないかな？」

「じゃあ性格云々は？」

「それは勘だね。」

「……、」

ただの勘を売り物として教えるなよ、と思ってしまっ。が青年は気を取り直して質問を続ける。

「じゃあ動機の逆恨みってのは？」

「時間や場所に関連性は見つけられないけど、ある程度の絞込みはできる。それに共通点はちゃんとあるしね。確か七件で八人だったかな？」

「?……!風紀委員か！」

その通り、といいながら指を鳴らす少年。さらに続ける。

「動機としては『自分を守ってくれない風紀委員なんていない』とかじゃないかな?このあたりはあくまで推測にすぎないからそれには載せてないけど一応次の予想地点とか犯人のいそうなエリアとか書いておいたから。あとは君たちの仕事だよ。」

「レベルを急激にあげる『何か』ってのは?どうせ掴んでんだろ?」

「それはまた別料金。貸し2だよ?」

「……クソ、じゃあいらねーよ。」

青年は踵を返し出口に向かう。

「じゃ、また今度、『レンタル』の仕事入れとくから。」

「知るか！」

そう言つて青年は去つていった。

「・・・さて、俺も行くとしようかな。」

そう呟くと少年も廃ビルから出て行つた。

「えーっと、とりあえずこれくらいでいいか」

そういいながら紺色の髪に切れ長の目が特徴的な少年、影宮刻（カゲミヤ トキ）はコンビニに設置してあるＡＴＭに引き出す金額を入力する。そして出てきた金を取り出したとき、コンビニの扉が開き、黒いツンツン頭の見知った顔が入ってきた。それはクラスで仲のいい上条当麻（カミジヨウ トウマ）だった。

「やあ、奇遇だねえ、カミヤん」

「影宮！？ テメエ！！ 今日お前が学校サボったせいで子萌先生が怒つて泣いて俺が酷い目にあつたんだぞ！！」

そんな事があつたのか、と影宮は呟くと反省しているような声でこ

う言った。

「わかった。今度モエちゃんに謝っておくよ。」

「俺には!？」

「? 特にはないけど?」

「ちょ!？その扱いはひどくないか!？上条さんはこの扱いの悪さに対して改善を要求する!!」

いつもの事だろうに、と思っても口には出さない影宮。一応人としての優しさは持っているのだ・・・多分。

「それじゃあ、お詫びとしていい事を教えてあげよう」

「? いい事？」

「カミヤんにこれから起こるであろう不幸とフラグを予報するのさ。人呼んで『上条予報』。クラスじゃ結構人気あるよ? 賭けの対象にもなってるし。」

「な!？上条さんの知らないところでそんな事やってたというのか!？つーかフラグってなんのフラグだ!？」

上条が騒いでいるが無視して影宮は言い放つ。

「ずばり! ATMから金を引き出せず、さらに女関係のトラブルが起こる!!--」

「な!?!・・・・・・は、ははさすがの上条さんでもそう続けて不幸が起こってたまるかつーの」

「女関係は不幸じゃないと思うけどなあ。」

そう言つて、上条はATMにカードを挿入し、暗証番号を打ち込むが。

『暗証番号が違イマス』

「・・・・あれ?えつと・・・・」

もう一度打ち込む。

『暗証番号が違イマス』

「は?いやそんなはずは」
もう一度。

『暗証番号が違イマス』

「何でだーっ!」

さらにもう一度。

『暗証番号が違イマス』

「ああもっつ!こうなったら別のコンビニで・・・・」

だがしかし、立て続けに不幸は起こる。

「ぎゃー!!!今度はカードが飲みこまれて出て来ない~~~~!!」

「あはははは!やっぱり君といると面白い事が起きるよねえ!~!!」

「うるせー！！不幸だぁー！！！！ッ！！」

その時、再びコンビニの扉が開いて、今度は茶髪の子が入ってきた。制服から常盤台中学のお嬢様だということがわかる。

「・・・久しぶりね」

「ゲッ！ビリビリ中学生！」

「？・・・・・・確か・・・」

彼女の名前は御坂美琴（ミサカ ミコト）。名門・常盤台中学のエースにして、この学園都市に七人しかいない超能力者^{レベル5}の第三位『超電磁砲（レールガン）』である。

どうやら美琴の眼には上条しか見えていないらしく、出会った時の状況や今までの怨み辛みを吐き出して上条に勝負を挑む。それに対し上条はというと、

「あーカードがないと再発行されるまで無一文に、冷蔵庫の中は力ッポだし・・・やっぱ買い溜めしとかなないとダメだなあ」

完全に無視していた。

「カミヤんがそんな事を言つと、近日中に買い溜めした物がダメになるトラブルが起こる気がするなあ。早めに処理しないと・・・」

「お前影宮不吉な事言っんじゃねえー！！！！」

「私を無視すんなーっ！！！！」

そういつて御坂美琴は思い切りATMに（無意識なのか）電気を纏った拳を『ドカンッ』と叩きつけた。するとATMは何やら派手に音をたてつつも、先程飲み込んだ上条のカードを吐き出した。

「で・・・出たあゝサンキュー、ビリビリ!!」

「ビリビリじゃなくて御坂美琴っ!!」

カードが出てきた事が嬉しいのか涙まで流す上条。ビリビリ呼ばわりは嫌なのか訂正をする美琴。二人のやり取りをとりあえずケータイの動画に収めながら見守る影宮。

「正直何でこんなのに関わっちゃったんだろうって思ってたけど今初めてこの出会いに感謝・・・」

「あんたねえ」

上条が美琴の手をとって握手をしていると、どこからか『プシュ・・・』という音が聞こえてきた。恐る恐る音源の方に目を向けてみるとそこには煙を吐くATMが。

「何か・・・嫌な予感が・・・」

突如ATMが『ピーーーーーッ!』とけたたましい警報音をたて始めた。

「やっぱりー!!」

警報が鳴り出した瞬間に上条は美琴の手をとったまま走り出した。

「ちょっと!!どこ行くのよっ!」

「不幸だあああああああ」

・
・
・
・
・
・

「・・・・・・まさかすでに『超電磁砲』レールガンとも繋がりがあるとは・・・・
さすがカミヤん、見ていて飽きないね。」

影宮は持っていたケータイで電話をかける。

「もしもし、ツッチー?」

『どうしたのかにゃー?』

「ちょっとした報告だよ。カミヤんが夜の街を女子中学生の手を引いて走っていったよ。」

『な!?!なんd』

相手の反応も聞かないまま電話を切る。もう一件同じような電話をかけ同じような報告だけして切った。

（面白くなりそうだし、明日は登校するかな。）

そう思いながら先ほどの動画を送るかどうか迷っていると、誰からかメールが来た。影宮はそのメールを見ると、溜息をついた。そし

てまた電話をかける。

風紀委員活動第一七七支部。

「だりい・・・情報持ってきたんだからその時点でお役御免だろ・・・
・・・つか情報処理なんて俺じゃなくて初春にでもやらせるよ・・・
たまに来てみたらこうだから嫌なんだよ・・・クソ。」

首にかけた十字架のネックレスをいじりながらそう愚痴る大柄な男は七篠無頼（ナナシノ ブライ）。一見不良のように思ってしまうが風紀委員である。・・・サボりがちではあるが。

「あのねえ七篠くん、たまにしか来ないのがいけないんじゃない。
私も手伝ってるんだから」

肩まで伸ばした黒髪に眼鏡が特徴的な女性は固法美偉（コノリ ミイ）。同じく風紀委員である。彼女は先程『連続虚空爆破事件』の現場に出動して、被害状況の報告、負傷した同僚の搬送の手伝い、現場検証などその他色々の仕事をした後に、この一七七支部に戻ってきて情報処理を手伝っている働き者である。そんな彼女は不真面目な七篠にちゃんと来るようにという意味も込めて先の言葉を言った訳だが

「あー彼女欲しいなあ・・・出会いがねーんだよ、まず。というわ

けで固法付き合わね？」

当の本人は聞いちゃいなかった。

「・・・はあ、そんな投げやりな告白で肯く人はいないでしょ？それよりも仕事してよね。」

「言われんでもやってるよ、くそ、イライラする。」

愚痴を言ってもちゃんと仕事はするのよね、と固法が思っていると、七篠のケータイが着信音を鳴らす。七篠は着信の相手を見て舌打ちをした後、電話にでる。

「何だ？今んとこ用はねえぞ。」

「あ、ナナシくん？悪いんだけどさ、『レンタル』の仕事入っちゃって、今日の貸し車をさっそく使わして貰うけどいいよねえ？」

「は？いつだよ？」

『今日の深夜にでも』

「はあ！？」

『ははは、それじゃまた後で場所送るからねえ』

「ふざけんなよテメコラ！無茶苦茶にも程があんだろーがよ！『頼んだよーじゃあね』おいテメ切ん『プチッ』なよおい！！」

わなわなと震え出す七篠。手に持ったケータイがミシミシというほ

ど手に力が籠もっている。

「……どうしたの七篠くん？」

「……ぞ……」

「あっ」

「ざけんな——！！」

その日、風紀委員一七七支部で一つの叫び声が上がったのだった。

プロローグ（後書き）

主人公になりえないような人を主人公にしてみました。更新速度は亀よりも遅くなる自信がありますが、よろしく願います。

日常と非日常の境（前書き）

今回はほとんど原作『超電磁砲』のままで、すいません。

日常と非日常の境

「——とまあ以上が昨日の夕方に起こった事件ですの」

常盤台中学一年であり風紀委員でもある茶髪ツインテールの白井黒子（シライ クロコ）は昨日起こった事件について愛しのお姉様である美琴に説明していた。そのお姉様はというと・・・

「・・・聞いてます？お姉様」

「聞ってるわよ、連続爆破事件とかいうやつでしょ・・・う、ハズレだ」

常盤台中学内伝の故障自販機に回し蹴りをかましていた。

「正確には連続虚空爆破事件ですの」

そこから黒子は事件に使われている能力と手口、『バンク書庫』に該当する能力者が一人しかいない事、その能力者に犯行は不可能だという事を美琴に説明していく。

「そういえば、昨日風紀委員の先輩が持ってきた情報に、犯人の目的は風紀委員ではないか、というのがありましたの」

「えっ！？それって事件の解決に繋がるんじゃない？」

美琴は黒子の心配をしていないわけではないが、今それをいうと多大な勘違いをこの後輩がするかもしれないというか絶対するの言わなかった。

「確かに風紀委員に恨みを持っている人を捜せばいいのでしょうか、そのような人物といえは武装無能力集団スキルアウトぐらいしか思い当たりませんが、そもそもスキルアウトは能力を使えませんし……。」

「あ、そっか……。つまり『書庫』のデータに不備があるって事？」

「あるいは滅多に無いケースですが、前回の身体検査システムスキャン後の短期間で急激に力をつけた能力者の犯行という可能性もありますね」

短い黒髪に花瓶のようにたくさんの花がついている花飾りをつけた少女が通学路を歩いていた。彼女は初春飾利（ウイハル カザリ）。風紀委員の一人でもある。

「うーいはるーん♪」

後ろから自分を呼ぶ声が聞こえてきたので挨拶をしようと初春が振り向おうとする前に

「おっはよーーーん!!」

ばッ

挨拶とともにスカートを思いっきりめくられた。

「!?!?!?!?!ぎゃわぁーッ」

「おっ今日は淡いピンクの水玉かー」

「だっ．．．男子もいる往来でこの暴挙ッ!?!何すんですか佐天さんっ!?!」

「クラスメートなのに敬語とは他人行儀だねえ．．．」

初春のスカートを思いっきりめくった白い花の髪留めをつけた少女、佐天涙子（サテン ルイコ）に反省の色は無い。それどころか．．．

「どれ!?!距離を縮めるために親睦を深めてみようかね」

さらにめくった、しかも連続で。

「わーッ!?!めくらないでくださいっ!?!連続でめくらないで
~~~~ッ」

少々お待ちください。

「ごめんごめん、ちょっと調子に乗っちゃった」

「ヒドイですよ」

スカートめくりによって初春は半泣き状態になっていた。

「おわびにあたしのパンツ見せよっか？」

「結構です」

「あ、そーだ、初春が聞いたがってた新曲ゲットしたからこれで機嫌直して」

そう言つて佐天は音楽プレイヤーを取り出してイヤホンの片側を初春に着ける。

「あ、これ今流行のプレイヤーですよ、ダウンロード中心の」

「まーねー今も新曲引っ張ってきてんだけどPV付いて一曲百円よ。CD買つてた頃なら信じられない値段よねー」

「インディーズの人達も個人で気軽に登録配信できるようになったのはステキですね」

「まあその分ショボイ曲も溢れ返ってんだけどね。初春ってこっい

うの疎いよね。遊びが足りないっていうか」

「うう……余計なお世話です」

学園都市内にあるとある私設研究所でそのふくよかな所長と一人の少年が揉めていた。

「どういづつもりですかねえ？我々はきちんと『依頼』を全うしたというのに報酬を払わないとは？」

影宮がこの研究所から請け負った『依頼』というのは、とある研究所を潰してほしいというもので昨日入ったこの依頼を昨日の内に済ましたのだが、依頼主である所長が報酬を払おうとしなかったのだ。

「ふん、確かに奴らの研究所は潰れたが、貴様らがそれをしたという証拠がない！よって貴様らに払う金はない！」

太った所長はふざけた言い分を当然のように言い放つ。信用関係が大事である裏稼業で報酬を払わないというのは有り得ない事だというのをこの脂ぎった所長は破ると高言したのだ。

「つまり我々との契約を反故にすると？」

「そつだと言つたらどうなるのだ？ 貴様のような小僧に何が出来る  
アンチスキル ジャッジメント  
？ 警備員か風紀委員にでも通報するか？ もしそうしたとしても実行  
したのは貴様らで私は何の関係もない。」

脂の乗った所長の言つた通り、警備員や風紀委員に通報しても捕まるのは影宮たちであつて所長たちではないし、仕事の内容上、影宮たちとこの研究所の間にどれほど探つても関係性を掴めないようにしてきた。しかしこの発言によつてこの場で自分が殺される可能性があるというのをこの豚のような男は考えているのだろうか？

「（考えてないんだろうなあ・・・）・・・」

実際はそんな事を考えていたのだが、表面上黙り続けている影宮をみて勝利を確信する豚親父（所長）。

影宮は一つ溜息をついた後にこういった。

「つまらないなあ。」

「・・・何だと？」

「つまらないと言つたんだよ。どんな言い訳を聞けるのかと楽しみにしていたらこれだ。俺が落胆するのも仕方ない事だと思うけどねえ。」

「このガキ・・・！！」

「もういいや、アンタからもう仕事は引き受けない。報酬も別の形で徴収させてもらつことにするよ。」

そういつて立ち上がり、出口に向かって歩いていく。

「何だと？どういうことだ？」

「どういふことかは後でわかるよ。」

ドアを開いて出て行く前に所長の方を向いてこう言った。

「それじゃ、さようなら。」

「んーっ！終わったあー！ー！ー！これで明日の終業式が終わればついに夏休みだねっ！」

「そうですねえ、あ！！」

向こう側の道を見ると、そこには風紀委員の同僚である白井の先輩である御坂美琴がいたので呼んでみることにした。

「御坂さん」

「ん？おー」

向こうも気付いたようなので初春は美琴の方へ歩いていく。

「おっすーそっちはお友達？」

「はいっこれから一緒に洋服を見に・・・」

美琴と話している初春を佐天が掴んで引きずっていく。

「ちょっと！あのヒト常盤台の制服着てんじゃない、知り合いなの？」

佐天が小さい声で初春に問う。

「ええと風紀委員の方で間接的に・・・しかもあの方はただのお嬢様じゃないんですよ。」

初春がもったいぶる様に指を振る。

「『超能力者<sup>レベル5</sup>』！」

「レベル5！？」

「それも学園都市最強の電撃使い<sup>エレクトロマスター</sup>、あの『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』の御坂美琴さんなのですよ！！」

「ウソ・・・まさかあの『超電磁砲』？」

キヤーキヤーワーワーと興奮して話している二人を見て、こんな感じに噂って広がっていくのね・・・、と思ってしまう美琴だった。

「あのっ・・・あたし佐天涙子です！！初春の親友やってます！！」

「そ・・・そう、よろしくね。あ、洋服見に行くなら私も一緒にいいかしら」

「もちろん大歓迎！！・・・ですけどあたしらが行くところとしてのフツのチェーン店ですよ？常盤台の人が行くようなところじゃ・・・」

「いや・・・あんまそーゆーの関係ないわよ。ウチって外出時は制服着用が義務付けられてるから服にこだわらない人結構多いし」

「そうなんですか？」

「あ、そういえば今日は白井さんは一緒にいないんですか？」

「あー何かあの子忙しいみたい」

「初春ーどこで油売っていますのー#」

「でも超能力者かあ、スッゴイなあ・・・『レベリアッパ幻想御手』があつたらなー」

「え？何ですかそれ」

「いやあくまで噂だし詳しい事はあたしも知らないんだけど・・・」

あたし達の能力の強さを簡単に引き上げる道具があるんだって。それが『<sup>レベルアップ</sup>幻想御手』。ま、ネット上の都市伝説みたいなもんだけどさ」

「そりゃそうですよ。そんなのがあつたら苦労しません」

「でもさ本当にあるならあたしでも・・・」

「？佐天さん？」

「あ・・・アハハ、なーんでもないよー」

佐天の話を聞いて、美琴は今朝の黒子との会話を思い出していた。

（『幻想御手』か・・・まさか・・・ね）

「・・・どういづつもりだ？あの小僧・・・」

所長は昼前に来ていた少年のことを考えていた。

「まあいい、これで金も払わずに邪魔な奴等も消えた。これで・・・」

その時、所長室のドアが乱暴に開かれて職員の一人在駆け込んでき

た。

「所長！！大変です！！アンチスキル警備員が・・・！！」

「それがどうしたというのだ。さっさと追い返せ。」

「そ、それが我々の『実験』について嗅ぎ付けて来たようで・・・」

「な、何だと！？」

この研究所では合法的な研究だけでなく、非合法的な研究もしており、その最たるものが『置き去り（チャイルドエラー）』と呼ばれる子供たちを使った人体実験である。

「い、いいから追い返せ！！それができんのなら、時間を稼いで証拠を消せ！！」

「そ、それが・・・証拠がすでに握られていて・・・」

「ば、馬鹿な！？」

非合法的な研究をしているのだから情報が外に漏れないよう、細心の注意を払ってきた。アンチスキル警備員などに情報が漏れるはずがない。

そこでふと思い出す。今日、あの少年が何と言っていたかを。

『どついうことかは後でわかるよ。』

つまり、こつちを潰すために奴等が情報をリークしたのだ。徴収云々はデタラメでこれが本命・・・！！

「あ、あの小僧・・・!!」

だが、今更繋がったところでどうにもならない。すぐそこまで警備員が来ているのだから。

『よかったのかよ？警備員に情報流して？』

「元々その予定だったしねえ。ま、目的の物は手に入ったし。」

ケータイで話ながら影宮はもう片方の手でUSBメモリを弄る。

『目的は金ではなくデータか・・・』

影宮の持っているUSBメモリには先程の研究所の実験データや研究所同士の繋がりその他諸々の情報が記録されている。

『・・・あいつらから足が着く可能性は？』

「ないねえ。所長さんも言ってたんだけど、彼らと『レンタル』及び俺個人の関連性はない。たとえ彼が証言したとしても妄言として処理されるだろうね。君のおかげで例の研究所は、状況からして相当数の能力者集団によって襲撃された、とされているから俺一人で

は不可能だと判断される。問題はないよ。それより情報は役に立った？」

『はつきり言つて、微妙だな。とりあえず他の風紀委員に警告はしたが、他の情報は確実性にかけるとかで様子見だとさ。どうにもならん。』

「ナナシくんがいけばいいじゃないの？」

『俺もそうしたいんだが仕事押し付けられて外に出れん。頭脳労働は俺の仕事じゃないっつーのにな。』

「お花さんに任せたら？」

『いねー。っーかサボりがちな俺よりサボってんじゃねーか、初春のヤツ？ちゃんとして欲し』七篠先輩！ちゃんと仕事してくださいですの！！』ウッセー白井！ちゃんとやってるっーの！っーわけで切るぞ。』

「はいはい。．．．．．さて、何か面白い事でも起きないかなあ．．．．．ん？」

そんな時ふと上条の姿が目に入った。声をかけようかと思えば彼は幼い女の子と手を繋いでいた。

「まさか．．．カミヤんが幼女嗜好ロリコンだったとはねえ。身近に合法ロリリアル（モエちゃん）がいるにも関わらずあえて違法の方に行くとは．．．」

上条はおそらく幼女嗜好ロリコンではありません．．．．．多分。

実際は女の子に道を聞かただけなんだろうなあ、と理解しながらも影宮はからかうネタが増えたと考えていると、こんどはある光景が見えた。

「・・・・・・・・見つけたあ」

その瞬間にニヤアっと口角が上がったのを自覚したのは少ししてからだった。

## 日常と非日常の境（後書き）

地の文とはいえ、佐天さんと呼び捨てで書くのは違和感があります。

## 虚空爆破事件の解決（前書き）

前回よりも原作通りです。それでも良い方はどうぞ。

## 虚空爆破事件の解決

（クソがつ！何やってんだよっ！！）

——少年は虐められていた。

（掃除する所が違うだろ！！無能力者レベル0がこの僕に暴力を振るってんだぞ何が風紀委員だ！！）  
ジャッジメント

——治安維持のためにある風紀委員はいつも来なかった。

（オマエラが無能だから僕がこんな目に遭うんだ）

——少年は思った、“力”が欲しいと。

（気付けよ・・・！！）

——そんな時、偶然、強さレベルを簡単に上げれると噂されているモノを手に入れた。

（新しい世界が来る。僕ボクが僕ぼくを救う。僕ぼくを救わなかった風紀委員は  
いない）

——そして“大能力”チカラを手に入れた。

UFOキャッチャーでとったカエルのぬいぐるみを手に取った時に少女三人とすれ違った。その内の一人の袖には風紀委員の腕章がついていた。

少女たち三人は楽しく雑談しながら洋服店セブンスミストに入っていく。一人の少年が見ていた事にも気付かずに。

しかし少年は気付かなかった。その時、自分が獲物を見つけて笑っていたように、少年を見つけて笑っている人物がいることに

美琴たち三人は他愛のない事を話しながら服を見ていた。超電磁砲の弾はゲームセンターのコインだとか、50メートルも飛んだら溶けてしまふとか、佐天が初春にヒモパンを薦めたりとか、これならスカートめくつても堂々としていられるだろうとか、まずスカートをめくらないでくださいとか、何を探しているのかとか、いいパジャマが見つからないとか……

そんな時美琴は自分の求めていたようなパジャマを見つけた。同意を得ようと二人に聞こうとするが……

「ね、ね、コレかわ……」

「アハハ見てよ初春このパジャマ！！スッゴイセンス！こんな子供っぽいいまどき着る人いないっしょ」

「小学生の時くらいまではこういうの着てましたけどねー」

全否定されていた。

「そ・・・そうよね！中学生にもなってこれはないはよね」

恥ずかしくなった美琴はこれに氣に入った事を黙っておく事にした。

「あ、あたし水着も見えておこうかと思うんですけどいいですか？」

「ええと・・・水着のコーナーはあっちですね」

二人が水着コーナーに行ったのを確認した後、美琴は先程のパジャマを手取る。

（いいんだモンどうせパジャマなんだから他人に見せる訳じゃないし！黒子は無視！初春さん達はむこうにいるし一瞬姿見で合わせてみるだけなら・・・）

もう一度確認する。二人はこっちを見ていない。誰も見ていない今がチャンス！

（それっ！！）

だが・・・

「何やってんだオマエ？挙動不審だぞ？」

上条が現われた。

「——ッ？——————ッ！？」

上条に見られて声にならない叫びをあげる美琴。

「な、な、何でアンタがこんな所にいんのよっ!」

「いちゃいけないのかよ」

「おにーちゃん、このおようふく・・・」

そこへ女の子がやってきた。

「あ、トキワダイのおねーちゃんだ」

「昨日のカバンの子・・・」

昨日美琴はとある風紀委員に風紀委員と間違えられてとあるカバンを探していたのだが、その持ち主の女の子がこの子である。

「お兄ちゃんって・・・アンタ妹いたの？」

「ちがう、俺はこの子が洋服店探してるって言うから案内しただけだ」

「あのねオシヤレなひとはここにくるってテレビでいったの。わたしもオシヤレするんだもん!」

「そうなんだ。・・・まあそれはさておき、昨日の決着を今ここで・・・」

「オマエの頭ん中はそれしかないのか。だいたいこんな子供の前で始めるつもりかよ」

「うつ」

「文句があるならすぐに視界から消えてやるから。」

女の子に入り口で待ってるからといって上条は去っていった。女の子に「なかよくしなきゃダメだよ?」とも言われてしまった。

「どうかしたんですか?」

「……別に、私ちよつとはずすわね」

(我ながら見境ないなあ)

「どうもアイツが相手だと調子狂うのよね……ん?」

化粧室から出て行き二人の所に戻ろうとする途中にふとカエルのマスコットが視界に入った。

「!!! (ゲコ太?)」

ゲコ太：美琴ご執心の某メーカー製のカエルのマスコット。乗り物に弱く、すぐにゲコゲコしてしまうという設定。

(じゃないか。つーか全く似てないわ。でもあの人あんなとこでぬいぐるみ持って何やってんだろ)

二人の所に戻ってくると先程までいた女の子がいなくなっていた。

「あれ？あの子は？」

「あの子もお手洗いに・・・行き違いになったみたいですね」

『  
♪～♪』

その時にちょうど初春のケータイが鳴る。

「はいもしも『初春ッ！！！今どこにいますのっ！！？』

「しっ・・・白井さん！？えっと現在警邏中でありまして決してサボってる訳では・・・」

『例の虚空爆破事件グラビトンの続報ですの！』

「えっ！？」

『衛星が重力子の爆発的加速を観測しましてよ！』

「か、観測地点は？」

『今近くの風紀委員達を急行させていますの！あなたも速やかに現場に向かいなさい！』

「ですから観測地点っ・・・」

『第七学区の洋服店『セブンスミスト』ですの！』

「ラッキーです！私今ちょうどそこにいますっ！！！」

『何ですって！？初は・・・！！』

「御坂さん！」

初春は美琴たちにこの店が標的にされた事を告げた。

「何ですって！？この店が標的！？」

「そうみたいです。すみませんが避難誘導に協力してもらえますか？」

「わかったわ」

「佐天さんも早く非難を」

「う・・・うん初春も気をつけてよ」

「よしっとりあえずこれで全員・・・」

「ビリビリっあの子は？」

美琴はがらーんとした店内を見渡して誰もいない事を確認する。そこへ上条が走ってきた。

「は？まだ戻ってなかったの？」

「人が多すぎてよくわかんねーけどたぶんまだ・・・」

その二人から少し離れた所で初春は誰か避難していない人がいないか確認していた。

『初春ッ！！初春！！聞きなさい！』

先程から繋がったままのケータイから黒子の声が聞こえてくる。

「今全員避難したか確認を・・・」

『今すぐそこを離れなさい！！！！』

初春にとっては予想外の発言だったのかもしれないが黒子は構わず続ける。

『昨日七篠先輩が持ってきた資料をあなたも見たでしょう！！犯人の真の狙いは観測地点周辺にいる風紀委員！！今回のターゲットはあなたですよ初春っ！！』

「おねーちゃん」

そこへ先程の女の子がやってきた。

「メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

女の子は手に持っていたカエルのぬいぐるみを初春に差し出す。

「よかった無事だったみたいだな」

「（あれはさっきの・・・？）」

その時、ぬいぐるみが収束を始めた。

「ッ!!!?」

初春は咄嗟にぬいぐるみを突き飛ばし女の子を庇う様にして抱きかかえる。

「逃げてください!!あれが爆弾ですっ!!!!」

収束速度が高まり、ぬいぐるみの原型が分からなくなってきた。

「(レールガンで爆弾ごと吹き飛ばすッ!!!)」

しかし手を滑らしたのか、とりだしたコインが指からすり抜けて床に落ちていく。そして爆弾の収束はさらに高まり――

(マズった!!間に合――)

ド  
ン  
ッ

「キャ――!!!!」

「何だ！？爆発？」

「例の連続爆破テロだって！」

「逃げ遅れた人がまだ中にいるみたいだぞ」

「風紀委員の子を見たって・・・」

「危険です！危ないからさがって！！」

爆発音で野次馬が集まり風紀委員が何とか落ち着かせようとする中、一人の少年は爆発を気にする事なく裏路地に入ってしまった。

「ククク・・・」

（いいぞ今度こそ逝っただろう）

「スゴイツ！スバラシイぞ僕<sup>ボク</sup>の力！！徐々に強い力を使いこなせるようになってきたッ！！」

少年は周りに誰もいないと思ったのか、大声で独り言を言い出した。

「もうすぐだ！あと少し数をこなせば無能な風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>もアイツラもみんなまとめて・・・吹き飛ばッ・・・！！？」

その瞬間に彼は蹴り飛ばされた。

「ゲフッ！！？？な！？一体何が・・・？」

「はい、用件は言わなくても分かるわよね爆弾魔さん」

爆破犯が自分だと見抜かれて驚愕するがなんとか平静を保ち、とぼける事にする。

「な、何のことだか僕にはさっぱり・・・」

「まあ確かに威力はたいしたもんよね。実戦向きじゃないけど。でも残念、死傷者どころか誰一人カスリ傷一つ負ってないわよ」

「なっ！？そんなバカなっ僕<sup>ボク</sup>の最大出力だぞ！！」

「ほう」

美琴の予想外の発言に驚愕を隠せなかった少年は

「はっ！？い・・・いや外から見てもスゴイ爆発だったんで中の人はとても助からないんじゃないかと・・・」

そっぴいながら後ろ手で鞆を漁り、爆弾の素となるスプーンを取り出す。が

ドンッ

それを取り出して掲げた瞬間に目で追いきれないほどの何かがスプーンを撃ち抜いて少年の顔の横に抜けていった。

美琴から電流が漏れ出す。それをみて、少年は目の前の少女が何者か思い至る。

「と、常盤台の『超電磁砲』<sup>レールガン</sup>」

飛ばされたスプーンに気を取られている間に美琴は腕を取り地面に組み伏せる。

「うげッ」

「暴れてもいいけど今の私に手加減できる保障はないわよ」

「ハッ！今度は常盤台のエース様か」

「あ？」

「いつもこうだ何をやっても僕は地面に・・・ねじ伏せられる・・・  
・・・殺してやるッ！！お前みたいなのが悪いんだよ！！風紀委員  
だつてッ・・・力のあるヤツなんてのはみんなそうなんだろうが！  
！」

「・・・・・・・・」

少年がそういったあと、何も言わずに美琴が少年の腕を放す。少年が不思議に思っていると美琴はいきなり放電する。そして語り始めた。

「知ってる？常盤台中学の超能力者<sup>レベル5</sup>は元々単なる低能力者<sup>レベル1</sup>だった。それでもそいつは頑張つて頑張つて頑張つて・・・超能力者と呼ばれる力を掴んだのよ。でもねっ、たとえ低能力者のままだったとしても私はアンタの前に立ち塞がったわよ。アンタのやった事は許せないし、それ以上に力に依存するアンタの弱さに腹が立つ。そっちにはそっちの事情があるんでしょうけど、相談に乗る前に一発殴ら

せてもらっわよっ!」

次の瞬間、路地裏にゴンツという音が響いた。当たり所が良かったのか悪かったのか、少年は気を失ったようだ。

「ふう・・・」

美琴が一息ついたその時

パチパチパチ

どこから拍手の音が聞こえてきた。どうやら表通りのある後ろの方にいる誰かが叩いているらしい。

「いやー、お見事だねえ。『超電磁砲』御坂美琴。」

振り返るとそこには紺色の髪をした少年、影宮刻が立っていた。

「アンタ、誰？」

「あれ？憶えてないの？まあいいや、俺は影宮刻。」

「で、アンタ何者？ていうか拍手の意味がわかんないんだけど？」

「いやなに、噂に違わぬ実力で虚空爆破事件の犯人を確保したことに対してだけ？ただレールガンを撃つ場所くらいは配慮したほうがいいと思うけどねえ。こんな閉塞した空間で撃ったら二次災害とか起きないの？」

「ちゃんとそういう事も考えて手加減したわよ。で、どうしてアン

タはコイツがさっきの事件の犯人だつて知ってんのよ?」

その質問に影宮はニヤリと笑みを浮かべながらこう言った。

「・・・何でだと思う?」

その笑みを見た美琴は影宮が黒幕、少なくとも事件に何らかの関係があると確信した。

「・・・とりあえずアンタを捕まえてから聞くことにするわ。」

美琴の前髪からバチバチと電撃が漏れ出す。

「おお、怖い怖い。そんなに俺のこと知りたいんだつたら、オセロかお花さんにでも聞いたらいいいよ。じゃまたね、ミサちゃん。」

「み、ミサちゃ!?!」

そう言つて影宮は表の通りへと戻つていった。

「つて待ちなさい!!」

影宮の呼び方に反応して一瞬動きを止めていた美琴も後を追いかけるようとするが、その時風紀委員の腕章をつけた女の子が表通りから入ってきた。

「ジャッジメント風紀委員です。こちらに虚空爆破事件の容疑者の少年がいるという通報を受けたのですが・・・。」

「え？」

美琴は思わず声を出してしまった。犯人がわかったのは本当につきさつきの事だし、美琴は洋服店で爆弾に使われた人形を持った男を見ていたからこそすぐに捜しに来た。

（犯人の居場所どころか私がここにいる事すらわからないはず。そもそもまだ私は通報していないのになんで犯人が男だってわかるの！？）

「どうしました？」

「あ、えーっと、あそこにいるヤツです。」

「ご協力感謝します。」

風紀委員の女の子が一礼してから犯人の方へ向かうと、美琴も急いで表通りに出るが、影宮の姿を見つけることは出来なかった。

「あの・・・容疑者の少年を確保した模様です」

「・・・了解ですの」

黒子は事件現場を見て考えていた。誰がどうやってこのような状況を作り出したのかを。

「白井さん」

「ああ初春無事だったようですね」

佐天が黒子を見て「また常盤台のヒトだ!!」と驚いていたがそこは割愛。

「御坂さんのおかげです。」

「トキワダイのおねーちゃんが助けてくれたの」

「「ねー」」

「お姉様が・・・?」

（初春達がいた場所だけ全くの無傷だなんて・・・能力をどう使ったらこういう風になりますの?）

爆破現場は初春達がいた一部を除いた所が焦げたり備品が破損したりしているのにも関わらず、その初春達のいた一部には破損どころか焦げの一つもないという奇妙な状態だった。

黒子は知らない。異能の力ならば神様のシステムすら無効化できる右手を持つ少年の存在を。その少年が美琴も含めた三人を救った事を。そしてその少年に「誰が助けたかなんてどうでもいいことだろ」と言われて八つ当たりで壁を蹴りまくっている愛しのお姉様の事も。

## 虚空爆破事件の解決（後書き）

早く禁書目録編に行きたいです。

## 夜の逃避行

終業式を終え、太陽が照りつける放課後、黒子は考えていた。

「う~~~~む・・・」

「どうしたのよ難しい顔して」

「お姉様、昨日の虚空爆破事件の犯人、本当にお姉様が捕まえた男で正しいんですの？」

「そうだけど？」

美琴は男から自分がやったことを認める言葉を聞いたのでそれは間違いないはずだ。

「『<sup>バンク</sup>書庫』の登録データでは容疑者の能力は<sup>レベル2</sup>異能力判定となってますの」

「うそっ！？明らかに<sup>レベル4</sup>大能力クラスの破壊力だったわよ」

<sup>レベル4</sup>大能力者でない<sup>レベル2</sup>とあの爆発は起こせない。しかし、捕まえた犯人は<sup>レベル2</sup>異能力者

「ええ、ですからこれはつまり・・・」

「ミンミンミンミン・・・」

「どういう事なんでしょう？」

「・・・・・・・・」

そこで美琴は昨日現場で話した男の事を思い出した。

「あ、そういえば昨日怪しいヤツ見つけたわよ。確か『影宮刻』とかいう男」

「・・・・・・・・今何と？」

黒子の目が点になる。

「え？だからその影宮ってヤツがあやしいと思うのよね。何か詳しく知れたかったら『オセロ』か『お花さん』に聞けとか言ってたわ・  
・何の事が分からなかったけど。」

美琴がそういうと黒子は自分の頭に手をやってため息をついた。

「・・・お姉様・・・・・・・・不本意ではあるのですが、そのオセロ  
というのはおそらくわたくしの事かと思っていますの・・・」

「・・・・・・・・へ？」

「その方は時々わたくし達の支部に来ることもあって、先輩経由ではあります。が風紀委員に情報を渡すこともあります。今回の件でも情報を頂きましたので、その方がこの件に関わってる事はないか  
と思いますの。」

「でも、アイツ黒幕っぽい事言ってたんだけど・・・」

「からかわれたのでは？あの人はムダに人をおちよくる癖があるようですので。」

黒子もおちよくられた経験があるのかどこか嫌な顔をしている。

「つまり、アイツはシロってわけか・・・」

「ええ、ですから結局・・・」

ミンミンミンミン・・・

「どういう事なんでしょう？」

「・・・・・・・・」

ふりだしに戻った。

「ま・・・まあ煮つまってるなら一度休んで頭を切りかえましょ」

そういつて美琴が指差したのはカキ氷屋だった。

チリリン・・・・・・・・

美琴はイチゴ味を頼み、黒子も同じものを頼んだ。

「不思議なものですわね。気温自体は変わらないのに風鈴の音色を聞くと少し涼しく感じますの」

「あー共感性ってやつね」

「？」

「一つの刺激で二つの感覚を得る事よ。例えば普通色を視たら人間の脳みそって五感の内視覚のみを得るわけじゃない。でも赤系の色を視たら暖かく感じたり青系の色を視たら冷たく感じたり視覚以外にも影響があるでしょ」

「『暖色』『寒色』というものですわね」

「これなんかもそうよね」

受け取ったイチゴ味のカキ氷を指して続ける。

「ああ、シロップの味に色のイメージをプラスしてますのね」

「人間の頭って意外とカンタンっつーか」

「ユーモアがわかるんですのよ」

その時、前方から佐天がやってきた。

「御坂さん、白井さん、昨日はお世話になりました」

「お、佐天さん。」

佐天もレモン味のカキ氷を購入し、公園にある木陰のベンチに腰掛

けて話し始めた。

「初春さんの容態はどう？」

初春はどうやら昨日の無理が祟ったようで風邪がひどくなったそう  
だ。

「熱自体は大した事ないです。あたしが買ってきたのも風邪薬じゃ  
なくて熱冷ましでしてむしろ一番欲しかったのは暇つぶしの道具  
かも」

「まあ一日中ベッドの上では・・・」

その時、黒子は信じられないものを見た。

「イチゴ味一口いただいてもいいですか？」「あ、いいわよ」

「!？」

「おかえしにレモン味をどうぞ」「ありがとう」

なんと愛しのお姉様が佐天と力キ氷を<sup>かんせつキスをし</sup>食べさせあっていたのだ。  
(笑)

「キヤーッ！なッ・・・何してるんですのおおおオッ!？」

「え？食べ比べですけど」

「た、食べ比・・・ハッ!？」

その時黒子に天啓が閃いた。自分もお姉様と食べ比べをすれば、それすなわち間接キス。お姉様も食べ比べなら邪険にはしないはず！そこから・・・・・・・・・・うえっへっへっへっへ？となれば善は急げ！！

「で、ではわたくしとも間接キ・・・もとい食べ比べを・・・」

「いやアンタ私と同じの注文したじゃない」

黒子は悔いた。何故お姉様と同じものを頼んでしまったのかと。戒めのためにか地面に思いつきり頭を打ちつけながら。

「そっついや佐天さん、昨日話してた『幻想御手』<sup>レベルアップ</sup>ってのもう一度詳しく黒子に聞かせてやってもらえないかしら」

佐天は黒子に『幻想御手』<sup>レベルアップ</sup>について説明した。

「能力の強さ<sup>レベル</sup>を格段に上げる？使うだけで簡単に？」

「いやだから噂ですって！あたしが言ってるわけじゃないですよ？実体もよくわからない代物ですし・・・・・・・・・・。どこかの学者が遺した論文だとか料理のレシピだとか噂の中身もバラバラで・・・」

「まあ普通、能力の開発って学校で何年もかけてするもんだしそんな都合のいい話があるかって思うけど、タイミングが良すぎるのが気にならない？」

「実は・・・・・・・・・・犯人の登録された能力の強さ<sup>レベル</sup>と被害状況に食

違いがあるケース・・・今回が初めてではありません。数件ではありますが、すべてここ最近立て続けに起こっています。『バンク書庫』のデータミスか確認を急いでいたのですが・・・」

「佐天さん！」

「はっはい!？」

「何か他に知ってる事はない？」

「え・・・え〜とぉ、自称なんですけど『幻想御手』を使つたって奴らがネットに書き込みをしてるみたいですけどただ怪しい連中っていうか不良っぽいのかでどこまで信用できるか・・・」

「どう?」

「信じられませんが・・・そういったものが実在するのなら一連の事柄に説明はつきます。一応当たってみる価値はあるかもしれませんわね」

「ありがとね佐天さん」

「あついえ・・・」

そういつて急ぎ足で去っていった二人を見届けてから、呆然とし、そして気付く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え?『幻想御手』ってマジモンなの?」

「——ええい！くそっ！くそっ！あーもうちくしょー不幸すぎますーっ！！」

「キミといると退屈しないけど、どうしたらこういう状況になるのか知りたいねえ。確かファミレスでご飯を食べようとしてたはずなんだけど。」

きつと七月十九日が悪いんだ。（実際には関係ないのだが・・・）明日から夏休みだー！などと尋常ではないハイな気持ちになったからこそ、書店では、影宮にもやめたほうがいいと言われた、表紙を一目見ただけで地雷と分かるマンガを手にとり、お腹もすいてないのに一丁豪華に無駄食いするかーとファミレスに入り、酔っ払った不良に絡まれる女子中学生を見て、思わず助けてやっかなー、とか常軌を逸した思考回路が働いてしまったのだ。まさかトイレからぞろぞろと仲間が出てくるとは思わなかった。

「集団でトイレへ行くのは女の子の特権だと思ってました！はい！」

「あーそれは俺もビックリしたね。まさか三人だった不良が十人近くまで増えるとは・・・このスライムLv.8だよ」

もうかれこれ2キロ近く走っているがまだ八人もいる。単なる高校生の上条一人で何とかなる相手ではない。なによりこれは『人助け』なのだ。夏休み前の夜の街で表と裏の通行を行ったり来たりして、

幸せいっぱいのカップルたちを引き裂くように走っていく。

「・・・カミヤん、もう逃げるの飽きてきたし、合体してキングになる気配もないし、殴って終わりにしたいんだけどどうかなあ」

「ダメに決まってるだろーが！！つーか合体って何の話だ！？」

ここで冗談でもOKを出したらコイツは本当に殴りに行きかねない。そのまま全員倒してしまうかもしれないが。・・・影宮なら有り得そうで怖い。だが、今回の目的はあくまで『人助け』であって『撃退』ではないのだ。不良にさらなる援軍やバイクの調達に行かせないようにこのまま着かず離れずの距離を保って、機能性ゼロのブーツでペース配分無視の全力疾走させ、タバコや酒で弱った体をダウンさせるのがベストなのだ。

「おるあ！！ちくしょうこのクソガキども止まれやこの逃げ足王！！」

「ほら、向こうも真つそれ向勝負を望んでるみたいだよ。」

「うるっせえ！ぶん殴られねえだけ感謝しやがれサル並野郎！」

何故こんな事に青春をかけなきゃいけないんだと思いつながら鬼ごっこは続いた。

さらに2キロ走った辺りで長さ150メートル程のライトアップもされてない無骨な鉄橋に差し掛かった辺りで後ろを振り向くと不良は見当たらなかった。そのままへたり込みたくなかったが、何とかこらえて空を見上げながら息を整えていった。

「ふう、どうやら撒いたみたいだねえ。」

コレだけの距離を逃げ切って息切れ一つしてないコイツは化け物か、  
と思ってしまう。が、これが影宮なのだ。

「それにしても女の子を助けるために行動するなんてカミヤんらしいなあ。」

「は？い、いや・・・お、俺が助けようとしたのは、女の子じゃなくて・・・」

「何やってんのよアンタ。不良守って善人気取り？」

その声にぎよつとする。暗闇の中、上条たちが走ってきた方から先  
程まで不良達に絡まれていた少女、御坂美琴が現われる。

「・・・・・・・・つーことはあれか、後ろの連中が追ってこないのは・  
・・・・・・・・」

「うん、めんどいから私が焼<sup>ヤシ</sup>いとした」

「人がせつかく・・・」

「なるほど、そういうことねえ」

上条の目的は『人助け』だった。ただし、不良達から少女を助けよ  
うとしたわけではない。少女から不良達を助けようとしていたのだ。

「まったくアンタのせいで情報取り逃がしちゃったじゃない」

「情報？」

「才能の不足をズルして補う裏技の噂があつてねー」

「何だそりゃ？」

「『<sup>レベルアップ</sup>幻想御手』か。その存在にもう行き着くとは予想より早かったなあ。」

「！？アンタ、『<sup>レベルアップ</sup>幻想御手』の事知ってるの！？」

「さあねえ。どうだろうねえ。」

睨み付ける美琴と薄い笑みを浮かべる影宮。それぞれ知り合いのようだが、美琴は影宮を良く思っていないようだ。

「つーか結局何なんだ、そのレベルアップってのは？」

「頭の開発を時間割に組み込んでる学園都市には『神様の頭脳』の副産物の噂が色々あるのさ。」

「例えば、私のDNAマップを元に作られた軍用クローン『<sup>シスターズ</sup>妹達』がどこかの研究室で開発されているとかね。」

影宮の説明を美琴が補足する。仲がいいのか悪いのか、上条にはいまいち分からない。

「はあ、何だかよくわかんねーけどお前も大変なんだな。じゃ、俺はこれで」

そういつて立ち去ろうとするが、美琴に電撃を撃たれる。本来、光の速さで飛んでくる電撃を防ぐことなんてただの無能力者<sup>レベル0</sup>には出来ないが、上条には幻想殺<sup>イマジンブレイカー</sup>という、異能の力ならば神様の奇跡<sup>システム</sup>すら破壊できる右手を持っているので難なく（本人にしては必死なのだが）電撃を打ち消す。ただこの右手の力は生まれつきのもので、学園都市の計測機器には感知されず無能力者<sup>レベル0</sup>と認定され、異能の力以外には全く効力がないので不良の一人も倒せず、この力があるが故にこうして美琴にケンカを吹っかけられることを考えれば、この力を授かったことを『幸運』と言うべきなのか『不幸』と言うべきなのか悩まれる。

「………ていうか。強者の余裕ってヤツかしら」

「は？」

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけで力を手に入れ、そこに辿り着くまでの辛さをまるで分かってない——マンガの主人公みたいに不敵で残酷な台詞よ。アンタの言葉。」

そんな事を言われても自分の事を強者だと思っていない上条にとってはどうしようもない。直せと言われても自分の思っている事を言っているだけなのだから。

「フ、クク………」

そんな時、いつの間にか上条のななめ後ろに待機して電撃が飛んできて自分に来ないようにしていた影宮が笑い出した。

「何がおかしいのよ？」

「いや、ただミサちゃんの言った事の方が残酷だと思ったただだよ。」

「………何ですって」

「キミの発言は全て強者の理論だ。弱者の視線には全く立っていない。立とうとしてもしていない。もしくはすでに立っている気ではないかな？おそらく自分と対等な存在がいなかったためにほぼ全ての人間を自分より下に見ている。ただ、キミ本人はそれが普通だと思っ込んでいるから気付いていない。」

「ちがつ」

「キミはさつきと同じような台詞を低レベル能力者の友人の前で出来るかい？出来ないのならそれは彼らを見下していた証拠だし、出来るのなら救えないくらいの愚者だ。」

そう言いながら影宮は上条の側から離れ、暗闇の中へ入っていく。

「ミサちゃん、キミは生まれ持った才能があつたからこそ努力で超能力者になれたんだよ。キミと同等もしくはそれ以上に努力してもレベル一つ上げれない人たちは山のようにいるからね。キミにとってはまたげる壁も、他の人にとっては上の見えない壁であるかもしれないんだよ。」

「お、おい影宮、そろそろやめといた方が……」

上条はしばらく黙っていたがそろそろやめとかないと電撃が飛んでくる気がしたので影宮を止めたのだが、影宮は喋り続ける。

「キミは強者の余裕って言ったけどカミさんはただ自分の分相應な行動をしているだけだよ。それだったら自分の都合でカミさんに何回もケンカを吹っかけてるミサちゃんの態度の方が強者の余裕ってヤツなんじゃないのかな？」

「うるさい!!」

やはりというか、ついに美琴が影宮に電撃の槍が放つ。光の速さを誇る電撃の槍は避けることも防ぐことも困難である。しかし、

「え!?!」「な!?!」

「ま、それが悪い事だとは俺は思わないけどね。」

電撃の槍は当たることなく霧散し、美琴と上条は驚くが、影宮はそれが当然だというように話し続ける。

「ま、強者なりに弱者のことも一応考えているようだし、弱者の視線で見れないのは経験不足だろうからこれから見れるようになるかもしれないんじゃないかもしれない。ま、どっちにしても『御坂美琴』という人間性が消えなければいいんだけどねえ。」

そういつて影宮は締め括った。

「どうだったかな？俺からミサちゃんへの人生のアドバイスは？役にたったかな？」

「え、ええ……じゃなくて！アンタ、一体何したのよ!? 何でアンタにも電撃が効かないのよ!?!」

「フフ、それはスライムナイトに『なんでスライムなの？』って聞くのと同じくらい愚問だよ。」

「何ワケわかんない事言ってるのよ!!」

「うん、俺も自分で何言ってるのかよくわかってないよ」

「っザケんな!!」

またバチンツと電撃の槍が放たれるが、また影宮に届く前に霧散する。

そこで上条は気付く。影宮が影の濃い所に移動しているのを。本人から聞いた話だと確か影宮は影を操る能力を持っているらしい。詳しくは知らないが、おそらくその能力で何とかしているんだろう。だが、システムスキャン身体検査では影宮も無能力判定を受けていたような気がするのだが、はたしてどうやって電撃を防いでいるのだろうか？

そんなことを考えていると影宮から声がかかる。

「それじゃ、俺は帰るから、後はよろしくね、カミヤん。ミサちゃんもまたねえ。」

「は？」

前を見ると美琴が尋常じゃないくらいビリビリしていて、上空には雷雲が立ち込めている。美琴はこの学園都市最強の電撃使いだ。全力を出せばこのくらいできるのかもしれない。

「ちょ、おい!?!」

状況を把握し、これの原因であろう影宮を探すですでにいない。さつきまで声聞こえてたのにあのヤロウもう逃げやがった。

とりあえず状況を整理してみよう。

- 1、雷雲がゴロゴロしている
- 2、ビリビリ中学生がビリビリしてる
- 3、おそらく雷雲はビリビリ中学生によるもの
- 4、おそらくあれはストレス発散がてらに落とされる
- 5、ここにいたのはビリビリ以外は二人だけだった。上条は何もしないから原因は影宮
- 6、今ここにいるのはビリビリ以外に上条一人
- 7、ビリビリが雷をぶつける事のできる人間はこの場に一人  
ストレス  
イマジネーションプレイヤー
- 8、雷は上条の右手で消す事はできる
- 9、ただ、余波までは完全に消せないからここ周辺の電気機器が殺られる
- 10、そしてビリビリが今まで以上にビリビリしていて見るからに  
もう落とそうとしている。

## 結論

「ふ、不幸だ――――――」

そして雷は落ちる。

## 夜の逃避行（後書き）

影宮に言いたいことを言わせて見ました。  
反省はしている。けど後悔はしてない。

魔術との遭遇（前書き）

訂正：子萌 小萌

## 魔術との遭遇

七月二十日、夏休み初日である。

「くそ暑いね・・・」

昨日原因不明（笑）の落雷によって、通常なら家電製品の八割ほどが死んでいる状態のはずだが、三日前の上条の「買いだめしとかな」と発言から、そんな事もあるうかと！と冷蔵庫の中身を空にし、念のため使用時以外は電化製品のコンセントを抜いていたので、損失はゼロに抑えた影宮も流石にこの暑さは我慢しなければならなかった。

とりあえず、身支度をしてさっさとどこかに出かけようとしていた時に電話がかかってきた。

「影宮ですけど」

『あ、影宮ちゃんですかー？』

聞こえてきたのはロリボイスだが、間違い電話ではなく、学校名物の幼女先生からの電話だ。

『えつとですねー、影宮ちゃんバカじゃないどころか成績優秀ですけど補修ですー。』

「ですよー。予想はしてましたよ。これでも無能力者レベロですからねえ」

『影宮ちゃんは『記憶術かいほつ』がダメなのは仕方ないですけど、サボリ

すぎです。もつとちゃんと来てたらこんな事にはならないのに。』

「性分ですから仕方ないんですよ。だから補修もサボりたいんですけどいいですかねえ？」

『何言っちゃってるんですか！？ダメに決まってるじゃないですかー！？・・・これは黄泉川先生にお灸を据えて貰わないとダメみたいですね。』

「いやだなーちょっとした冗談じゃないですか。だから愛穂に言うのはやめてくださいよ。」

『影宮ちゃん、黄泉川先生を呼び捨てにしてはいけません！黄泉川先生は影宮ちゃんの保護者ですよ。』

ヨミカワ アイホ アンチスキル  
黄泉川愛穂は警備員でもあり、とある事情で身寄りのいない影宮の保護者代わりとなつて何かと世話を焼いてもらっていて、彼女にだけは頭が上がないのだが、今は割愛。

「はいはい、わかりました。カミヤんも連れて行けばいいんですよええ？」

先程から隣の部屋から盛大な音が聞こえてくるので起きているのは確実だ。つか他に誰がいるのか？

『お願いするですー。』

そういつて電話は切れた。

影宮は学園都市にある普通の男子寮の七階に住んでいて、上条の家はすぐ隣の部屋だ。ちなみに上条の隣の部屋に住んでいるのは土御門元春という義妹大好き男であるが、今は全く関係ないので割愛。カドモトハル  
ロリコンかつシスコンな  
身支度を済ませて部屋を出て、上条の部屋の前に行き、取り合えずドアを開ける。何故かカギがかかってなかったがまあいいだろう。

「カミヤーン、補修の時間だ・・・よ？」

ドアを開けるとそこには上条当麻ともう一人、見たことのない銀髪外国人少女が立っていた。ただし少女は真っ裸だったが。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

影宮は何も言わずドアを閉めて、ケータイを取り出し警備員アンチスキルに通報を・・・

「ちょっと待て影宮お前は盛大な勘違いをしている！！」

「別に勘違いはしてないよ。幼女嗜好ロリコンなのはなんとなくわかったし人の好みをとにかく言うつもりはないけど、コスプレ趣味を押し付けた上に少女監禁とかの犯罪に手を出したとしたらそれは友人と

して通報するのがせめてもの優しさだと思っただけどねえ。」

「通報！？事体は思っていたのより深刻だった！？上条さんはあんな幼児体形に欲情なんてしません！！」

どうやらまた何かのフラグを立てたのだらうと納得し、ふと気付く。そして部屋の中を指差しながら告げる。

「……………わかったよ、通報はしないでおくよ。とりあえず十分くらいで何とかなだめておきなよ。」

「へ？」

「……………」

上条が後ろを振り向くとそこには全裸の銀髪少女が体をふるふると震わせながら上条を睨んでいた。つか襲い掛かる三秒前？

「ちよっ！？インデックぎゃー！？」

影宮がドアを閉めた瞬間、学生寮に上条の悲鳴が響き渡った。平和な朝である。

十分立つても出てこない上条にイライラしながらも、子萌先生に連

れてくると言ってしまった以上待たないといけないと、ちよつとした悪戯に上条の部屋のドアノブに静電気を溜めながら、さらに待つ事五分、人が出てくる気配がしたのでドアから少しはなれると、ドアが開いた。

上条の部屋から出てきたのは上条ではなく先程の銀髪少女が至る所が安全ピンで留めてある純白の修道服（何故か頭のフードがない）を着て出てきた。それに続いて上条も出てきたかと思うと、ドア枠に足の小指を強打して奇声をあげる。その声に反応して少女はビクンツと振り返る。

あまりの激痛に暴れようとしていた上条のポケットから携帯電話が滑り落ち、そのまま固い床に激突した液晶画面が致命傷を負った。  
南無。

「う、うつうつう！ふ、不幸だ」

「不幸というより、ドジなだけかも。けど、イマジンプレイヤー幻想殺しってというのがホントにあるなら、仕方がないかもしれないね。」

「……、どゆことでせう？」

「うん、こういうこっちの世界のお話なんて君はきっと信じないと思うけど。」

こっちがどっちか影宮には全くわからないが、少女にはそんなこと関係ないので続ける。

「神様のご加護とか運命の赤い糸とか。そういうものがあつたとしたら、君の右手はそういうものもまとめて消してしまっているんだと思うよ？『歩く教会』にあつた力も神の恵みだラッキーだからね。」

「待てよ。幸運だの不幸だのって言葉は確率と統計のお話だぜ？んなのある訳……ッ！」

上条がそう言った瞬間、ドアノブに触れていた上条の指に、先程ひたすら溜めておいた仕返し用の静電気が襲い掛かったのか反射的に体がビクンと震えると、筋肉がへんな風に動いたのかいきなり右足のふくらはぎがつったようだ。

「ッ！！と悶絶する上条。しばらく再起不能だろうからほっとくことにしよう。それよりも気になることがある。」

「で、いきなりで悪いんだけど、結局キミは誰なんだい？」

「む、そついう君こそだれなの？」

少女の質問も確かである。

「俺は影宮刻。そこで悶絶してるバカの友人で隣人さ。幼女先生との補修のお誘いにきたら、どうやらお取り込み中だったみたいだから待ってたんだよ。今度はキミの番だよ。」

「……この人の友達なら大丈夫かな？」

そう小声で言ってから少女は自己紹介を始める。

「私の名前はね、インデックスって言うんだよ。見ての通り、教会の者です、ここ重要。あ、バチカンの方じゃなくてイギリス清教のほうだね。」

「インデックス？」

（偽名つばいな。まあいいんだけど。シスターってことは『目次』のほうじゃなくて『禁書目録』の方が名前の由来かな。）

そこでふと疑問に至る。

「・・・イギリス清教って、インちゃんは学園都市に何しに来たんだ？」

イギリス清教とは十字教の一種で基本的にイギリス国内にしかない。インデックスがイギリス清教の正式な修道女ならわざわざイギリスから日本にある学園都市までやってきた事になる。そこまでの理由は何なのだろうか？

「うん？えつとね、屋上から屋上に飛び移ろうとしてね、ホントは飛び移れるはずだったんだけど飛んでる最中に背中を撃たれてね、それで落っこちてこの人の部屋のベランダに引っかったの」

どうやら影宮の学園都市（うに）というのを上条の部屋（うに）と勘違いしているようだ、そこはまあいい。ただ気になる言葉がちらほらあった。

「撃たれた？」

「傷なら心配ないよ。この服、一応『防御結界』の役割もあるからね」

「・・・このアイアンメイデンが？」

「・・・今は壊れちゃったけど・・・」

信じられないが、この安全ピンまみれの修道服が彼女の身を守った

らしい。しかし『防御結界』とは何だろうか？防弾チョッキの一種なら影宮が知らないはずがないのだが・・・。

「てか誰に撃たれたんだ？と言うより何で撃たれたんだ？」

「うん、私が禁書目録インデックスだから、私の持つてゐる十万三千冊の魔道書を狙つてゐる魔術師に追われてゐるの。」

この学園都市ではありえない言葉が聞こえてきた。

魔道書？魔術師？魔術？

「・・・魔術なんてものが、本当にあるのか？」

「あー！ときも魔術なんてないなんて言うの！？魔術はあるもん！超能力は信じるのに魔術は信じないなんて変だよ！」

インデックスがわめく。おそらく上条に否定されたのだろう。超能力開発を科学的に解明している学園都市の人間ならば、普通魔術オカルトなんて非現実には絶対に信じずにろくに話を聞くこともなく否定するだろう。

ただ表裏関係なく『レンタル』の仕事をしてきて、尚且つこの学園

都市において常に情報収集をしてきた影宮は普通ではなかった。

「・・・・・・・・」

「あれ？どうかしたの？」

（ありえない事はない・・・・・・・・もしあるとしたら今までの微妙な情報の食い違いも納得できるけど・・・・・・・・）

考え込む影宮にインデックスの言葉は届いていないようだ。

（・・・・・・・・魔術の情報が圧倒的に足りないなあ。）

「ねえ、インちゃ・・・・・・・・あれ？」

思考の海から戻ってインデックスに質問しようとするが、そこにはすでに彼女の姿はなかった。影宮はいつの間にか復活している上条に尋ねてみる。

「カミヤん、インちゃん何処行っただ？」

「インちゃんってインデックスか？アイツなら掃除ロボ追ってもう行っちゃったぞ」

「・・・・・・・・まだ聞きたい事があったのに・・・・・・・・」

どうやら思考の海を漂っていた時間は思っていた以上に長かったようだ。何故彼女が掃除ロボを追っていったのかはわからないが・・・・。

教訓、考えにふけても周囲には気を向けよう

「はい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまずは配るですー。それを見ながら今日は補修の授業を進めますよー？」

一年七組・担任の月詠小萌は、身長135cmで安全面の理由からジェットコースターの利用をお断りされたという経歴をもつ、誰がどう見ても黄色い安全帽に真つ赤なランドセル、ソプラノリコーダー標準装備の十二歳にしか見えない学園七不思議どころか学園都市の都市伝説と化している酒飲みで愛煙家な幼女先生である。

「おしゃべりは止めないですけど先生の話は聞いてもらわないと困るですー。先生、気合を入れて小テストも作ってきたので点が悪かったら罰ゲームはすけすけ見る見るですー」

「ってかそれって目隠しでポーカーしろってあれでしょ先生！ありや透視能力専攻の時間割だし！手元のカードも見えないのに十回連続で勝てるまで帰っちゃダメとか言われたらそのまま朝までナマ居残りだとわたくし上条当麻は思うのでせうが！」

「はいー。けれど上条ちゃんは記憶術かいほつの単位足りないのですどの道すけすけ見る見るですよ？それにできないなんて決め付けてはだめですー。影宮ちゃんは十回連続で勝ててましたよー」

うわあと小萌先生の言葉に絶句した後、つてえええ！何で勝てんのおまえ！？という視線を上条から向けられているが影宮は無視しながらレポートを書き進める。

このレポートは後で各補修科目の教師に渡して補修をチャラにしてもらう裏取引のためのレポートである。今回はちゃんと受けようかとも思った影宮だったが、やめた。

（調べたい事が出来たしね。）

なにやら上条と青髪ピアスがなにやら色々ともめているが無視。

ちなみに青髪ピアスは一女の子なら何でもいける男で何故かこのクラスへんたいの学級委員であり、彼と上条とその隣人・土御門と影宮を合わせて『デルタフォースクラスの三バカ+α』と呼ばれている。ちなみに+αは成績優秀な影宮である。

そんないつもの感じで今日の補修は終わった。

補修をさっさと終わらせて、裏取引で今後の補修も帳消しになった影宮は今まで集めてきた情報を見直しながら情報収集をし、とりあえず一段落ついて家に帰ろうとしていた。

すでに日は落ちているが、夏休み初日であるし、他の学生もこのくらい、もしくはもっと遅くまで遊び惚けているだろう。

（集めた情報からいってまだ確証はないけど魔術は存在するんだろ

うねえ。それに学園都市も魔術とは少なからず関係があるんだろう。敵対関係とか不干涉協定とかかな？言ってみれば科学サイドと魔術サイドといったところか。っと考えにふけていたら朝のような事が起こるかもしれないし周りにも気を配るところ）

そう思い、周りの風景に目を向けると、なにやら学生寮近辺に人ごみが集まっている。この付近で何かあったのか？・・・・・・嫌な予感がする。急いで自分の家に向かう。

自分の部屋がある学生寮に消防車がきている。どうやら火事が起きたか誰かが火災報知器を作動させたようだ。

そこにいた警備員<sup>アンチスキル</sup>に聞くと被害者はいないが放火の疑いがあるので調査などをするため今日はここに入れないらしい。普通は「なんで自分の所に・・・・」とか思つかも知れないが、影宮はそんな不幸を呼び寄せるやつがこの学生寮にいることを知っている。

上条がどんな不幸に苛まれるか予想して落雷による電化製品の死亡すら回避した。だが、

「これはさすがに予想外だねえ・・・・・・」

部屋にはパソコン等がある。火事かスプリンクラーでダメになっていなければいいのだが・・・

「ま、バックアップは他にもあるし良いとして、今晚はどうしようか・・・・」

隠れ家はたくさんあるが、少し悩んだ末に久しぶりに保護者の家に転がり込む事に決めた。

第七学区のマンション『ファミリーサイド』二号棟十三階の一室。  
影宮はインターホンもならさずにドアの鍵を開けてその部屋に入る。

「愛穂いるー？」

靴を脱いでリビングに入って声をかける。電気がついてるのでいるはずだが……。

「んー？誰かと思えば刻じゃん。どうしたじゃんよ？」

すごいプロポーションと美貌を持ちながら、年中着ている緑のジャージのせいで残念美人に成り下がっているながら、それを全く気にしていない黄泉川愛穂は普通に返事をする。様子を見るにソファに寝そべりながらテレビを見ていたようだ。

「寮が火事でね、火はもう消えてたみたいだけど放火かもしれないらしくてねえ、その調査とかで帰れないから泊めてもらっていいかな？」

「それぐらい遠慮しなくてもいいじゃんよ。それにしても放火なんて物騒な話じゃん。」

「そうだねえ。パソコン壊れてなきゃいいんだけど……。」

部屋はものすごく綺麗にされているので、始末書などの問題が起き

て、後になってどこに何があるかわからなくなる事態になるような整理整頓を始めてしまうという悪癖を発動させたのだろう。

「そつえば、まだ何でも屋は続けてんの？」

そんな事を考えていると黄泉川が急にそんな事を尋ねてきた。

「ああ、そうだけど。無能力者<sup>レベル</sup>の奨学金だけじゃ心許ないし、いろいろとお金は必要だしねえ。」

「じゃあ、私の仕送りに全く手をつけてない上に学費まで自分で全額払ってるのは何でじゃん？」

影宮にはとある事情で親がいない。今の保護者は黄泉川だが、影宮は彼女からの仕送りに全く手を付けずに、さらに学費も黄泉川からの援助を受けようとしていなかった。さらに影宮は高校に入ってから、全くこの家に顔を出さなかった。

「学費なら私が払うし、別に寮暮らししないでここに住んでもいいじゃん。わざわざそんな事する必要あるかー？」

「・・・確かにそうだけど、依存しすぎるのもダメだと思うしねえ。」

影宮はそう言ったが、本当の理由は別にある。

影宮は少なからず学園都市の闇に関わっている。時には学園都市と敵対する時もあるかもしれない。

そうなった時、学園都市が黄泉川に危害を加える可能性があった。それ故に黄泉川が狙われないように、距離をとるために、寮に入っただのだ。

「まあ、無理にやめさせるつもりはないけどさ。ただ、依存するのと頼るのは違うじゃん。少くくは私を頼ってもいいじゃんよ。」

「・・・そうだねえ。」

ただ、いくら遠ざけようと影宮にとって黄泉川が数少ない大切な存在だというのは変わらない。黄泉川にそう言われるときっぱりと断るのには抵抗がわく。

「それじゃ、これからは何回か帰ってくることにするよ。」

甘いな、と自身で思いながらもそう宣言した影宮。対策を強化しないといけないと頭の案を練り始めた。

「うん、今はそれでいいじゃん。さて、残り物になるけど晩飯いるー？」

「もらっよ」

「それじゃあ、今から温めてくるじゃん。」

「・・・炊飯器に頼るきる癖は少しは直したほうがいいと思うけどなあ。」

「えー、いいじゃんかー。ちゃんと味と栄養と満腹感は得てるんだから問題ないじゃんよー。」

黄泉川は料理を全て炊飯器で行うという悪癖があり、そのため台所には使われてる感が全くない備え付けの調理器具と使いこまれた感

たつぷりの電子炊飯器が四台五台が置いてある。ただ本人はこれが悪癖だという自覚はない。

「まあ、俺は別にいいんだけど・・・・・・・・温め直すのはさすがに電子レンジだよねえ？」

———そうして夜は更けていく。

## 魔術との遭遇（後書き）

影宮は魔術の存在を知りませんでした。一方通行も知らなかったし・

インデックスが大丈夫っていったのは影宮が魔術師ではないだろうという事です。

## 七篠無頼（前書き）

今回は七篠くんについてのお話。

・・・正直コイツいらねんじゃね？と後悔し始めてる。

## 七篠無頼

今日は七篠無頼という人間について話そう。

彼は喧嘩好きである。これは自他共に認めている。

さらに第一印象で多いのはおそらく『近付き辛い』だろう。大柄な体に鋭い眼光、着崩した制服に十字架のネックレス。見た目は完全に不良である。スキルアウトのボスと言われたら信じてしまいうだろう。

おそらく気の弱い人間が彼に「有り金全部置いていけ」と脅されたら、間違いなく財布を放り投げ一目散に逃げていくだろう。一発殴られたらもう逆らう気力すらなくなるかもしれない。

「おい」

彼は不良ではなく風紀委員である。自他共に認める喧嘩好きの彼がジャッジメント風紀委員に入った理由は、「合法的に喧嘩ができるから」だそう。書類仕事や裏方をやる気など更々なかった。

「おい」

だが、現実は違った。風紀委員というのは基本校内活動が中心で、校外での過剰な取締りは越権行為として始末書をかかねばならない。事務仕事や情報処理はダライらしいのであまり支部には出向かない。ほとんど警邏をしているそう。ただここ最近はずっと支部に顔を出しているそうだが。

「おい、テメーだよ、ここで何やってんだ影宮よー」

「やあ、ナナシくん、思ってたより早かったねえ」

ちなみにここは風紀委員活動第177支部で普通なら風紀委員しか入れないはずだが、風紀委員でもない影宮は勝手に侵入し、今はパソコンの前に普通に陣取っていた。もちろんパソコンの電源はついている。

「んで、何してんだテメー？」

「風紀委員にある情報<sup>データ</sup>をコピーしてる。」

「バカかテメーは！？帰れ！！」

「大丈夫、正規のルートを通ってるから誰もハッキングだとは思わないよ。足もつけてないし。」

「そういう問題じゃねーんだよ！さっさと帰れ！！」

「もうコピー終わったから帰ってもいいんだけどねえ。暇だから残るよ」

「帰・れ！！」

そんなやり取りをしていると入り口のほうから黒子と初春が入ってきた。

「あれ？七篠先輩が来てるなんて珍しいですね」

「最近のテメーよりは来てるっつーの。」

「うう、それを言われるとは・・・。」

「やあ、オセロにお花さん、邪魔してるよ」

「あ、影宮さん。こんにちは」

「・・・何故貴方がここにいますか？」

「気にしたら負けだよ。そういえば『レベルアップ幻想御手』について何かわかった？」

「ええ、真偽はまだわかりませんが、・・・・・・善良な一般市民の自発的な協力を得られたおかげでわかりました。」

「・・・お前それ脅迫じゃ・・・」

「ふーん、で、手に入れたの？」

七篠の（確信に近い）疑問はスルーされて、影宮がさらに尋ねる

「いえ、これからですわ」

「これから？どどういうことだ？」

ピコン

パソコンからダウンロードの完了を知らせる効果音になる。

「ダウンロードできたみたいですね」

「これを聴くだけでレベルアップってそんな事あるんですかね」

「情報提供者の話ではそういう事らしいですよ」

情報提供者によると『幻想御手』とはとある音楽サイトの隠しペー  
ジでダウンロードできる曲のことでこれを聴くだけでレベルが上  
がるそうなのだが・・・

「正直眉唾というか・・・」

「そう思うなら試してごらんさいな。使ってみればすぐに答えが  
出ますわよ」

「えーでも副作用があるとか言われてるんですよえ。」

『幻想御手』の副作用とは、レベルが上がってしばらくすると昏睡  
状態に陥ってしまうというものだ。確証はまだないのだが、現に『  
幻想御手』をしようしたと思われる人が次々と昏睡状態に陥ってい  
るのだから、無視はできない。

「そんな危ないもの・・・はっ！これを使って白井さんいじょうの  
能力者になっちゃったら・・・今までの仕返しにあんな事や  
こんな事を・・・えへへー」

「思考がただ漏れになってますわよ。わたくしに恨みを晴らしたいのでしたら是非？」

そっいつて初春の耳にイヤホンをつけようとする。

「わー嘘です嘘ですよー」

「テメーら遊んでる暇があるなら仕事しろ。」

「あ、ナナシくんお茶いれてくれない？」

「テメーは帰れ」

七篠の一言で何とか黒子と初春の攻防は止まった。

「はうう………ちなみに業者に連絡してここを閉鎖するまでのダウンロード数は五千件を超えていますね。」

「げ」

「すごい数だね」

「全員が全員使用したわけではないと思いますがダウンロードできなくなつてからは金銭で売買する人が増えてるみたいです」

「広まるのを完全に止める事は無理……か。その取り引き場所はわかりますの？」

「ちょっと待って下さい。……はい時間と場所です」

そういつて初春は分厚い紙の束を黒子に渡す。

「ってこんなにつ！？……仕方ない、一つ一つ回っていきますか」

「え？白井さん一人でですか？」

「これが本物で実害があると実証されなければ上は重い腰をあげませんもの。まずはできる限り拡大を止め危険性を証明する。初春は木山先生の見解の方をお願いしますの」

「あ、ハイ」

「木山つて誰だよ？」

「えーっと、昨日知り合った大脳生理学の研究者で『レベルアップ幻想御手』の解析をお願いした方です。」

「キヤマ ハルミ木山春生の事かい？確か脱ぎ癖がある人だよねえ。」

「はあ？脱ぎ癖？何だそれ？」

「それはですねー……」

「そこは重要ではないでしょう、初春。……それではわたくしは行ってきますの。」

そして黒子は出て行こうとするが

「ちょっと待て白井」

「何ですの、七篠先輩？」

七篠に呼び止められる。

「それ半分よこせ」

七篠は黒子から資料の半分を取って、出口に向かう

「……………先輩が自分から仕事を手伝うなんて、どついう風の吹きまわしですの？」

「勘違いすんじゃないねー。俺はデスクワークより肉体労働の方がマシだと思っただけだ。さっさと行くぞ」

七篠無頼という人間は、何だかんだ言いながらも手伝ってくれるお人好しなのだった。

佐天は悩んでいた。

（『レベルアップ幻想御手』か。）

昨日偶然手に入れた『幻想御手』、それを初春に言おうとしたら、

喫茶店に美琴と黒子が木山春生という脳の学者と話しているのを見つけたので同伴したのだが、その時に風紀委員である黒子に『幻想御手』の保有者を捕まえる（正確には保護だが）と言っていたのを聞いて言うに言えなくなってしまうたのだ。ただそれでも『幻想御手』を捨てられないでいた。

（最初はあたしでも能力者になれる夢のようなアイテムだって思ってたけど、やっぱりエタイの知れないモノってのは怖いし、苦勞して身につけるはずの能力を手にしようってのが褒められた事じゃないのわかる。でも努力してもどうにもならない壁、生まれ持った才能の差は受け入れなきゃいけないって事？）

「そんなっ！話が違っじゃないかっ！」

いつの間にか人気のない廃ビル群を歩いていたら、男の声が聞こえてきた。様子を見てみると、三人の不良と太った男が口論していた。

「十万で『幻想御手』を譲渡すると言ったじゃないか。冗談はよしてくれ」

どうやらここで『幻想御手』の売買が行われていたようだ。

「悪いがついさっき値上げしてね。コイツが欲しけりやもう十万持つてきな」

そう言つて、金を返さないまま不良達は立ち去ろうとする。

「なっ！ふざけるなっ！だったらその金を返してくれっ！」

そういつて不良の一人に掴みかかると、腹に蹴りを入れられた。

「がふっ！うげえー！」

「ガタガタうつせーな。十万ぼっちで誰がやるかっての！」

「金ねーんならさっさと帰れデブ！」

そのまま暴行を加える不良二人。その少し離れた場所でもう一人の不良がタバコの煙を吐きながら指示を出した。

「オウ、ソイツ立たせる。お前らのレベルがそれくらい上がったか  
そいつで試してみる」

不良の二人はその発言に驚きの表情を浮かべたが、すぐにその表情は楽しげなものになる。

「ヒャーハッハア！うわキッツーオマエ今日死んじまうかもなー」

「かつ、かんべんしてくれー！」

（何だってこんなトコロで出くわすのよー。と、とりあえず風紀委員か警備員に通報を・・・）

佐天はケータイを出すか、画面には電池切れの表示が出ていた。

（ヤバ！そーいやほんとこ充電してなかった！）

「オイ、そこに誰かいんぞ」

不良に見つかった！

「なに見てんだコラ」

「文句あるならこっちこいや」

「いえ、別に、ただの通りすがりでして、これにて失礼……」

佐天はそういつてその場を急ぎ足で去った。

（しょ、しょうがないよね。あたしに何かできるわけじゃないし・・。あつちはいかにもな連中が三人。こっちは数ヶ月前まで小学生やってたんだし・・。からまれてるのはまったく面識のない赤の他人。何の義理もないんだから、ここは見なかった事に・・・・。）

しかし――

「もつ、もうやめなさいよ！」

何故か戻ってきてしまった。

「その人ケガしてるし」

（って何戻ってきてんのあたし！バカ言っていないでさっさとこの場から――）

「す・・・すぐに警備員が来るんだから」

次の瞬間、リーダー格の不良が佐天の後ろにあった壁を蹴り付ける。

「ひっ！」

「今なんつった？」

「あ・・・あ・・・」

不良の蹴りや言葉によって、佐天の身体は恐怖に支配されていた。

「ガキが生意気言っじゃねーか。何の力もねえ非力なヤツにゴチャゴチャ指図する権利はねーんだよ」

「貰い物の力を自分の実力だと勘違いしてるアホ共にその娘を笑う資格なんざねーな」

どこからか声が聞こえてきた。

声のした方に視線を向けると、そこには風紀委員の腕章をつけた怖

そんな男——七篠無頼がいた。

「ジャッジメント風紀委員だ。暴行傷害の現行犯で拘束するが、いーな？」

そういう七篠の横から現われた影宮が佐天のほうに向かって歩いていく。

「キミが佐天涙子だね？」

「テメー影宮、いつ、どこから来た？」

「最初からキミと一緒にいたよ。」

不良のことなど目に入っていないかのように進んでいくが、その行く手をチヨビヒゲの男が阻む。

「何だテメエ、ケガしたくなかったらさっさと失せろガキ」

「邪魔だねえ」

「はあ？んだと——」

その瞬間にチヨビヒゲの男は足を払われ胸元を押されバランスを崩

し地面に倒れた。

「? な、なに、ガア! ?」

何が起こったのか理解できていない男の鳩尾辺りを思いつきり踏みつけ、気絶させる。

「キミたちに用はないんだよ。どいてくれないかなあ? 邪魔だから。」

「おい影宮、俺の獲物とってんじゃねーよ。まあ、抵抗の意志があるのはわかったし、このクズどもをブチのめしてもいいわけだ。もー手ー出すなよ」

「はいはい、わかってるよ、ナナシくん。興味ないし。」

「言ってくれるな。どうやら腕に自信があるようだがそのなめた態度ムカツクぜ。その高く伸びた鼻——」

糸目の男が手を向けるとそこらにある鉄パイプや鉄板、鉄柱が浮かび上がる。

(すごい。鉄柱があんなに)

「——へし折ってやるぜ!」

男が腕を振り切ると浮かんでいた鉄柱が七篠に向かって飛んでいく。

「危なっ……」

鉄柱が真っ直ぐ七篠に向かって飛んでいき直撃する――

「は？」

――直前で七篠の目の前で空中に止まった。

「よえーな。ただ浮かして投げるだけか。さっきの台詞、コレと一緒に返すぞ！」

そういつて七篠が腕を振るうと、今度は鉄柱が糸目の男に向かって飛んでいく

「な！？く！！！」

糸目は能力を使って何とか鉄柱を止めたが目の前にはすでに七篠がいる。

「はあ！？」

七篠の拳が男の顔にめり込み、リーダー格である金髪の爬虫類っぽい男の横辺りまで吹っ飛んだ。

「カカカカツ、お前、コイツと同じ能力か」

「次はテメーだぞ。まさか投降するとか「オレ達はよー」・・・？」

金髪の不良は七篠の問いかけを遮り、語りだす

「盗みや暴行、恐喝にクスリ、他にもいろいろあくどい事して楽しんできたけどよ、最後はいつも風紀委員や警備員に追われてな、ウ

「ザってー目に遭わされてきたんだ。だからでけえ力があればよ、一遍ギツタギタにしてやりてーって思ってたんだぜ！」

「・・・どーでもいーな、そんな話。」

「やあやあ、こんにちは、佐天涙子。俺は影宮刻、彼と違って風紀委員じゃないよ。一応お花さんやオセロ、初春飾利と白井黒子の知り合いね。」

「は、はあ・・・」

影宮という名前には聞き覚えがあつた。確か『レンタル』とかいう何でも屋でいろいろと暗躍しているとか、実は学園都市の裏の支配者は彼だとか、彼と敵対した者はすべて闇に葬られるとか、そんな突拍子もない噂が流れていたはずだ。おそらく全てデタラメなのだろうが。

「で、この金はそっちの人のでいいのかな？」

そう言つて、影宮は封筒を投げ渡す。その封筒は先程彼が騙し取られた10万円の入ったものだつた。

「え！？いつのまに！？」

「さっさと帰ったほうがいいよ。」

影宮がそういうと男は逃げるように去っていった。

「さて、佐天っていうと第四波動とか思い出すけど、さっちゃん、  
・いやさっちゃんでもいいかな。」

「だいよ・・・？いや、そんな事よりあの人の手助けしなくてもいいんですか！？」

「ああ、大丈夫だよ。ナナシくんはよく怖く見られるけど、実はいい人だから。」

「いやそうじゃなくてですね！一人で大丈夫なんですか！？」

「いやだって手を出さなっって言われたし、興味ないしねえ。」

「そういう問題じゃないでしょ！？」

「？キミは不良の方を心配してるわけじゃないよね？」

「当たり前じゃないですか！」

「じゃあ、何の問題もないじゃないか。」

「だって、さっきからあの人避けてばかりじゃないですか」

佐天の言う通り、七篠は先程からリーダー格の不良の攻撃を避けてばかりいる。佐天からしたら追い込まれているように見える。

しかしそれを見て影宮はこう評した。

「・・・あー、あれ怒ってるね。」

「え？」

「いつもだったらストレス発散に一撃で終わらせるけど、今は相手を完膚なきまでに負かそうとしてる。」

佐天にはただ避けてるようにしか見えないのだが・・・。

「さっきの一言がそんなに気に障ったのかな？」

「さっきの一言って、あの風紀委員をぶっ飛ばしたいとか言ってた・・・」

「違う違う。さっちゃんに言ってた台詞だよ。」

「え？」

「彼ね、見た目怖くて口も悪くて喧嘩好きなんだけど実はね」

「すっごくお人好しで、女性にやさしいのさ」

「カカカ、どうした？避けてばっかじゃねえか。もっと俺を楽しませてみるよ」

不良には絶対に負けない自信があつた。実際、相手は手を出さずに追い込まれてる。

「……………（ボソッ）」

「ああ？何つつた？」

「もういーつつたんだ！」

七篠が拳を振り抜く。しかし当たらない。なぜなら実際はそこに何もないから。

不良の能力は『トリックアート偏光能力』といって、自分の周囲の光を曲げて誤った位置に像を結ばせる能力だ。簡単に言えば自分の位置と違う位置に自分の姿を映すことができ、相手の方向感覚と距離感を狂わせる。

「カカカ！」

空振りをした七篠に向かってナイフを振るう。どうやっても避けられない。これで終わりだ。

七篠を切り裂いたナイフは、しかし手応えがなかった。まるで空振

りしたかのように。

「力？」

そして何もいないはずの空間から相手には見えないはずの自分の頭が掴まれた。

思い切り力を込められ、痛みのみ、能力が解除された。それと同時に先程までいた七篠の姿が消え、何もないはず空間から七篠の姿が現われた。

「偏光能力か、なかなか面白い能力だな。ま、関係ねーな。」

「て・・・ temeエ、は、放——」

「『何の力もねえ非力なヤツにゴチャゴチャ指図する権利はねー』  
んだろ？このっ——」

左手で不良の腹に一発ぶち込んで——

「——カスがッ——」

——右手で思い切り顔をぶん殴った。

「フン、雑魚が粹がつてんじゃねーよ。」

「大丈夫だったろ？」

「・・・え？どうしてあの人能力が二つ、え、あれ、でも能力は一つしか・・・」

能力は基本一人一つという原則がある。どれほど優れた能力者でも能力は一つしか持てないはずなのだ。

「ナナシくんの能力はねえ、『スキルトレース能力模倣』っていつて、相手の能力を真似する能力さ。まあ自分のレベル以上の能力は真似できないし、使えるのは最後に見た能力だけなんだけどねえ。」

「・・・そんな能力もあるんだ・・・」

「・・・表向きはなんだけどね」

「え？」

「さて、今日はオセロやミサちゃんに『幻想御手』の存在を教えたのがどんな子なのか見にきたんだけど、やっぱり面白い子だったね。」

「おい」

向こうから不良達を拘束し終わった七篠がやってくる。

「大丈夫だったか？」

「あ、はい。ありがとうございました。えーっと・・・」

「七篠だ。別に礼を言われる程のことでもねー。こっちも仕事だしな。それより警備員アンチスギルがきて面倒事になる前にさっさと帰った方がいいぞ。」

「あ、はい。えっと、ホントにありがとうございました。」

もう一度お礼を言ってから、その場を立ち去る佐天。その時に最後に聞こえてきたのは、

「いやーナナシくん、オセロから仕事とって正解だったねえ。」

「白井とコイツの相性は最悪だからな。俺じゃなくて白井だったら、この廃ビルごと潰しかねねーぞ」

「ははは、確かにやりそうだねえ。」

そんな会話だった。

（あたしが何もできなかった相手を、たとえ能力の相性が最悪でも同年代の白井さんは何とかできるほどの力を持っているようなことをあの人たちは言ってた。

あたしと同じ中学生で、あたしと同じ年齢で、あたしと同じ女の子なのに、あたしとは違う世界に住んでいる人がいる。

能力者と無能力者とは何もかもが違う。）

佐天は羨ましかった、能力を持つ人が。

佐天は悔しかった、自分に能力がない事が。

その後、佐天は友人たちと出会い、『幻想御手』が話題にあがり、そして――

「あたし・・・それ、持つてるんだけど・・・」

## 七篠無頼（後書き）

どんどん更新速度が遅くなってきた。

まさか一ヶ月以上たっても幻想御手編が終わらないとは・・・

たぶん後二話ぐらいで幻想御手編は終わるでしょう・・・たぶん。

## 幻想御手の製作者（前書き）

はつきり言って、原作読んでたら読まなくてもいいかもしれないです。

でも、影宮の能力が少し出てるから呼んだ方がいいかも・・・。

## 幻想御手の製作者

——七月二十四日

『共感性……ね』

「はい、その共……なんとかを利用すれば音楽プレイヤーのみで  
テストメント  
『学習装置』と同じ働きを可能にするんじゃないかって」

『なるほど、それは見落としていたな』

初春はバス停で木山に先程風紀委員177支部で美琴たちが出した  
推測を電話で伝えていた。

その推測とは音楽プレイヤーのみでどうやって能力開発を可能にするのか、ということである。

能力を強化するということは脳に影響を与えるシステムが必要にな  
ってくる。しかし、五感全てに働きかけることで大量の電気的情報  
を入力する『学習装置』テストメントならまだしも聴覚のみで同じ事をしようと  
するのは困難だというのが木山の見解だった。

しかし、美琴は共感性を利用して『幻想御手』レベルアップという曲自体に五  
感に働きかける作用があるのではないかと推測したのだ。

「さきほど『幻想御手』を楽譜化して波形パターンを分析したデー  
タをお送りしました。調査をお願いしたいのですが」

『ああ、そういう事なら『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用許可もおりるだ

ろっ」

「わあ、あの学園都市一のスーパーコンピューター！ならすぐですね。」

ツリダイアグラム

『樹形図の設計者』とは、学園都市が保有している、今後25年は誰にも追い抜かれる事がない事が判明しているスーパーコンピュータのことで、学園都市が打ち上げた人工衛星『おりひめ？号』に搭載されていて月に一度、天気予報に用いられている。地球上の空気の分子ひとつひとつの動きを予測できるので、学園都市の天気予報は『予報』ではなく確定情報として扱われている。

ちなみに天気予報に用いられる以外の時間は、学園都市で行われる研究の予測演算に用いられているが、それはまた別の話。

「今そっちに向かってますんで・・・」

『分かった。待ってるよ』

木山との電話が切れて、初春は丁度きたバスに乗り込んだ。

♪~~~~♪  
『』

「わ、わ、いけない。マナーモードになってなかった。」

初春はケータイの画面に出ている名前を見て、急いで電話に出る。

「佐天さん！何日も連絡とれないから心配したんですよっ！っと今車内なんで後でおり返し・・・」  
「・・・れちゃった」はい？」

佐天がか細い声で何か言ったので耳を澄ます。

『アケミが急にっ……倒れちゃったの』

「!？」

『『幻想御手』を使ったら元に戻らないなんて、あたし知らなくて、何でこんな事に……。あたしそんなつもりじゃ……。』

「おっ……。落ちっ、落ちついてゆつくり最初から……。」

佐天は話し始めた。

——偶然『幻想御手』を手に入れたこと。

——所有者を捕まえるといわれて自分が持っている事を言えなかったこと。

——友達であるアケミたちが能力の補修があると言ったこと。

——人で使うのが怖かったということ。

——無力な自分がいやだったこと。

——でも憧れは捨てられなかったこと。

佐天は学園都市に来る前の事を思い出す。

羨ましがっていた弟を。

学園都市に送り出してくれた父を。

そして「あなたの体が何より一番大事なんだから」といって非科学的なお守りをわたして自分の身を案じてくれた心配性の母を。

『ママ・・・』

「？何か言いましたか？」

『無能力者<sup>レベル0</sup>って・・・欠陥品なのかな？』

「何・・・を」

初春はバスを降りて、佐天の家に向かって走っていたがその一言で歩みを止めてしまった。

『それがズルして力を手に入れようとしたから罰があたったのかな。危ない物に手を出して周りを巻き込んで・・・あたし・・・』

佐天の思考がどんどん負の方向へ向かっていく。

「大丈夫ですっ！！」

しかし、初春の一言でそれは止まった。

「もし眠っちゃっても私がすぐに起こしてあげます！佐天さんもアケミさんも他の眠ってる人達もみんな！だからドーンと私に任せちゃって下さい！佐天さんきつと「あと五分だけ」とか言っちゃいますよ？」

『初・・・春・・・？』

街中で周りの目があるのも気にせず初春は大声を上げて続ける。

「佐天さんは欠陥品なんかじゃありませんっ！能力なんか使えなくたって、いつも私を引っ張ってくれるじゃないですか！力があってもなくても！佐天さんは佐天さんです！私の親友なんだから！だから！だから・・・」

「そんな悲しい事言わないで・・・」

いつの間にか、初春は泣いていた。

『アハハハハ、初春を頼れって言われてもねえ』

「わっ私だけじゃないですよ。御坂さんや白井さんや他にもすごい人がいっぱい……」

『うん分かってる。ありがと初春、迷惑ばっかかけてゴメン。あと・  
・よろしくね』

初春が佐天の部屋に辿り着いた時、佐天はすでに倒れていた。

その手には、一つのお守りが握られていた。

第七学区にあるとある病院に黒子はいた。そこに美琴が走ってやってくる

「黒子！佐天さんが倒れたって……！やっぱり『幻想御手』がらみ？」

「ええ、どうやらその線のようですの」

「初春さんは？」

「木山先生の所へ」

「そう・・・でも少し休ませた方がいいんじゃない？」

「わたくしもそう言ったのですが、自分が風邪で休んでいたせいで『幻想御手』への対処が遅れたんだと言って聞かないんですの」

「あまり無理しなきゃいいけど・・・」

「あー、ちょっといいかい？」

後ろにいたのはカエル顔をした医者だった。

彼に案内されて、診察室に入る。医者は定位置に座るとパソコンを操作する。

「『幻想御手』の患者達の脳波に共通するパターンが見つかったんだよ？人間の脳波は活動によって波が揺らぐんだよね？それを無理に正せば・・・まあ人体の活動に大きな影響が出るだろうね？」

「被害者は『幻想御手』に無理矢理脳波をいじられて植物状態になった・・・って事？」

「誰が何のつもりでそんな事を・・・」

二人の言葉を聞きながら、医者はパソコンにある画面を出した。

「僕は職業柄いろいろと新しいセキュリティを構築していてね？その中の一つに人間の脳波をキーにするロックがあるんだね？それに登録されているある人物の脳波が植物患者のものと同じなんだね？」

そう言うと、彼は二人にも画面が見えるように頭の位置をずらした。美琴たちはパソコンの画面を見る。

そして驚愕する。

そこにはとある研究者の名前と顔写真が出ていた。

「登録者名・・・、木山・・・春生！」

『幻想御手』の製作者は事件解決のために協力を頼んだ彼女だった。

高速道路を木山春生の青い車が走る。車の助手席にはもう一人、手錠をしている初春も乗っていた。

「まいったよ。私の部屋は普段から誰も立ち入れないようにしてるし来客もほとんどなかったからね。少々無用心だったな。」

初春は木山の研究室を訪ねた際に、偶然『音楽を使用した脳への干渉』等の共感性に関する資料を大量に見つけて、不審に思っているところを木山に見つかり、もしもの時のための人質にされていた。

「ところで・・・気になっていたんだがその頭の花は何なんだい？君の能力に関係があるのかな？」

「お答えする義理はありません。そんな事より『幻想御手』って何なんですか？どうしてこんな事したんですか？眠った人達はどんなるんですか？」

「矢継ぎ早だな。こちらの質問には答えてくれないのに・・・」

そういった木山は言葉を続けようとして

「だったら俺が代わりに説明しようか、お花さん？」

後部座席からの声に遮られた。

「！？誰だ！？」

「か、影宮さん！？いつからいたんですか！？」

後部座席に座っていたのは影宮だった。

「キミたちが乗る前からいたけど」

「何だと・・・」

木山や初春は驚く。自分たちが乗った時、後部座席にいたのなら気付かないはずがない。

「まあ、『影』を薄くしてたからねえ。気付かないのも無理はないさ。」

「・・・・・・君は『裏』の人間か？」

「安心しなよ。別にあなたの邪魔をするつもりはないからさ。」

「え？邪魔をしないってどういうことですか？」

「言葉の意味通りだよ。今回の件に関しては傍観者でいさせてもらうよ。」

「そんな！？どうして!？」

「まあ、今は俺なんかのことより『幻想御手』の事を知りたいんじゃないのかい？」

うつ、と言葉に詰まる。確かにまずは『幻想御手』がどういったものなのかを聞いておくべきだろう。

「………教えてください。」

「うん。まず『幻想御手』だけど、あれは能力の強さ<sup>レベル</sup>を上げるものじゃなくて複数の脳を繋げて高度な演算を可能にするものだ。」

「繋げる？」

「そう、同じ脳波のネットワークに取り込まれることによって能力の幅と演算能力が一時的に上がっているに過ぎない。単独では弱い能力しか持っていない人もネットワークと一体化することによって能力の処理能力が上がる。更に同系統の能力者<sup>思考パターン</sup>が共有されることにより、より効率的に能力が使えるようになる。問題なのは常に他人の脳波を強要され続けるということだね。使用者が昏睡してしまうのは、ネットワークに完全に取り込まれて脳の自由を奪われているから。」

初春はきちんと影宮の説明を聞く。木山も黙って聞いているのでおそらく正しいのだろう。

「二つ目の質問はあるシミュレーションのために、だろ？何のためのシミュレーションかも知ってるけど、それは俺の口から言っていることじゃない。」

「シミュレーション？」

「……君はどこまで知っているんだ？」

「気が向いたのならどこまでも」

「シミュレーションをしたいなら『樹形図の設計者』の使用申請をすればいいじゃないですか。何でわざわざ『幻想御手』なんか……」

「どういうわけか使用申請をしたんだが却下されてね。代わりになる演算機器が必要になったんだ。まあ一万人ほど集まったから多分大丈夫だろう」

初春は驚き、影宮はへえ、と関心したような声をあげた。初春は木山を睨みつける。

「そんな怖い顔しないでくれ。シミュレーションが終わればみんな解放するのだから。嘘だと思っかい？……君に預けておくのも面白いかもしれない」

そう言って木山は初春に一つのチップを渡す。

「『幻想御手』をアンインストールする治療プログラムだ。後遺症はない。全て元に戻る。誰も犠牲にはならない。」

「信用できません。臨床研究が十分でない物を安全だと言われても何の保障もないじゃないですか。」

「ハハ、手厳しいな」

「それに一人暮らしの人やたまにお風呂に入っていた人なんかはどうするんですか。発見が遅れたら命に関わりますよ」

初春がそう言った瞬間、急に車の制動がおかしくなり車内も大きく揺れた。

「!?!?」

「……まずいな。学園都市統括理事会に連絡して全学生寮を見回らせなければ……」

「想定してなかったんですか!?!」

「はあ、問題ないよ。そんな事もあるかと、連絡しておいたから見回りはしているはずだよ」

「ほう、良かったよ。しかし……やはり君にはそういう繋がりがあるということか。なら尚の事、私のことを報告しなくていいのかな? 君の立場が悪くなるぞ」

「関係ないね。繋がりがあるといっても上下関係じゃない。俺は自分の思うようにするだけさ。」

「・・・・・・・・あ、あの――」

「む、もう踏み込まれたのか。」

初春が影宮に話しかけようとするが、カーナビの画面を見た木山の声に遮られた。

「君との交信が途絶えてから動き出したにしては早すぎるな。別のルートで私に辿り着いたか」

「?」

「所定の手続きを踏まずに機材を起動させるとセキュリティが作動するようにプログラムしてある。これで『幻想御手』に関するデータは全て失われてしまった。書類は共感性に関する物だけだし。もはや『幻想御手』の使用者を起こせるのは君が持つそれだけだ。大切にしまえ。」

「ちなみに俺もその情報<sup>データ</sup>は持ってないよ。セキュリティの存在は知ってたし、それを掻い潜ってまで手に入れたいモノでもなかったしねえ。」

初春は先程渡されたチップを割れ物のように見る。そして胸ポケットに大事にしまうと今度こそ影宮に話しかける。

「・・・・・・・・影宮さんは、全部知ってたんですか?」

「全部って?」

「『幻想御手』が音楽ソフトだっていうことや使用すると昏睡状態になること、それと製作者が木山先生だっていうこととか、この事件に関すること全てです。」

「もちろん知ってたよ。最初から」

「！だったら何で教えてくれなかったんですか！」

「何で教えないといけないんだい？」

「何でってそんなの・・・！」

「俺がこつちで主にやってるのはあくまで情報屋だ。正義とか悪とか、そんなモノに興味ないんだよね。俺の判断基準はそれが面白いかわからないか、だ。まあ一部例外はあるけど・・・」

「そんなのおかしいです！ふつうだったら・・・」

「普通ってなんだい？」

「え？」

「まあ、俺が普通じゃないのは自覚してるよ。善悪では俺を縛れない。俺自身がどうなるか、どうするかはわからない。だから俺は外れてる。それを自覚している。ただ、それがどうした？人の生き方をただ全面否定することがキミに出来るのかい、初春飾利？俺を非難するのは構わないけど、否定することは許さないよ」

初春は何も言う事ができなかった。

「まあ、安心しなよ。幸い、俺の面白いと思う事は善行である事が若干多い気がするからねえ。」

「む」

急に木山が車を止める。前を見るとそこには、警備ロボと武装した  
アンチスキル警備員が道を塞いでいた。

「警備員か。上から命令があつた時だけ動きの早い奴らだな」

『木山春生だな。『幻想御手』頒布の被疑者として勾留する、直ちに降車せよ』

「どうするんです？年貢の納め時みたいですよ」

「『幻想御手』は人間の脳を使った演算機器を作るためのプログラムだ。だが同時に・・・使用者に面白い副産物を齎す物でもあるのだよ。」

そういつて車から一人降りる木山。

『両手を頭の後ろに組んでその場でうつ伏せになれ』

木山はその言葉に従って頭の後ろで両手を組んだ。

警備員がこちらの様子を伺って、上司に報告する。そして

『確保！！』

号令とともに銃をもった警備員たちが徐々に距離をつめていく。

しかし、その内の一人の銃が不自然に動いた。そしてひとりで引き金が引かれて、弾が乱射され、前方にいた二人の警備員に命中した。

「！？貴様一体何を・・・」

「ち、違う！俺の意志じゃない！銃が勝手に・・・！」

初春が不安そうに見ていると、木山が何かしているのに気付いた。

「な！？」

「バカな！学生じゃないのに」

木山が伸ばした右手から爆炎が渦巻き、放たれる。

「『『能力者だと！！？』』」

タクシーで現場に向かっていた美琴はそこから木山と警備員がいる

であろう場所で何かが爆発するのをみた。

「な．．．何だあ？」

タクシートの運転手が驚いて止まってしまったが、早く行かないといけないと美琴の勘が叫ぶ。

「早くあそこまで．．．！」

「む、無茶言わないで下さいよ。早く引き返しましょう」

「だーーーーッ！もういいわ！ここで降ろして！」

美琴は運転手の静止を振り切ってタクシーを降りて駆け出す。

「黒子！何が起こってんの！？」

美琴は走りながら、警備員の情報を受け取るために風紀委員支部に残ってこの場にいない黒子にケータイで問いかける。  
ジャッジメント

『それが．．．情報が混乱していて．．．．．木山が能力を使用して警備員と交戦している模様ですの』

「！？彼女能力者だったの！？」

『いえ．．．『書庫』バンクには木山が能力開発を受けたという記録はないのですが．．．．．しかしこれは明らかに能力．．．それも『複数の能力』を使っているとしたか．．．』

「どうということ！？それこそ有り得ないじゃない！能力つてのは一

人に一つだけ！例外はないはず！！」

一刻も早く現場に行くために階段を駆け上る。

『状況から推測するしかないのですが、木山の能力は『幻想御手』を利用したものではないでしょうか。何千人もの能力者の脳とネットワークという名のシナプスでできた『一つの巨大な脳』・・・もしそれを操れるのなら人間の脳では有り得ない事も起こし得ますの。この推測が正しいなら今の木山は実現不可能と言われた幻の存在・・・』

デュアルスキル  
『多重能力者』

美琴が現場に着いた時には、凄惨な状況だった。護送車は横転し、警備口ボは破壊され、警備員は全て倒れていた。

アンチスキル  
「警備員が・・・全滅？」

改めて辺りを見渡すと、車の中で気を失っている初春を見つけた。

「初春さん！しっかりして！！」

「安心していい。戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。命に別状はない。」

声の聞こえた方に目を向ける。そこには一人でこの状況を作り出した白衣の女性が立っていた。

「御坂美琴・・・学園都市に七人しかいない超能力者か。私のネットワークに超能力者は含まれていないが、さすがの君も私のような相手と戦った事はあるまい」

彼女の前にいた警備ロボが音を立てて倒れる。美琴は敵である木山春生と相対する。

「君に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

——そこから少し離れた場所の影が不自然に揺らめく。

「さて、いくら『多重能力者』、いや『多才能力者』<sup>マルチスキル</sup>といっても他の超能力者<sup>レベル5</sup>が相手なら瞬殺だろうねえ。けど、相手は『裏』を知らない世間知らずの超能力者。なら勝負がどうなるかはわからない。」

ズズ・・・、と先程まで木山の車にいたはずの影宮の体がその影から浮かんできた

「『<sup>マルチスキル</sup>木山春生』対『<sup>レベルガン</sup>御坂美琴』、せいぜい楽しませてもらうよ。」

## 幻想御手の製作者（後書き）

この話を書くのにレールガン二巻を見直したら、気づいた。

木山先生の車に後部座席がない、だと・・・！

ま、いいか。

本編には書いてませんが、警備員との遭遇時に影宮が一言も話していなかったのは、その中に黄泉川がいるかどうかを確認していたからです。

## 終わりと始まり（前書き）

幻想御手編終了！次からオリジナル要素が組み込みやすくなるぜー  
！ヒャッハー！！

あ、今回は短めです。

## 終わりと始まり

「何だ………あれは……？」

影宮は驚いていた。視線の先にはあるモノがいた。そしてそれは産声を上げる。

「まさか……アレは………」

アレの正体を推測し、そして答えに行き着いた。

「AIM拡散力場の集合体………は、ハハ、ハハハハハハハハ」

すると、自然と笑みが浮かび、それは次第に声を伴った。

「すごい、すごい。すごい！予想以上に面白い事が起こったじゃないか！」

影宮は感動していた。未知との遭遇に。そして未知が既知になり今まで答えの出なかったものにも足がかりができたのを実感できたことに。

影宮は木山と美琴の戦いを見ていた。

様々な能力を組み合わせで戦う木山を、美琴はなかなか攻略ができず、木山が優勢だった。

そして、その後美琴は死角からの爆弾と化した空き缶で不意打ちを受けて倒れた。

木山が勝利を確信して立ち去ろうとした時に、倒れたはずの美琴が木山を抱き締め、捕らえた。爆発を砂鉄や金属を磁力で集めた即興の盾で防いでいたのだ。

木山は急いで美琴に攻撃しようとするがその前に直接電撃を流されて倒れた。

その後、電撃を喰らって満身創痍な木山と何故か青ざめている美琴が何かを話している。何故会話を交わすような状況になったのかはわからないが、美琴の様子から推測すると話の内容はおそらく木山の目的についてだろう。

木山春生の目的、それは自分の教え子たちの恢復手段を探り、事故の原因を究明するためのシミュレーションだった。

自分の上司である木原幻生から、実験の成功のための被験者の詳細なデータを取るために、被験者である『置き去り』チャイルドエラと呼ばれる何らかの事情で学園都市に捨てられた子供たちの担任を任された。

実験の内容は『AIM拡散力場制御実験』。長い期間をかけて計算を繰り返し準備してきた。失敗するはずはなかった。

その結果、子供たちは意識不明の重体となった。

彼女にも知らされていなかった実験の本当の内容は『暴走能力の法則解析用誘爆実験』。簡単にいえば、彼女の教え子たちは使い捨てのモルモットにされたのだ。

23回。木山が教え子たちの恢復手段の探求と事故の原因の究明のために『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』の使用申請をし、却下された数である。統括理事会がグルなのは明白だった。

統括理事会は頼りにできない。つまり、『樹形図の設計者』で恢復手段を探ることはできない。だから『レベルアップ幻想御手』を作ったのだ。

木山が美琴に向かって何か叫んでいると急に悲鳴をあげた。そして木山の頭からナニかが現出し、気絶した。

ソレは胎児のような姿をしていて、頭部の上には所々途絶えたリングがあった。

ソレは産声をあげ、様々な能力をばら撒き、暴れまわる。それから推測すると、アレは『幻想御手』に関係があるのだろう。

ソレの声は、嘆きの叫びにも聞こえた。

ソレは攻撃を受けても血を流すこともなく、さらに巨大になっていく。

原子力実験炉がすぐ近くにあり、立場上何とかしなければならぬ

警備員たちが一斉射撃を試みたが効果はなく、一蹴された。

今は美琴がアレと相対しているが、いくら攻撃しても意味はなく、苦戦していた。

こちらにも気になるが、アレの製作者である木山がどうなったのかも気になるので影宮はそちらの方に行くことにした。

木山は今戦闘場所から陰に隠れるような場所で横たわっていた。謎のモノが現出した時に気を失った彼女を美琴が避難させたのだ。

「う……ん………私は……」

意識が戻り、あれからどうなったのか状況を把握するために、陰から身を出し、そしてソレを発見する。

「――」

絶句する。自分が生み出したモノの異常さに。

教え子達を助けるために行動し、『幻想御主』を作成・頒布し、一万人もの人間を犠牲にして得られたものがアレだ。

「――ク、ハハ、アハハハハ」

もはや、自らを笑うしかなかった。

「すごいな、まさかあんなバケモノだったとは・・・学会に発表すれば表彰ものだ。」

そう自嘲すると、腰に仕舞っていた拳銃を手取る。

「もはや私の手からネットワークは離れ、あの子達を取り戻すことも、あの子達を恢復させる事もかなわなくなっただか・・・おしまいだな」

そう言つて、自身の頭に拳銃を向ける。そこへ気絶から復活した初春がやってきた。

「こんな所で一体何を・・・!!ダメエー……!!」

初春は咄嗟に自殺しようとしている木山に飛び掛り押し倒してそれを阻止する。

「なななな何考えてるんですか!? 早まったらダメ・・・! 生きていればきつといい事ありますって・・・アレ?」

初春の手には手錠がしてあった。今、初春の手は木山の首の両横のスペースに置かれている。つまり手錠の鎖で木山の首を絞めている状態になっている。そのことに初春は今気付いた。

「実は腹黒いんじゃないかと疑ってたんだけど、まさかお花さんがそんな事までする子だとは思わなかったねえ。」

そんな場面を影宮に見られて誤解（実際には誤解などしてないのだが）をされた。

「影宮さん！？ちが、違いますよ！？」

「その否定は絞殺未遂について？それともオセロ張りの同性愛に目覚めて彼女を押し倒したことについて？」

「ななな何言ってるんですか！？どどっちも違います！！」

「冗談はさておき、否定する暇があるなら早くどいてあげれば？彼女本当に死ぬよ？」

「へ？わぁーーーー！！？だだ大丈夫ですか木山先生！？」

——数分後

危うく殺人を犯してしまうところだった初春とそれを未然に防いだ（というよりいじった）影宮はその被害者になりかけた木山が一息ついた後にアレがなんなのか尋ねた。その解答が

「虚数学区？」

「そうだ。まあ巷に流れる噂とは全く違ったわけだがね。」

「ということは虚数学区はAIM拡散力場の集合体なのかい？」

「その通りだ。虚数学区とはAIM拡散力場の集合体だったんだ。アレもおそらく同じ原理でできた・・・『AIMバースト幻想猛獣』とも呼んで

おこつか。」

木山によると、『幻想御手』のネットワークによって束ねられた一万人のA I M 拡散力場が触媒になって産まれ、今は街にあふれるA I M 拡散力場を取り込んで成長しようとしており、A I M 拡散力場の集合体に意志があるとは思えないが、核になっていた木山自身の感情に影響されて暴走しているのかもしれない、との事だ。

「なるほどねえ………やっぱり……」

「どうすればアレを止める事ができますか？」

「それを私に聞くのかい？今の私が何を言っても君は信用できないだろう………！」

初春は木山の顔に急に顔を近づけた。そして目をじーっと見ている。

困惑している木山に構わずに初春はしばらく見つめていると口を開いた。

「いいえ、信用しますよ。だって……」

初春は顔をはなして微笑みながらこう言った。

「木山先生は嘘はつきませんから」

木山は驚き目を見開く。

「だってさ、木山センス」

影宮にからかうようにそう呼んだが、木山は嫌悪を抱くことはなかった。

「・・・全く、根拠もなしに人を信じる人間が多くて困る。」

そついいながらも表情は嬉しそうだった

「預けたものをまだ持っているかい？アレは『幻想御手』から生まれた怪物だ。ネットワークを破壊すれば止められるかもしれない。試してみる価値はあるだろう。」

「ありがとうございます！」

そついつて初春は走っていった。おそらく警備員アンチスキルの力を（無断で）借りに行ったのだろう。

「君は行かないのか？」

初春が去った後に、木山は影宮に問いかける。

「行かないですよ。今回俺はあくまで傍観者だし、俺がいなくても何とかかなりますしねえ。あなたは行くんでしょ？」

「ああ、アレは私が作り出したものだ。その責任は果たさなければならぬ。」

「そうですか。じゃあ、ここで一つお礼を言わせてもらいますね。」

「礼？何のだね？」

「俺もまさかここまで面白い事が起きるとは思わなかった上に、虚数学区の謎まで解いてもらったんですからねえ。礼の一つぐらいさせてもらわないと」

「・・・怨まれることはあっても、感謝されることはないのだが・・・」

「まあ、事が落ちついたら『借り』を返しに行きますよ。それでは頑張ってください。見てますから。」

そう言って、影宮は去って行った。

その後、初春飾利が警備員の協力によって学園都市中に『幻想御手』のワクチンソフトを流して、ネットワークを破壊。

そして御坂美琴が『AEMバースト幻想猛獣』を圧倒、レールガン超電磁砲にて殲滅。

増員にきた警備員によって『幻想御手』の製作者である木山春生は拘束、捕縛。

昏睡状態だった人も特に異常なく覚醒。一万人以上もの人間を巻き込んだ『幻想御手』事件は幕を閉じた。

・ 木山春生の一言で浮かんだ不吉な予感を御坂美琴に残して……

「それが新たな騒動の鍵となる、ってとこかな。なかなか面白かったなあ。」

八時過ぎとなかなか夜も遅く、しかしそれでも人はたくさんいる街中を今日の出来事に思いを向けながら影宮は歩いていた。

「『借り』はちゃんと返さないかね……ん？」

そんな時、影宮はある事に気付いた。

ある地点からの道に人が全くいないのだ。周りの人はそこに足を踏み入れると、すぐにそのある地点から向こうに行こうとはしない。かといって、何か嫌なものがあるというわけではないようで、特に表情を変えることなくそのエリアから離れていく。影宮にはそれが不自然に感じた。

「……何かあるのか？」

そして影宮はその地点に足を踏み入れる。すると不意に、あっちの方が面白い事が起きそうだなと思った。

そう思った影宮は、方向を転換――

「……いや、やっぱりこっちだ。」

——せずに、そのまま進むことにした。

影宮はそのまま進むことにしたのには理由があった。それは「こっ  
ちには行かないでおこう」と思ったからこそである。

先程までの自分の思考がそこに足を踏み入れた途端に、違和感なく  
自然に、不思議に思う事もなく先程とは矛盾した事を思った。それ  
が逆に不思議だ、と影宮は思ったのだ。ならば進むしかないだろう。  
自分の知らない何かが、自分の知らない何かを用いて人払いをし、  
この先で何かを行っているのだから。

先に進むたびに「こっちにはなにもない」「愛穂に会いたくなつて  
きた」「腹が減ったし帰るか」「ナナシくんをからかうかな」など、  
いくつもの考えが浮かんでくるが、そのまま進んでいく。

そしてその先にいたのは、Ｔシャツに片脚だけ大胆に切ったジーン  
ズ、そして二メートル近い日本刀を持った女と血塗れになって倒れ  
ている友人の少年だった。

一瞬思考が停止したが、すぐに冷静になり、そして笑みを浮かべる。

相手は相当な実力者だろうにもかかわらず影宮は見たことがなく、  
そのことからあの女は外部からの、更に言えばおそらく魔術師だろ  
う。その魔術師相手に無能力者《レベル０》とはいえ学園都市の能  
力者である上条が戦っていたという事は、インデックスが関係して  
いるのだろう。

(・・・状況の整理は終了。この後の展開を予想し、  
俺が面白くなる状況になるように誘導する。それにはまず、この場

を何とかしなければならぬ。）

「——すごいことになってるね、カミヤン。手を貸そうか？」

「な！？そんなバカな！？ステイルが人払いの刻印O p i l a ルーンを刻んでいるはずなのに！？」

女が驚きの声を上げる。O p i l a やらルーンという言葉で彼女がやはり魔術師であると確信ができた。さらにステイルという仲間がいることもわかった。

「・・・影・・・宮・・・？」

「さて、とりあえずカミヤンを返してもらつよ、魔術師さん」

（さて、魔術師相手にどこまでやれるかな？）

そう考え、影宮は魔術師との戦いの場へと赴く。純白の少女のために戦った幻想殺しの少年とは違い、己が欲求を満たすために。

## 終わりと始まり（後書き）

さあ、幻想御手終わってそのまま禁書目録に突入です。場面的には神裂さんのブチ切れ後、上条さんの説教前の予定です。どんな事でもいいのでコメントくれたらうれしいです。

後、各話にタイトルをつけたほうがいいのでしょうか？面倒だからつけてないわけで絶対につけたくないというわけではないので、つけた方がいいのならコメントください。

つまりはコメントが欲しいという事なんですが・・・

## 魔術師との戦い（前書き）

少し遅くなりました。申し訳ないです。  
今回は神裂VS影宮です。

訂正：子萌 小萌

## 魔術師との戦い

とうまといっしょにジャパニーズ・セントーに向かっていると、私の記憶が一年前からしかないって話してからとうまは何だか怒ってた。

その後、とうまが失礼な事を言っただから私も少し怒って、とうまから離れた時にとうまの家の前にいた炎の魔術師が襲ってきたんだよ。でもそれを何とか私一人で撒く事ができた。

「おい」

私にかかればこんなものなんだよ、と自分を称えなくなったりする。あと私を侮ってるとうまも見返したい。

「おい」

とりあえず今日の所は、ジャパニーズ・セントーは諦めてこもえの部屋に戻った方がいいかも。

「オメーだよ、その白い、針のむしろみてーな服着たガキ」

「へ？」

私の事かと振り向くとそこには緑色の腕章をつけて十字架のペンダントをしている男の人が立ってたんだよ。十字架を見て一瞬十字架の人かと思ったけど、宗教色がしないただの十字架だったので、違うみたい。

「こんな夜遅くにガキが一人で出歩くんじゃない。」

「む、私はそんなに子供じゃないもん。」

「オメーぐれーのガキは皆そう言うぞ。」

「ガキじゃないもん。」

「いやだから・・・」

「ガキじゃないもん！」

「・・・・・・」

その男の人は、はあ・・・と溜息をついた。

「とりあえずオメー一人じゃ危ねーし、家まで送ってやるからさつさと帰れ。」

「別にあなたの力を借りなくても大丈夫かも。」

「かも、じゃ困るんだよ。どつかの変態<sup>バカ</sup>がオメーに何かしたとかなったら風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>としての面目が崩れる。いいから黙って送られてればいいんだよ。」

そんな事情以前にジャッジメントとは何かすら私はわからなかったけど、この人が引かない事がわかったし、彼が自分に危害を加えない事もわかった。さらに自分が一般人と一緒にいるとは相手も思わないだろうし、もし見つけても一般人のいる前でわざわざ襲っては

こないだろうと考えてそれを了承した。

「そつえばあなたの名前教えて欲しいかも」

「かもって何だよおい。・・・七篠無頼だ。オメーは？」

「私はね、インデックスっていうんだよ」

「思いつきり偽名じゃねーか・・・まー、いーけどなー」

私はとうまに迷惑をかけることなく『敵』を撒く事ができて満足だった。

「な！？そんなバカな！？ステイルが人払いの刻印Opilaを刻んでいるはずなのに！？」

神裂は驚いていた。見知らぬ少年がここにやってきた事に。

同僚のステイルの魔術の腕は確かだ。それは彼以外の人間がここに近付いていなかったことでも証明できる。たとえ今インデックスを保護するのに力を割いていたとしてもその効力が薄れるはずがない。

本来、人がここに足を踏み込むと『何故かここには近付こうと思わ

ない』ように注意を逸らすように刻印<sup>ルイン</sup>が刻まれており、例えその方向に向かおうとしても、その考えが変化した事に違和感を覚える事もなく立ち去っていく。

影宮は違和感がないことに違和感を覚えたからこそここまで来れたのだ。ただこれは普通ではありえないのである。違和感がないことに違和感を感じる事など普通はできないことであり、それができた影宮は普通ではなく異常なのだが、それらの事を神裂が知っているはずもない。

「さて、とりあえずカミヤンを返してもらつよ、魔術師さん」

「――」

魔術師。

少年の口からその言葉が出てきた事で少し落ちつきを取り戻した。その言葉が出てくるということは、彼は十中八九、魔術師だ。つまり『禁書目録』を狙ってきた者の可能性がある。彼女を誰かに渡すわけにはいかない。神裂は魔術師としての顔に戻る。

「あなたがどの魔術結社<sup>メイジ</sup>の人間かは知りませんが、今すぐ学園都市<sup>アカデミ</sup>から立ち去りなさい。今ならまだ見逃してあげます。」

「冗談。友人にここまでしておいてただで帰ると思うかい？」

彼の口振りからすると、元から学園都市に潜入している魔術師のようだが、それも嘘である可能性もあるので油断できないし、本当だとしても彼女を狙っている可能性は否定できない。

「・・・・・・・・仕方ありません。どうなっても知りませんよ。」

神裂の、この聴き方によつては傲慢なように聞こえる言葉は単なる油断から来る物ではない。神裂は『聖人』と呼ばれる世界に20人という存在で、並大抵の魔術師や騎士ならばともに戦う事すらできない程の身体能力を持っている。

人の身で在るにもかかわらず聖人である神裂に一对一で勝負を挑む事がまず敗北条件になるのだ。聖人のついての説明はまた次の機会に。

「その前に名乗ってくれないかな？いつまでもアンタじゃ呼びにくいしねえ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ああ、こういう時は自分から名乗った方がいいか。俺は影宮刻だ。」

「・・・・・・・・いいでしょう。私は神裂火織と申します。・・・・・・・・できれば魔法名は名乗りたくないのですが。」

昔の——と言っても十九世紀末の土台を固めた所謂『近代魔術師』の中での話だが——魔術師は魔術を使用する際に真名が露見する事を嫌っていたので、魔術を使う際、自身の願いや目的をラテン語で魂に刻んだ名を名乗った。それが魔法名だ。

同僚のステイルが殺し名として認識している事、さらに神裂のメイ

ンの魔術は致死性が高い事もあり、あまり名乗りたくなかった。

「神裂火織、いい名前だねえ。あだ名は力オりんかな？」

「ふざけているのですか？」

「いや、全く。あ、そういえば戦う前に二つ言っておく事があった。

」

彼はなにかに思い出したように手を叩いた。

「まず一つ目だけど、俺はアンタが考えている組織・勢力にはどこにも所属していないよ。つまり魔術師じゃない。よって魔法名の意味は知らない。あ、今度調べるから今教えなくてもいいよ？」

「——は？」

「そしてもう一つは——」

呆氣に取られた神裂はその時、何か違和感のようなものを感じ取り、ふと少年の足元を見してみる。

「——時間稼ぎに付き合ってくれてありがとね。」

そして気付く。あの少年の足元から身体に徐々に『影』が纏わりついていつているのに。

その事に気付いたその時、纏わりついていた影が速度を上げ、少年の全身を包み込んだ。そして、声が聞こえた。

「かげをまとひてまひおどるこれ『影纏舞踊』。之、かげふみのつたなり影踏之詩也」

その瞬間、纏わりついていた影が霧散し、彼の姿が現われる。一見変わっていない様にも見えるが、良く視ると首から下の身体の皮膚が漆黒に染まっていた。

それを確認した瞬間、彼の姿がぶれて、

「吹っ飛べ」

「――!?」

一瞬で神裂の背後に回り込み、蹴りを放つ。

「つく!!」

神裂は咄嗟に刀の鞘で蹴りを受け止めたが、数メートル吹っ飛ばされた。

「・・・今のに反応するなんてカオりん本当に人間？」

「――その言葉、あなたにそのまま返します!」

着地した神裂は刀の柄に手を添え、放つ。

七閃

その正体は居合いではなく七本の鋼系だが、普通なら一瞬で七回殺せるレベルである七閃。それはすでに必殺と呼べる程の技だが、

「——ッ！」

相手はそれらをかわし、間合いを詰めてくる。

「く!!！」

影宮の接近を妨げるために七閃を振るうと、相手は後ろに避ける。

これらの事からわかることは一つ。

「七閃が、見えるのですか……！」

「いつもだつたらもつと避けにくいんだろうけど、血がついてわかり易くなってるよ。」

彼に小細工トシクは通用しない。今鋼系には先程まで戦っていた上条当麻の血液が付着していて見えやすくなつてはいるが、例えそんなものがなくともこの少年は七閃を避ける事ができただろう。

神裂は油断などしていなかった。していたのは聖人としての慢心だ。『聖人』について知っている人ならば、ただの人間が聖人とまともに戦えるなど、誰一人思わないだろう。しかし、彼はそれをやつてのけた。

神裂は影宮刻を強大な敵として見据える。

彼がどれほど近接格闘ができるのかはまだ不明だが、七閃と体術を駆使すれば負けはしないだろう。しかし、勝てるとも言いつれない。確実に勝つためなら、『唯閃』を使うしかない。しかし、それでは相手を殺してしまうかもしれない。どうするべきか……

「ならこういうのはどうか？」

そういうと、彼の周囲の影が不気味に揺らめき、一部を除いて地面から放れ、巨大な影の刃といえるような形をとる。その数、十四。

「行け」

号令とともに影の刃が神裂を切り裂き貫くべく、凄まじい勢いで伸びていく。

「こんな物!!」

影の刃は鞭以上の柔軟性、刀以上の切れ味、さらに鋼以上の頑強さを持っていた。

しかし、当たらなければ意味はない。

神裂はそれらを七閃と体捌きを駆使してかわした。

そこに影宮が接近してくる。

神裂は七閃で迎撃しようとするが、

「——!？」

いつの間にか鋼系が影に絡め取られて、動かせない。

そして彼の拳を見ると、そこから黒い霧のようなナニかが漏れ出している。

それを見て、神裂はこう思った。いや、思ってしまった。

——アレを喰らってはいけない

本能が危機を感じ、反射的に手を刀の柄に伸ばし、

(しまっ——!!)

咄嗟に手が動いてしまい、そして放ってしまった。

真説・唯閃

その直前に危機を感じたのか、影の刃が神裂と彼の間に立ち塞がり視界を遮ったが、唯閃はそれすらも切り裂いた。

予想以上に影を切り裂くのに唯閃の威力を殺がれた。が、それでも影の向こうにいた影宮も切り裂く威力は十分に有り余っていた。神裂にとってはこの手応えのなさが唯一の救いだらう。

影が霧散し、視界が晴れたとき、そこには誰もいなかった。

「……え？」

肉片一つ残らなかった、というわけではない。そこには戦闘痕だけ残っていて、誰もいなかったのだ。だからといって奇襲を仕掛けてくる気配もない。

「まさか、……………逃げた？」

彼が上条当麻を置いていったのかと、彼が倒れている方をみると、

「――」

そこにあるのは血痕だけで、誰も倒れていなかった。

神裂は驚愕する。

聖人である自分を相手にして互角以上の戦いをし、あの一瞬の間で、唯閃を避けて、上条当麻の所まで行き、彼を担いで、この場所から逃げた。それはそう簡単にできるものではない。

神裂はそれを難なくやってのけた者の名を心に刻む。

「影宮・・・刻ですか・・・」

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

誰もいない路地裏にて、傷だらけの上条を背負いながら荒い息を吐く影宮の姿があつた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、げほっ！ごほっ！・・・やりすぎたかな・・・」

無傷の影宮はこみ上げてきたモノを吐き出す。それは真つ赤な血だった。

「はあ、そういえば、そろそろ病院に検査にいかないとねえ。」

影宮の息が整うと、足元の影が蠢き、影宮の口から零れ落ちアスファルトを紅く染めている血を飲み込んでいく。そこに血痕があつたと言われても信じられないくらいに跡が残っていなかった。

「う・・・・・・・・」

その時、背中に背負った上条が目を覚ましたようだ。

「カミちゃん？今から病院に連れて行くからそれまで・・・」

「ダメだ・・・病院は・・・」

「？カミちゃんって病院がダメな人だった？」

上条とは高校からの付き合いだが、そんな事は聞いたことがなかった。

「小萌、先生の・・・」

「モエちゃん？モエちゃんの家に行けばいいのかい？」

「・・・」

返事がない。ただの屍のようだ・・・いや、まだ死んでない。気を失っただけだ。

とりあえず上条の希望通り小萌の家に向かうことにした。

月詠小萌の家ははっきり言ってボロい。東京大空襲も乗り切った感じの二階建て木造アパートで廊下に洗濯機がドンツと置いてあり、風呂場という概念がなく、見た目12才の小学生な子萌にしては意外ではあるが、それを知っていた影宮は驚く事もなく、子萌の部屋

の前まで歩いていく。部屋の表札が『つくよみこもえ』とひらがなで書いてあったのには少し笑えたが。

そのまま部屋の中に入る。とりあえず、何故か敷いてあった布団に上条を降ろし、傷の手当てをする。傷口を消毒し、非合法な薬を塗付け、包帯で巻いていく。潰されていた右手には添え木をして包帯を巻いた。刀傷——いやこれは鋼系による切傷だったか——や骨折——いやこれを骨折といっていいのか——に対しての処置はこれでもいいのか、知らないし興味もないが、まあ悪くはならないだろう。

上条に布団をかけると、台所——といってもすぐそこにあるスペースだが——に行き、冷蔵庫から勝手に缶飲料を取り出し、上条の横に座って壁に寄り掛かり、のどを潤す。

さて、次はどうしようかと考えていると、外から足音が聞こえてきた。足音は二つ。その足音の主たちは部屋の前までやってきた。そして……

「ただいまー」

「あれ？何で開いてるんですかー？」

部屋に入ってきたのはこの部屋の主である小萌と（針のむしろと化した）純白の修道服をきたインデックスだった。

「おかえり、インちゃん、モエちゃん」

「あれ？どうしてこもえの部屋にいるの、とき？」

「って、影宮ちゃん！それビールじゃないですか！飲んじゃダメで

すー！」

小萌が影宮の飲んでいた缶をみて慌てるというか、怒っているとい  
うか、シヨックを受けている。そう、影宮の飲んでいた飲み物は、  
小萌の冷蔵庫に常備してある缶ビールだった。

「いやー、のどが渴いたのでジュースだと思って飲んじゃいました  
よ。」

そっぴいながら、缶ビールを飲み干す。

「缶を見たらわかるでしょう！？どうして飲んじゃうんですか！？」

「そのリアクションが見たかったからですよ」

その一言に小萌は動きを止め、大きく溜め息をついた。

「ビールの事はひとまず置いておくとして、どうして影宮ちゃんが  
私の家のそれも部屋の中にいるのですかー？カギもかけてたのに・  
・」

「カギ開いてましたよ？」

「ホントですか！？」

嘘である。ちなみにカギはかかっていたので能力で代用して開けた。

「実はカミヤんを届けに。病院はダメだっていうからさ。」

そっぴいって布団の方を指差す。

「え？——とうま!？」

インデックスが声を上げ駆け寄り、小萌は顔を青褪めた。

その後、二人にある程度の事情を説明し、インデックスにどういう状況か小萌先生に聞かれないように話を聞いた後、影宮は学生寮に帰った。

## 魔術師との戦い（後書き）

今回は影宮の強さがどれくらいかというお話でした。

でも反動がひどいです。血を吐いたのはそれ以外に理由があるのですが・・・それはまたいつか。

では、感想をお待ちしております。

蛇足、七篠くんは風紀委員の面目なんて全く気にしません。

レンタルの仕事・魔術編（前書き）

久しぶりの更新。に、二週間以上かかっているだど・・・・・・・・！！？

訂正：子萌 小萌

## レンタルの仕事・魔術編

七月二十六日

魔術師・神裂とその同僚のステイル「マグヌスはある少年に会っために一つの学生寮の前にいた。」

「ここですか・・・」

そこは奇しくもインデックスを守ろうとする少年のいた学生寮だった。

「それにしても信じられないね。聖人である君が一人の少年に後れを取ったなんて。」

「残念ですがまぎれもない事実です。どのような術を用いたのかはわかりませんが、相手は相当な力を有しています。」

そう言いながらエレベーターに乗り込み、七階のボタンを押す。

「それと集めた情報では、彼はこの学園都市で『レンタル』という組織を立ち上げているそうです」

「その『レンタル』っていうのはどのくらいの規模の組織なんだい？」

「わかりません」

「わからない？調べたんじゃないのかい？」

「『レンタル』という組織について調べても、拠点、人数、規模、全てにおいて謎です。唯一わかつてるのが、創始者が彼、影宮刻という少年だということと『レンタル』は所謂“貸し借り”によって運営されているということです。」

「貸し借り？」

「依頼を受ける代わりに対価を払う。等価交換ですね。大抵は金銭で対価を支払うようですが・・・」

そうこうしている間にエレベーターは七階につき、二人は歩き出す。

「殺ったほうが早いと思うけどね。」

「殺さないに越した事はないです。・・・ここです。」

できれば、情報を入手した昨日の内に尋ねたかった。

しかし、念のためにちゃんと『足枷』が機能しているか確かめる必要があった。『足枷』があると安心してインデックスに逃げられたら取り返しの付かないことになるからだ。

結果、『足枷』はきちんと機能していた。

それもそうだ。彼女が自分の信用している相手を見捨てて逃げるはずがない。そんな事を考えながら、神裂は呼び鈴を押す。

そして開いたドアから一人の少年が現われる。

「こんにちは、影宮刻。少々話があるのですがよろしいですね。」

そう言うと、驚くかと神裂は思っていたが、影宮は逆に微笑む。

「じゃあ、どうぞ上がってくれ。一応言っておくけど土足厳禁だよ。」

」

影宮はそう一言、何の気負いもなく言って彼らを出迎えた。

「・・・驚かないのですね。何の用かも聞かないんですか？」

「職業柄慣れてるからね、昨日殺しに来た人が次の日に依頼を頼みに来るなんてことは。で、キミたちも依頼しにきたんだろ？」

「その通りです。」

「ボクとしては今すぐに消し炭にしておいた方がいいと思うんだけど、彼女は殺しを嫌っててね。」

「それは良かったよ。」

そう言って、部屋に案内される。

部屋の内装はいたってシンプルというか、ベッドとテーブルとパソコンがあるだけで生活臭があまりしなかった。

「じゃ、改めてお互い自己紹介をしようか。俺は影宮刻。」

「神裂火織です。」

「・・・・・・・・ステイル」マグヌスだ。」

「了解した。それじゃ、用件を聞こうか」

影宮はベッドに腰掛けて話を促す。

「それでは・・・」

神裂は一息ついてからこう言った。

「私たちに関わるのをやめてもらえませんか？」

「それは、キミたちの邪魔をするなっでことでもいいのかな？」

「その通りです。私たちの目的はあなたを殺す事ではないし、あなたも関わる必要はない。」

カオりんこと神裂火織ともう一人の魔術師が俺の部屋にやってきて依頼を持ってきた。ここまでは予想通りの展開。問題はこの後だ。

「じゃあ、キミたちの目的って何だい？」

「ボクたちの目的はある少女の保護だ。」

とある少女の保護・・・魔術関係の少女で保護、もとい拉致する価値がある人物といえば一人しか知らない。

「その少女って『Index - Librorum - Prohibitorum』、インデックス禁書目録のことかい？」

「「!？」」

ビンゴ、二人の反応からどうやら当たりだったみたいだねえ。

「どこからそれを!？」

「本人から。で、魔道書図書館を自称する彼女を保護してどうするんだい? いや、そもそも彼女とキミたちとの関係は?」

「・・・答える必要はないよ。」

答えたのはステイル。マグヌスという、赤髪で目の下にバーコードみたいな刺青を入れた神父らしくない神父であるが、この反応も予想通り・・・いや、少し間が空いたね。これは何かあるかな? そういえば彼のあだ名どうしようか?

「いや、答えてもらっよ。そうでなきゃキミたちを妨害せざるを得ない。」

「ならここで死ぬかい? ボクとしては一向にかまわないんだけど」

スッチーが何か書かれたカードを取り出す。どうやらあのカードがステインの魔術における媒介のようだ。

「ステイル!」

「止めるなよ、神裂。ボクとしてはこっちの方がいいと思っていたんだ。」

緊迫した空気になる中、彼のあだ名を考えているなんて悟られて変に和むわけにはいかない。このピリピリした空気はこっちにとつては都合のいいものなのだから。

「・・・答える気はない、と。なら、勝手に推測させてもらうよ。」

さて、ここからは完全に賭けた。普通に考えれば、魔道書狙いの魔術結社とやらなんだろうけど、さっきの間が気になる。ここは可能性の低かった予想から当たっていくかな・・・

「おそらく、キミたちと禁書目録の関係は同僚だったりするのかな？」

「「!？」」

当たり前♪こういう事は確証がなくても自信満々に言った方がいいものだ。そうすれば答えは自ずと相手から出てくる。それがわかれば比較的簡単に組み立てられる。

「やっぱりね。何らかの理由で逃走している禁書目録をイギリス清教・『必要悪の教会』<sup>ネセサリーウス</sup>の使いとして保護しようとしている。ただ、そうなると禁書目録がキミたちから逃げ回っている理由がわからないが・・・」

「・・・・・・・・」

相手の顔を、反応を、目を見ながら、情報を探り、理論を組み立てながら、かといって怪しまれないあるいは悟られない程度の速さで言葉を紡いでいく。

「彼女が面識がなければキミたちがそんな任務を与えられるわけないし、かといって面識があるのなら禁書目録がキミたちを『敵』だと勘違いしているのに説明がつかない。なら……………」

そして、可能性を相手に打ち出す。

「記憶がないのかな？」

「……！」

これも正解。しかし矛盾が生まれてしまった。その生まれた矛盾点を解決するために、さらに情報を探る。

「ただ、それだけなら、聞いた話だと禁書目録は完全記憶能力を持っているし、魔術関連の事はきちんと覚えていたからおかしい。」

そしてその矛盾を打ち砕ける理由を探す。

「……………なら」

見つけたら、少し引つ張ってから打ち込む。

「記憶がなくなったんじゃないって、記憶をなくしたのかな、意図的に」

さて、早ければそろそろ向こうが折れる頃だけど……

「……わかりました。話しましょう。」

その時、カオリんが折れた。

「神裂！君は・・・！」

マグッチは不満があるようだが、カオリんの決意は変わらないようだ。

「どちらにしても彼に答えは隠し通せないでしょう。なら勝手に答えを知られて敵対するより、きちんと話して協力してもらった方がいいです。」

「・・・チツ！・・・勝手にすればいい。」

ステッチが踵を返し、玄関へ歩いていく。

「ステイル！」

「彼女を見張ってくる。」

そう言つて、マグーはドアを思いつきりバタンツと音を立てて閉めた。・・・結局、あだ名は決まらなかった。

「・・・すみません」

「構わないよ。それより聞かせてもらえるかな？」

「わかりました。では——」

そうして、インちゃんのお秘密が語られ始めた。

ステイルが部屋から出て行った後、私は彼に全てを説明した。

私たちはインデックスの同僚であり親友であつたこと。

完全記憶能力者であるインデックスが記憶する10万3000冊の魔道書のせいで彼女の思い出の記憶が一年しか持たないこと。

インデックスの記憶を一年ごとに消さないと彼女が死んでしまうこと。

インデックスを助けるために色々と模索したが、どうにもならなかったこと。

何回繰り返ししても最後は変わらないこと。

「つまり、キミたち、ネセサリウスは禁書目録を助けるために記憶を消している、と」

「そうです。だから私たちの儀式の邪魔になる事をしないでいただきたいのです。」

そうだ。私たちは彼女を助けるために記憶を消してきた。その事は間違つてなどいないはずだ。

「なるほど、じゃあ聞くけどキミは、」

だからこそ、彼のこの発言に怒りを覚えた。

「後何回、彼女を殺すつもりだい？」

「な・・・！？」

「他の人はどう考えてるかは知らないけど、俺は完全に記憶がなくなるということは死を意味すると考えているんだ。記憶は人格を形成するに当たってもっとも重要な要素だ。例え本質が同じでも、何を経験するかで考え方や成長の仕方が全く違ってくる。」

そっついながら、彼は笑みを浮かべる。

「なかなか面白い話だねえ。キミたちは親友を助けるといいながら、殺していたとわけだ。ハハハ」

「黙れ、ド素人が！！」

彼が声に出して笑った時、怒りが抑えきれなくなり、溢れだした。

「何も知らないあなたが知ったような口をきくな！！私たちがどんな気持ちであの子の記憶を奪っていったと思ってるんですか！？私達だって頑張ったよ、頑張ったんですよ！春を過ごし夏を過ごし秋を過ごし冬を過ごし！思い出を作って忘れないようにたった一つ

の約束をして日記や写真を胸に抱かせて！

「……………それでも、ダメだったんですよ。日記を見ても写真を眺めても……………あの子はね、ゴメンなさいって言うんですよ。」

それでも、もう一度思い出を一から作り直しても、何度も繰り返しでも、家族も、親友も、恋人も、全て……………ゼロに還る。

「私達は……………もう耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて、不可能です。」

怒り、悲観、さらに弱音、そういった感情を彼に吐いてしまった。いや、感情を叩き付けたというほうが正しいか。

「そういえばあの少年にも同じような事をしたが、彼は何も言い返せなかった。もしかしたら何か言おうとしていたのかもしれないが、私の剣幕に怯んでいた。そんな事が前回あって理性の堀が緩くなっていたのか、今回はその時に感情が爆発してしまった。」

そんな私の心からの叫びに彼は、

「それがどうした」

特に動じることなく、その一言で私の叫びを切り捨てた。

「え・・・・・・・・・・？」

「それはキミたちの問題だ。彼女の問題じゃないし、そもそも俺には関係ない。」

確かにそうだ。でも、それでも、だからこそ、笑われる筋合いはな  
いはずだ。

「ちなみにね、一人でいるのって精神的に疲れるんだよ。記憶がなく、頼れるものもなく、知り合いもない。そんな状態で誰かに追  
われていたら、彼女の精神がものすごい勢いで磨耗していくだろう  
ね。その精神の磨耗は少なからず人格にも影響を与えていく。」

もし、彼女にその影響が現われていないのならキミたちは彼女を何  
度も殺していた事になる。もし、彼女にその影響が現われているの  
ならキミたちはいつかその手で彼女を確実に殺す事になるだろう。」

確かにそうかもしれない。だけど、そうしなければ、記憶を消さな  
ければ、彼女は確実に死んでいた。

「だったら、他にどんな方法があったっていうんですか・・・」

私たちだって何もして来なかったわけじゃない。インデックスを助  
けるためにひたすらもがいた。

しかし、“魔術”<sup>インクジシヨナリ</sup>ではどうしようもなかった。魔道書、それも原典  
ともなれば異端審問官にも処分できない。かといって“科学”の人  
間に彼女を任せるというのも気が引けた。

「まあ、今ここで俺が何を言おうと、キミが何を言おうと、話は進まないわけだ。俺はキミたちの選択が悪いとは言っていないわけだねえ。」

それに、理由はどうあれ、あえて親友の敵になる事を選んだキミ達  
のその選択には『面白い』と思った。依頼は受けるよ。」

依頼を、受ける・・・それは、つまり・・・

「キミたちのその儀式には関わらない。貸しを返すのも今度でいいよ。ただし、」

？条件付け？何を要求されるのだろうか？

「キミたちに選択肢を与えることにするよ。今まで通りに禁書目録の記憶を消すのではなく、」

彼は楽しそうに、うれしそうに笑みを浮かべた。

「記憶を消さずに彼女を救う、ハッピーエンディング幸福な結末の方法を。」

七月二十七日

目を覚ますとそこは小萌先生のアパートで、そこには心配そうな顔をしたインデックスがいた。記憶は神裂に敗れて、影宮が現われた所で途切れている。どうなったのかと聞けば、どうやら俺は三日も

眠りこけていたらしい。

俺が倒れてインデックスを助ける絶好のチャンスがあったというのに、あいつらがこの三日間、何もしてこなかったのは何故だ？

それに三日というのは魔術師が言っていたインデックスの制限時間<sup>リミット</sup>である。ならどうして・・・

いや、そもそもあいつらがインデックスの敵じゃなくて、味方だと知った俺にあいつらと戦えるのか？

そんな事を考えていると、ドアが開いた。そこから入ってきたのは

「影宮？」

「や、カミヤん、元気、とまではいかないけど、意識はあるみたいだねえ。」

「お前、どうしてここに・・・？」

「ときはね、とうまをここまで運んでくれたんだよ」

「・・・！そうだ！お前、どうやってあの場所から」

「そんなことより、二人に話があるんだ。」

「とき？」

「そんなことよりって・・・」

「まずはインちゃんを追っている魔術師についてだけど・・・」

「！？影宮、お前！？」

「?どうしたの、とうま?」

「彼らの所属する組織の名前は『必要悪の教会<sup>ネセサリウス</sup>」、キミと同じイギリス清教の、というかキミと同じ組織に所属している。」

「え?」

「つまり、あの二人はキミのお仲間な訳さ。」

「・・・影宮、なんでお前がそれを知ってるんだ」

「ん?カミヤんも知ってたのかい?それだったら話は早いね。」

「何がだよ?」

「ここにもうすぐその二人が来る。」

「な!?!」

「俺がここに来たのはインちゃんがショックを受けないようにするためさ。それと幸福<sup>ハッピーエンド</sup>な結末の方法を提示しにね。」

「・・・選択肢、だと?」

「ああ・・・・・・来たみたいだね。」

そう影宮が言うと、部屋の扉が開いた。そこにいたのは見慣れてしまった魔術師の二人だった。

「ふうん。どうやらその身体じゃ簡単に逃げ出す事もできないみた

いだね。」

そう言われて、俺はやっと『敵』の意図がわかった。

今まで一年間くらい、教会の追っ手から逃げていたインデックスは一人なら逃げ切れるのだ。例え無理矢理捕まえてどこかに閉じ込めたとしても、簡単に縫え出してしまいかもしれないのだ。彼女一人なら。

制限時間<sup>リミット</sup>があと数日しかない状態でインデックスが本格的な『逃走』を開始すればどうしようもなくなる。

そこで、俺という怪我人を背負う事にあると、話が変わってくる。俺が生きてインデックスの側にいる限り、コイツは俺のことを諦めないだろう。そして、そういうことは元々親友だった魔術師たちは当然知っている。だからこそ、俺が寝込んでいる三日間、何の行動も起こさなかった。

結果、俺という『足枷』は見事に効果を発揮してインデックスは逃げる事が出来なくなった。

あいつらはインデックスを確実に助けるために『悪』に徹したんだ。

「帰って、魔術師」

その魔術師と俺の間に、インデックスは立ちはだかった。つまり、逃げる事をやめたのだ。

影宮からあいつらが同僚だと聞いてもなお、インデックスは二人を信用していない。もしかしたら名前も知らない同僚より俺のほうが大事だと思ってくれているのかもしれない。だけど、あの二人とつてインデックスは単なる同僚じゃない。

「……………ッ！」

インデックスのその言葉に二人の体がビクリッと震えた。予想通り

の展開なのに、それでも耐えられないというように。あの二人は単なる同僚ではなく、親友だったのだ。その反応は当然なのかもしれない。

俺からインデックスの表情はみえない。ただ、あれほどの魔術師達がインデックスの視線を受けて、その場で凍り付いていた。

一体どんな気持ちなんだろう。自分が、人を殺してまで守ろうとしたモノに、そんな目で見られる事は。

「…………ツ、や、めろ、インデックス、そいつらは敵じゃ…………！」

「帰っ…………ツ!？」

さらに続けようとしたインデックスは次の言葉を繋げる事はできなかった。なぜなら、

「はい、少し眠っててねえ」

後ろから影宮に白い布を口に当てられて、気を失ったからだ。

「というか、こういうことにならないために正体を教えておいたっていうのに、そんな事言うんだからさあ」

影宮以外の三人がさつきとは違う意味で動きが止まっている。視線の先にはその元凶<sup>かげみや</sup>の姿。

「ん？これは睡眠薬さ。クロロフォルムとかそういう類の。もちろん人体には無害だから安心しなよ三人とも」

いや、クロロフォルムは発ガン性物質が含まれてるから無害ではな

いんだけど、とか思ってる間に影宮はインデックスを横にする。

「影宮・・・・・・・・お前、魔術師の仲間だったのか・・・・・・・・？」

「違うよ、カミヤん。彼らは俺の依頼主さ」

「依頼、だと・・・・・・・・？」

「そんな事より、あなたの言っていた記憶を消さずにインデックスを助ける方法とは何ですか？」

「え・・・・・・・・！？」

本当に・・・・・・・・本当にそんな方法があるのか！？

「一つ言っておくけど、これは確定情報ではないし、それをキミたちが信用するかは俺の知った事じゃない。それでもいいねえ？」

「・・・・・・・・いいだろう、聞くだけ聞こうか。」

「・・・・・・・・それは、やはり“科学”によるものですか？」

神裂がなにか不安そうな声で尋ねる。おそらくそうなのだろう。いくら影宮が謎多き人物だからって“魔術”についてなんて知らないと思うし・・・・。

「違うね。今回利用するのは“科学”じゃない。」

「え？」

「……なら、何だって言っただ？まさか“魔術”なんて言うんじゃないだろうね？」

「いや、たぶん“魔術”でもない。」

「それじゃ、いったい……」

「これを使う。」

そう言っただけ影宮が指差したものは……

「……俺？」

「正確には、上条当麻が有する『イマジンプレイカー幻想殺し』。これを使う」

「それは、“科学”の能力ではないのですか？」

「わからない。人工物ではなく天然物だという事以外、これは今の所“謎”の能力だ。“魔術”でも“科学”でもない。かといって『原石』とは少し違うような……」

「？影宮？」

「おっと、話が逸れたね」

「じゃあ何故ソイツの右手を使う必要がある!？」

「それは、異能の力が関係しているからさ。」

「何だって？」

「とりあえず、順番に説明していこうか。」

一つ咳払いをして、影宮が語りだす。

「そもそも、インデックスは記憶を消さなければいけない状態にあるのか？ってことなんだけど、それはおかしいのさ」

「おかしい？何がですか？」

「人間の脳って140年くらいなら記憶できるんだよ。例え完全記憶能力があっても、普通に生活ができるはずだ。

そもそも人間の脳の15%の容量で一年しか持たないんだったら、完全記憶能力者は皆六歳くらいで死ぬ事になる。それだったらおかしいよねえ」

「！？確かにそうだ。もし完全記憶能力者が六、七歳で死ぬのならもつと有名になってもおかしくないはずだ。

「しかし彼女は十万三千冊の魔道書が記憶されています。それが大部分を削ってしまっていると昨日いったじゃないですか」

「いや、そもそも人の『記憶』っていうのは一種類だけじゃないんだよ。『意味記憶』『エピソード記憶』『手続記憶』っていう風にいろんな種類がある。その種類ごとに覚える場所も違ってくる。」

「？どういうことだよ？」

「つまり、入れ物が違うわけだ。ゴミ箱が燃えるゴミ用と燃えないゴミ用に別けられている、みたいな感じだね。頭を打って記憶なく

したって話は聞くけど、だからって話せなくなったり歩けなくなつたって話は聞いた事あるかい？」

「あ……」

「……ということは」

「いくら燃えないゴミが溜まっても、燃えるゴミ用のゴミ箱には関係ないように、いくら十万三千冊の魔道書の内容という膨大な『意味記憶』を増やしたところで、思い出を司る『エピソード記憶』が圧迫される事なんてありえないんだよ。」

「そんな……」

「じゃあ、どうしてこの子は苦しんでるんですか!？」

「そうだ、今はまだ意識を保っているが、確かに症状は出ている。なら何が彼女を苦しめているんだい？」

「ステイルはまだ影宮の言うもう一つの選択肢を信じていないのか、インデックスの敵、少なくともインデックスに対して好意的にならないようにしている。」

「本当は、影宮に詰め寄って問い詰めたいと思っているのだろう。自身が盾になってインデックスを守りたいのだろう。」

「でもコイツはインデックスを助けるためにインデックスの敵になる事を選んだ。いったいどれほどの覚悟と精神力があれば、こうあれのだろうか。」

「確かに、今俺が言った通りだとしたら、彼女が苦しむはずはないし、記憶を消す必要もない。ならどうして消さなければならぬの

だろうか？」

「わかっているならさっさと・・・」

「そもそも、85%なんて数字はどこから出てきたんだろうか。」

「？それは、教会が・・・！？」

「まさか・・・！」

「そもそも、禁書目録に首輪を付けたがっていた教会は何故こうして彼女を野放しにできるのか。」

「そもそも、彼女の頭に異常などあったのか。」

「そもそも、

教会が嘘をついていない、なんてことがあるのだろうか。」

「――」

「頭部のどこか、人目につかなくて人が触れない所にでも魔術が施されているんだろうねえ。」

「だったらカミヤんの右手で壊せる。一応儀式の準備をしていれば、もし俺の仮説が間違っていてカミヤんの右手が反応しなかったとしても、すぐに記憶を消せるわけだし悪い話ではないだろう。」

そう言つと、影宮は立ち上がる。

「じゃ、俺はもう行くよ。」

「は？」

「俺は部外者だからねえ。これ以上は関われない。俺は禁書目録をどうしても助けたいなんて思つてないしねえ。」

そもそも魔術師の依頼は『これ以上関わるな』であり、俺はその依頼を受けたわけだし、それを守る事にするよ。今のは選択肢を提示しただけ。決めるのはキミたちだ。俺はキミたちがどんな決断をするか、遠くで見物させてもらうよ。」

あ、言つておくけどこれは依頼料とは別の『貸し』だからね。ちゃんと返してもらうよ、カオりん」

「カオりん？」

思わずステイルと二人で神裂を見てしまう。すると、神裂は顔を赤くしていく。

「な！？あ、あああなたはそんなふざけた呼び方で・・・！！」

「ああ、最後に一言言つておくよ。キミたちは、俺とは違って、インデックスを救いたいんじゃないのかい？」

そう言つて、影宮は部屋から立ち去つていった。

## レンタルの仕事・魔術編（後書き）

あまり時間が作れずに更新がこんなに遅くなったことをお詫びします。

ところで、この長い期間の間に気づいた事がありました。

影宮に神裂フラグを建たせようとしていたのですが、あれ？これ建ってなくね？というのに気づき、まあ後々何とかなるだろうと思い、そしてさらに気づく。

あれ？これ、上条さんの五和フラグ完全に折ってね？

主人公の結末。そして始まり（前書き）

訂正：子萌 小萌

## 主人公の結末。そして始まり

「——心に、じゃないですか？」

そんな言葉が病室から聞こえてくる。

俺がカミやんの病室前に来て、先程まで病室の中で交わされていたインちゃんや『冥土返し』<sup>ヘンキヤンセラ</sup>の異名を持つカエル顔の医者と上条当麻の会話を聞いていた。所謂盗み聞きだね。その話の内容を要約すると、こうなる。

上条当麻は記憶を失った。

彼は、一人の少女のためにそのことを隠し通すと決めた。例えそれが偽善であろうとも。

そしてそれを知るのは、主治医であるカエル顔の医者と盗み聞きをしている俺だけ。

その中で、重要な事は、結局一つだ。

「カミさんは、死んだのか・・・」

上条当麻は、身体は生きているが精神が死んだ。それは、死に等しい。

そして、死んだ上条当麻はその事を認知されないのだ。死んだ事を知っている人間以外には誰一人にも。

「大丈夫、キミの事は、俺がきちんと覚えておくよ、カミさん。」

だからこそ、俺は胸に刻む。死んだと認識されずに死んでしまった友人の名を。

さて、上条当麻が死に、上条当麻が生まれた。

では、あの無色透明な上条当麻はどのような人間なのだろうか？

その見極めを早々に済ませる必要がある。俺にとって重要なのはあの上条当麻が立てた偽善使いを貫くという決意などではなく、あの上条当麻が『面白い』フォックスワード と思えるような存在なのかどうか、である。

「いいのかい？彼に会っていかなくて？」

そうこう考えている内にカエル顔の医者が病室から出て来たようで俺に話しかけてきた。

「構いませんよ。あれは俺の友人の上条当麻ではないですから。しばらく距離をおいて観察しようと思います。」

「そう、ならこれ以上ボクが言う事は何もないね？さっきした君の検査の結果なんだけど、とりあえずしばらくは通院してもらうよ？詳しい結果はまた後で教えるね？あ、そうそう、“彼女”がキミに会いたがっていたっけ？少し顔を出していったらいいよ？」

「そうですか・・・わかりました。」

そういつて、俺は“彼女”を探しに行くことにした。

探し人は意外と早く見つかった。というか影宮の方が見つけられたのだが。

「久しぶりだね、刻、ってミサカは喜びを隠しながら挨拶してみる」  
廊下を歩いていると影宮は声をかけられた。声をかけてきたのは、茶髪セミロングの美琴によく似た高校生ぐらいの女の子だった。

「レイとんかい？久しぶりだねえ。自分のことミサカっていうのやめた方がいいと思うけど。」

さつき冥土返しが言ってた“彼女”である。名前は御坂レイナ。見た目は高校生ぐらいで美琴に似ているが、けっして姉妹ではない。なぜなら彼女たちはDNA情報では同一人物なのだから。

「あだ名じゃなくてレイナって呼んでほしいな、ってミサカは少し甘えたような声を出しながらおねだりしてみたり。名前で呼んでくれたら私は自分のことをミサカっていうのはやめようと思ってるよ、ってミサカは嘸ふんいてみたりしてみる」

「……で、調子はどうだい？」

「スルーされた、ってミサカはしょんぼりしながら元気だよって返事をしてみたり。これならいつでも刻の子供も産めるよ、ってミサカは頬を赤らめながらアピールしてみる」

「……とりあえずお友達で」

「残念、ってミサカは落ち込んでみる」

「ま、本調子になるまであんまり出歩かないほうがいいよ。色々と物騒だからねえ」

「刻、私の心配してくれるんだ・・・、ってミサカは喜びを隠し切れなかったり。それより目は大丈夫なの、ってミサカは不安気に聞いてみる」

「・・・やっぱりわかる？」

「刻のことだもん、わかるよ、ってミサカは心配してみる。でもどうして視力が下がってるのかな？、ってミサカは不思議に思っ」

「ああ、実はねえ・・・。」

影宮は昨日あったことを話し出す。

・・・

・・・

・・・

影宮はアパートから立ち去った後、もしも何かあった時のために、能力を使って自分と視覚共有した影でできた監視用の鳥を作り出した。それを小萌のアパートに配置した。

上条達は念のため、すぐにでも儀式が行えるように、夜になってから試してみることにしたらしく、夜まで何の動きもなかった。

そして、夜になり、上条がインデックスの口の中に右手を突っ込んだ時に異変が起きた。

右手が上条ごとにはじかれて、インデックスはゼリーの入った袋のように起き上がった。

無機質なインデックスの眼に真紅の魔方陣が浮かび、その魔方陣が拡大し、そこから純白の光の柱が放たれ、上条を襲い掛かった。咄嗟に前方に突き出した幻想殺しは光の柱にも作用しているようだが、光の威力が半端なく、徐々に押されてきている。

念のため助けに行くかな、と思った影宮はその場に向かおうとした次の瞬間、神裂がインデックスの足場を崩した。インデックスの身体が仰向けに倒れると共に、魔方陣も方向を変え、さらに光の柱も視線を追うように壁から天井まで引き裂いて、さらに夜空の雲も引き裂いた。後で調べると大気圏外の人工衛星も引き裂いていた。

その時、何の不幸か偶然か、その射線上に影宮の出しておいた影の鳥がいた。そして光の柱に鳥は飲み込まれた。そして、一瞬でかき消された。

そのフィードバックが影宮に襲った。全身に尋常ではない痛みが飛来する。一部だけならまだしも全てがかき消されたのだ。その痛みは常人ならショック死していたかもしれないほどである。さらにかき消された鳥は視力を共有していたので、影宮の視力に影響を与えて、視力を失うことになった。まあ、視力はしばらくすると元に戻るのだが。

結果、影宮は一時的に視力を失った上に、上条を助けに行くこともできず、何もできなかった。

．．．．．

．．．．．

．．．

「．．．．．というわけなんだけどねえ」

上条が記憶を失くした事は隠し、“魔術”については“超能力”という風に誤魔化しておいて、影宮はレイナに説明をした。

「な、なんというマヌケ．．．．．呆れてモノも言えない、ってミサカは言ってみる」

「言い返せない」

助けに行こうとした瞬間に、自分も相手すらも予期せぬ攻撃を喰らって人知れずダウン。その間に全て事がすんでいた。．．．．．確かにマヌケ以外にいいようがない。

「でもそんな刻も素敵？、ってミサカはうつとりしてみる」

「．．．．．まあ、もう大分視力も戻ってきたし、後、数時間もすればいつも通り行動できるさ」

とは言っても、実際はばやけるぐらいしか見えないし、数時間で見えるというのもすごく度の強い眼鏡をかけてのことだ。

「．．．．．そう、なら私は何も言わないよ、ってミサカは安堵する。でも無理だけはしないで欲しい、ってミサカは真面目にお願い

いをする」

「まあ、気をつけるさ。じゃ、俺はちょっと用事があるからそろそろ行くね」

そう言つて影宮は病院から立ち去つていった。

この俺、ツチミカド モトハル土御門元春は魔術師である。

しかし今は科学の最先端である学園都市にスパイとして送られていて、その過程で大して役に立たない超能力を手に入れたが故に陰陽博士とまで言われた魔術を使えなくなった。

まあ、今の生活も満更ではないし、義妹の舞夏との生活が守られるならいいかと思つていた。

俺は一人、自分の部屋で舞夏の作つていった料理を食べていた。舞夏は用事があるらしくすぐに出て行つてしまったが。

そんな時に、窓側から声をかけられた。

「やあ、久しぶりだねツツチー」

振り向くとベランダにはクラスメイトのトキヤんこと影宮刻が、何故か普段していないメガネをかけて立っていた。トキヤんの部屋はカミヤんの部屋を挟んだ向こう側にあるので、おそらく自分の部屋のベランダから来たのだろう。

「おお、トキやんじゃないかにゃー、そんな所からどうかしたぜよ？てか何でメガネ？」

「ちょっと話したいことがあってねえ。メガネは諸事情からね。．．．．マイっちいる？」

話したいこと？ちなみにマイっちとは舞夏のことだ。

「いや、さっきまでいたんだが、丁度帰った所だにゃー。．．．．はっ！まさか、舞夏への告白。．．．．！？だったら殺す！！」

「違うよ」

ふう、少し安心した。ま、殺すっていうのは冗談だったんだけど、それでもな。．．．．ホントダゼ？

ま、トキやんもそれを見越して部屋にきた感じはあるな。いったいどういふ話が出てくるのやら。．．．．

「用があるのはキミだよ。イギリス清教内、第零聖堂区『必要悪の教会』<sup>ウス</sup>の魔術師・土御門元春<sup>ネセサリ</sup>」

一瞬、トキやんがそのことを口にした時内心驚いたが、表情には出していない。こんなことでボロを出していたらスパイなんて出来ない。

トキやんは友達だが、そもそも影宮刻は信用しきれない人間だ。貸借稼業『レンタル』という全貌も行動理念も不明の私設組織を立ち上げ、その行動で学園都市が被害を負ったこともあったにも拘らず、それを統括理事会は解体させようとも取り込もうともせず、ただ黙認している。これは明らかに不自然なことだ。

逆に言えば、影宮刻という男は、統括理事長アレイスター・クロウ

リーと対等な立場にいるのではないか？という風にも取れるが確証はない。

「何言ってるんだにやー、トキちゃん？この暑さで頭でもやられたのかにやー？」

いつも通りの状態で返す。単なるカマ掛けならこれで引き下がると思うんだが、問題はどこまで知られているかだ……

「誤魔化す必要はないよ、陰陽博士。それとも所属のことかい？多角スパイをやってるから正確にはネセサリウス所属じゃないと？」

絶句。

しまった。表情には出していないが、不自然極まりないだろう。なんてミスを……！だが、おそらくコイツ、俺が魔術師だって確信してやがる……！！

「土御門元春、キミが裏の人間だっていうのはわかってたんだけどねえ。どういう組織が関係しているのかわからなかったんだ。で、ここ数日の間で魔術に関わってね。キミのことも含めて不可解だったことが色々解消していったんだ。」

なるほど、インデックスの件に関わってるっていうのは知ってた、というより情報収集したのは俺だから知ってるのは当然だけど。インデックスに会って魔術の存在を初めて知って、そこから一週間強で俺の正体まで見極めるとは……できれば敵に回したくないヤツだな。相手がどんなヤツでも負けるつもりはないがな。

「……何が目的だ？」

「別に。今日は顔合わせ的な感じだから気にする必要はないよ。し  
いて言うのなら、何かあったら依頼してくれってことかな？」

影宮の言葉を吟味する。コイツの真意はいまいちわからないが、今  
この場で無意味に敵対する必要もないだろう。今ここで戦うことにな  
ったら俺じゃ勝てない。『聖人』並みの戦闘能力を持っていて、  
神裂を退けたコイツに対抗する手段を俺は今持っていない。

影宮の提案は言ってみれば、“裏”の仕事でも仲良くやっていきま  
しょう、的なものだし、損な事はない。

しかし、それを鵜呑みにするわけにはいかない。

なにしろ、相手はあのアレイスターと対等にわたり合えるかもしれ  
ないヤツだ。思惑がわからないならわからないなりに探ってみるべ  
きだ。少しでも何かを得なければ承諾できない。

「それで俺が信用すると思ってるのか？」

「だよねえ。ならサービスとして一つ、とっておきの情報をくれて  
やろう。だから、信用してくれ」

「情報？どんな情報だ？」

「統括理事長アレイスターについての俺なりの考察。聞ukai？」

「………ああ」

それはある意味ありがたい。ある意味アレイスターに最も近い人間  
かもしれない影宮の考察だ。何かしら参考にはなるだろう。もし、  
その考察が荒唐無稽なものだったとしても、それから影宮の考え方  
や能力が探れる。

「交渉成立だ。なら、結論から述べよう。統括理事長アレイスターは」

「“魔術”に関わっていた可能性がある」

「な!？」

予想外すぎる!というより有り得ない!科学の親玉とも言える学園都市のトップが魔術に関わっていただと?そんなわけが……

「疑問に思ってたんだ。何故学園都市で超能力というものを開発しようと思ったのか。」

今でこそ超能力〃科学ってことになってるけど、昔はそうじゃなく  
オカルトて神秘の分野だったはずだ。

にもかかわらず何故異能力オカルトに手を出したのか。

あくまで推測に過ぎないけど、その取っ掛かりがあったはずだ。それが『原石』と呼ばれる能力者だと思っていた。

学園都市の能力者を人工物とすると『原石』は天然物だ。だけど『原石』の数は極端に少ないからそれを取っ掛かりにしたとしても無理がある。

ならもし、この学園都市の超能力カガクの取っ掛かりになったのが『原石天然物』ではなく魔術オカルトだとしたら？それはつまり、学園都市の創設者は魔術に関わっていたのではないか？それも魔術の仕組みを理解し切っている、とてもとても優秀な魔術師が」

「・・・・・・まさか！？」

その時俺の中で一つの答えが導かれた。

天才魔術師・アレイスター・クロウリー

二十世紀において歴史上最大の魔術師が誕生した。ほんの70年ほど前に活躍した魔術師であるが、しかし、その70年で数千年の魔術の歴史を塗り替えたといっても過言ではない。現代魔術師の二割は彼の亜流であり、何らかの影響を受けているものも五割はいるという実力者だった。

彼は世界で最も優秀な魔術師だった。しかし、それと同時に世界で最も魔術を侮辱した魔術師でもあった。

彼のしたこととは、世界で最高峰の魔術師でありながら極めた魔術を全て捨て、一から科学を極めようとした事だ。それは魔術世界の代表が誰にも許可を取らずに勝手に科学世界に白旗をあげたということになる。

彼がどういう思惑で魔術を捨て科学に走ったのかはわからないが、彼は魔女狩り専門のイギリス清教だけでなく、全世界の魔術師を敵に回すこととなった。

今現在、魔術師・アレイスター・クロウリーは死亡していてイギリスの片田舎の墓の下で眠っているとされている。しかし、実際には今でもイギリス清教は彼を追っている状態にある。

影宮の推論が当たっているのだとすれば、おそらくイギリス清教が長年掛けて集めてきた情報は全てアレイスターが意図的に流した誤情報なのだろう。

故にアレイスターと対面しているイギリス清教徒が、俺も含めて少なからずいるにも関わらず、その正体に気付く事ができない。参照する情報が間違っているのだから魔術的、あるいは科学的に調べた所で何も出てこない。

おそらく、アレイスター「クロウリー」の正体に気付けるのは、魔術にも科学にも詳しい人物のみだろう。

それに影宮は気付いた。……いや、

「ま、あくまで推論でしかないけどねえ」

おそらく、影宮は魔術師・アレイスター「クロウリー」の事を詳しく知らないだろう。それを魔術師であり科学にも関わっている俺に聞かせることで確証を得ようとした。

そしてそれは成功し、妄想に過ぎなかった与太話を、確信の持てる情報に変えたのだ。

「で、どうだい？俺のこと信用できたかな？」

底の知れない男だ。今、敵対するのは得策じゃないし、どんな思惑があるのか知らないが、乗ってやろう。

それにこの情報はありがたかった。このレベルの情報が得られるのなら手を組んでも損はないし、むしろ得だ。

「……いいだろう。信用してやるよ」

ただし、背中に気をつけておけ。俺は『背中刺す刃Faille 825』だからな。

「交渉成立ってことだね。それじゃ、また今度ねえ、ツツチー。」

そういつてトキさんはベランダから自分の部屋に去っていった。

## 主人公の結末。そして始まり（後書き）

新キャラ登場です。詳しくはまた今度という事で……………

今回はちよつとした自己解釈を入れてしまいましたが、どうでしたでしょうか？

科学が超能力解析ならまだしも開発に手を出すっていうのが普通に受け入れられているのが不思議だったんでこういう解釈を試してみたのですが、おかしいところはないでしょうか？あつたら教えてください。

土御門一人でアレイスターが魔術師だった事に気づけないのではなにかという事で影宮にやらしてしました。本編ではどうやって知ったんだろう……………？

それと申し訳ないのですが、しばらく更新がさらに遅くなるかもしれないので、ご了承ください。

この後は、少し話をいくつか挟んでレディオノイズ編に入ろうかと……………ん？何か忘れているような……………あ！姫神！！……………

## 閑話（前書き）

更新遅れてすみませんでした！言い訳は後書きにて。  
今回は短めです。

## 閑話

『科学者』

「木山春生、出る。面会だ」

私の面会に来るとは物好きだな。一体誰だろうか？

そう思いながら、着いていくとそこにいたのは最近見た顔だった。

「お久しぶりですねえ、木山先生」

「まさか君が私に会いに来るとは思わなかったよ、影宮刻」

彼と私に接点はさほどない。『レベルアップ幻想御主』の時も彼は特に関わってこなかったし、何故私に会いに来たのか分からない。

「で、何しに来たんだ？まさか私と世間話をしに来たわけでもなからう」

「そうですねえ。じゃ、さっそく本題に入りましょうか。実はですね、俺は借りを返しに来たわけです」

「借り？そんなもの預けた覚えはないが……」

「あの『AIMバースト幻想猛獣』や虚数学区の秘密まで教えてくれたじゃないですか。それが借りですよ」

「そんな事でよかったのか？で、何で返してくれるんだ？」

と言っても、今の私に欲しい物はない。あるとすればあの子達の恢復手段を探るための演算機器だが、それは無理だろうし……。

「あなたの生徒たちの恢復——」

「!？」

「——の手伝いですかねえ。ということで、釈放されませんか？専門家であるあなたが必要なですよ、センサー」

確かにいらないとは言えない。ネコの手も借りたいという気持ちはあるし、藁にもすがりたいという気持ちもある。彼の協力がその程度のもではなく強力なものだということも知っている。しかし、

「…………それは無理だ。私だけの力ではあの子達の恢復手段がわからなかったから、『レベルアップ幻想御手』を作ったんだ。それに釈放など出来るはずもないだろう」

そうだ。いくら彼の協力があっても、どうすればあの子達を恢復させることができるのか、その取っ掛かりすらないのだ。

「これがあっても無理かい？」

そう言っただけが取り出したのは紙の束だった。

「……………これは!？」

よく見るとそれはあの時の実験に関する資料だった。しかも私ですら知らないような事まで載っている。実験の担当者であった私ですら入手できなかったモノを、彼は手にしていた。

「実験内容から目的、結果、さらにそれについての考察まで。全てがこれに載っている。だったら専門家であるあなたならここから恢復方法を考察する事も不可能ではないはずでしょ？それに釈放は結構簡単にできるもんだよ？」

確かに、これがあれば何とかなるかもしれない。子供たちが助けられるかもしれない……！！

「さらに、信用できる凄腕の医者も紹介しよう。さあ、どうする？」

—— 例えこれが悪魔の囁きだったとしても、あの子達を助けるためなら、私は ——

『第一位』

学園都市・超能力者<sup>レベル5</sup>第一位、つまり学園都市最強。それがオレ、<sup>アクセラレータ</sup>『一方通行』だ。

ただ、最強っていつでもその称号を狙ってくるバカ共の襲撃が絶え

る事はねエ。

どうやっても勝てねエ最強相手に、勝つ気満々で攻撃してきて、ンで自滅するか殺されるか、どっちにしる死体になる。

ムダなことをバカみてエに延々と繰り返してきやがる。 . . . . .  
. . . . . あん時と、なんも変わらねエ。

最強程度じゃ、なんにも変わらねエ、それはわかってた。『最強』を倒せば自分が『最強』になれる、そんな考えを持つバカが多すぎるからだ。

だったら、さらに上の、挑む事すら馬鹿げてると思わせるような存在になりやアいい。

オレは無敵を目指すことにした。

そのためにオレは『絶対能力者移行計画』に加担した。

『樹形図の設計者』ツリーダイアグラムが出した演算結果として、オレが最強から無敵レベル5になるには、第三位『超電磁砲』と128パターンの戦闘で戦う必要があるらしい。簡単に言っちゃまうと『超電磁砲』を128回殺す必要があるわけだ。

だが、いくらなんでも超能力者『レベル5』である超電磁砲を128人も用意するのは不可能。

そこで代替案として出てきたのは、昔頓挫したつつー『量産能力者計画』レディオノイズとやらのクローン体だ。

『樹形図の設計者』で演算しなすと、オレはそのクローン体を二万人も殺せば無敵になれるよオだ。

そんなこんなでもう研究所内で行える実験はもうねエみたいで、今では研究所の外にある実験場でヤツてるわけだ。

クローン共は、オレに勝てねエってことはわかってンのに、オレに殺されるためにオレに向かってくる。そこで、自滅するか殺される

か、どっちにしる死体に変わる。

ムダなことを、バカみてエに、延々と繰り返してきやがる。……  
……結局、なんにも変わってねエ。

いつもみてエに実験場に行つて、クローンと戦つて、こんなことで  
絶対能力者になれんのか？と思ひながら、クローンにとどめをさし  
た。

帰りにコンビニ寄つて缶コーヒーでも買つて帰るか、なんてことを  
考えていた時にソイツは現われた。

「やあ、初めましてアクセラレータ一方通行」

「ああ？誰だデメエ？つーか一般人か？こういうときはどオすンだ  
ア？」

「俺は実験の関係者ではないけど事情を知ってるし、『実験を邪魔  
するな』という依頼を受けてるから、邪魔しに来たわけじゃないよ。  
」

依頼？誰がンな事したんだア？逆に言えば依頼がなかったら邪魔し  
てたつーことか？この最強相手オレに？

「じゃあ何しに来たんだデメエ？自殺願望者か？まさかこのオレを  
倒しに来たとか言うンじゃねエよなア？」

まア万が一にもねエが、戦つてもしオレが死んだら実験は中止にな  
つて依頼とやらも失敗になるから、それはねエだろオが。

「違うよ。キミに興味があつてねえ。色々知りたくて少し話をしに

来たんだ。」

興味？このオレに？最強の称号じゃなく、オレに？今までにそんな物好きなヤツはいなかった。

「ああ、俺の名前言ってなかったね、俺の名前は——」

その時、オレはこんなことを思っちまった。

——このフザけたヤツとの出会いで、何か変わるのか？

『正体不明』

ここは、陽炎の街。

私以外の全ての人は陽炎のように姿・役割を変えていく。

私が店に入ったら、客のお爺さんが若い店員に変わる。

私が横を通り過ぎたら、小さな女の子が不良の少年に変わる。

この街に私以外で形の定まったモノはない。

私は一人、陽炎の街を彷徨う。

昨日も、今日も、きっと明日も、それは変わることはないのだろう。  
でも、もし出来るのなら私は――

その時、私はあるモノを見つけた。

視線の先には黒い影のような人型。この陽炎の街ではありえないモノだった。

この街のヒトは姿が定まっていなくとも少なくとも人の姿をしている。

でもあれは違う。

まるで影が人の形を無理矢理とったようで、顔の表情や体の起伏も分からない。時々身体が揺らぎ、今にも崩れるのではないかと心配になる。

だけど、そんな事より重要なのは私が認識しても姿や役割が変わらないということだ。

黒い人型は私の方に歩いてきた。そして私の前まで来ると立ち止まった。顔のパーツが見えないのに、何故か口が動いた気がした。

『見ーつけた』

その黒い人型は電話越しのような声だったが確かにそう言った。言葉を発した。私以外存在があらゆる世界で。

『初めまして、『虚数学区の鍵』。キミの名前を覚えてくれないかな？』

「わ、私の、名前は――」

――その日から、この街の風景が変わって見えた。

## 閑話（後書き）

更新が遅れたというか止まってしまってますいませんでした！

学業が大変になったり、他にやる事が出てきたり、テストがきたり、他の二次創作を考えたり・・・自業自得ですね。すいません。さて、今回は伏線貼りまくりの回ですね。全部回収出来るかどうか・・・

という事で次回も頑張りますので、よろしくお願いします。

### 三沢塾の夜（前書き）

久しぶりの更新！！待っててくれた方、すいませんでした！

そしてせっかく張った伏線は無視！！詳しくはあとがきで。

とりあえず姫神の出番はあるのか！？

## 三沢塾の夜

『上条当麻<sup>カミヤン</sup>』が死んで、『上条当麻』が生まれてから数日たった、ある晴れた昼下がりに、珍しく昼から自室にいた時の事……

「やつほートキヤン。ちょっといいかにゃー？」

窓からツツチーが入ってきた。

「やあ、ツツチーじゃないか。どうしたんだい？」

「依頼だ。魔術側<sup>マジツチ</sup>のな」

その顔は、一瞬で魔術師・土御門元春のモノになった。

「……で、ご所望のモノはなんだい？」

8月8日

夕方からもう夜になろうという時間、夕飯のカレーの準備をしていたら、ドンドンドンッ！とドアを叩く音が聞こえてきた。

ドアを開けようとするとかかに引っかかって開かない。とりあえず声をかけてみる事にした。

「どちら様で？」

「・・・・・・・・お、お腹へったんだよ」

「にゃ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・インちゃん？・・・・・・・・と三毛猫？」

ドアの前にインちゃんことインデックスが倒れていた。ドアに引つかかっていたのは彼女だった。

彼女は隣にある上条当麻の部屋（ここは男子寮）で暮らしているはずだが・・・・・・・・

とりあえず部屋に上げることにした。

「ガツガツガツガツ・・・・・・・・」

「よく食べるねえ・・・・・・・・」

とりあえず何か食べさせようと夕飯のカレーを差し出したら一気に食われた、全部。そう全部だ。今日の分も作り置きの方も全て。欲望に忠実すぎやしないかい、このシスター？ていうかこの三毛猫（名前はスフィンクスらしい）もカレー食ってたけどいいのかなあ？

「で、どうしたんだい？ていうか上条は？」

「えっとね、とうまはね、確か『チョーハイテクプライマリーカルチャー施設』ってとこに行ってるよ」

「・・・・・・・・・・は？」

何だその意味分らない上に胡散臭い名前の施設は？

「えつとね『超磁力式大脳皮質検出装置』とか『ビリビリマイナスイオンビーム』とかよくわからない単語がいっぱい並んでるんだけど」

・・・・・・・・・・インちゃんを来させない様にするために  
適当に言った、ということはなんとなくわかった。

「とりあえず・・・・・・・・・・インちゃんは留守番って事なんだね？」

「うん。そうかも」

「じゃあ力ギ閉めてきたかい？」

「ううん」

「ダメだろうそれじゃ、一人じゃ寂しいだろうし、俺が上条の部屋に行くよ」

「わかった。・・・・・・・・・・あれ？」

「どうかした？」

「とき、前はとうまのこと『カミヤん』って呼んでなかったっけ？」

——流石完全記憶能力者。そんな事まで記憶しているのか・・・

・・・

「・・・・・・・・そうだねえ、色々あってちょっと間を置いてるのさ。それよりさっさと向こうに行こう」

まあ間違ってないし言い訳としてはこれでいいか。

上条当麻の部屋に行くと電話が鳴っていた。

「え？ええ？どどどどどっしよう！？」

インちゃんがパニックに陥った。

「・・・・・・・・取らないのかい？」

「え、ええ！？私が！？」

「俺が取っても駄目だろう？だったらキミが取るしかない」

「わ、わかったもん！！」

インちゃんは深呼吸を二、三回してから電話の前で固まり、そして受話器を取った。

「ひゃ、ひゃい！こちらあのこちら、Index | li・・・・・・・・..  
じゃなかった！えっと、カミジョーです！もひもひ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

カミカミだった。どうやら相手は上条当麻らしい。  
面白いので眺めておく。

「冷蔵庫の中にラザニア二つあったけど、もしかして一つはとうまの分!？」

「・・・・・・・・食後だったのか?しかも二人前。人のカレー食い尽くして?」

「冷蔵庫の中にプリンもあったけどもしかして・・・・・・・・」

デザートも食べてたんだねえ、この暴食シスター。なのに人のカレーを食い尽くしたのか。

インちゃんは最後に「ぎょ~~~~!!」という奇声を上げながら受話器を電話に叩き付けた。あ、壊れた。

インデックスは生意気な三毛猫を調教(?)するために風呂に連れて行った。ちなみに風呂のお湯は影宮が入れてあげた。

しばらくすると、インデックスが風呂から出てきて、そのまま部屋からも出て行った。

その後を着いて行くと、インデックスは部屋の扉のすぐ横の壁を見ていた。そしてまた走り出した。

インデックスの見ていた辺りを見るとそこにあったのは一枚のカードだった。

それを見て、影宮は気付く。

「魔術関連、か……これはステイル」マグヌスのものだねえ」

影宮はステイルの魔術がどんなものかは知らない。ただ、一度会った時にこのカードを手にしていたのを見ている。

おそらく寮が火事になったのと神裂の魔術の差から考えて、攻撃性の高い炎の魔術だろうと推測できた。

影宮は留守番のインデックスの代わりに戸締りをしてから、インデックスを追いかける。

幸い、インデックスはまだ視界の隅に移っており追いかける事は十分に可能だった。例えば彼女を見失ったとしても、影宮には彼女の行き先が予想できる。それはもはや確信に近い。

そして案の定、インデックスが辿り着いた場所は、予想通りだった。その場所とは――

「やはり、三沢塾か……」

影宮の予想通りの場所であった。

三沢塾とは、『外』の有名進学塾の一つで、情報によれば学園都市に変に染まったせいで科学崇拜のカルト集団に変異した団体だ。そしてある特殊な能力者を巫女として祭り上げている。その能力者とは……

「『ディーブ・ブラッド吸血殺し』、ヒメガミ・アイサ姫神秋沙」

そして、魔術側まじつの依頼で調べた情報では三沢塾にはすでにそのカルト集団は存在しておらず、錬金術師が占領している。

その錬金術師は三沢塾を破壊することなくそのまま乗っ取ってしまったのだ。下の人間は上がすぐ変わってすることに気付いてすらいない。そして『吸血殺し』も錬金術師の手の中だ。

いや、正確には錬金術師の目的は『吸血殺し』だった。そのついでに三沢塾を占領したといったほうが正しいだろう。

インデックスが立ち止まり、警戒しつつも迷いなくビルに突入していったのを見て、影宮は考える。

（おそらくこのビルは何らかの魔術が施されているんだろう。禁書目録が警戒していたのを見ると、外敵から身を守る為のものでなく、侵入者の迎撃する為のものか？

そして彼女が迷いなく入っていったのを考えると、上条当麻がここにいる事は間違いなく、禁書目録が彼がここにいたら危険だと判断したことがわかる。さて、俺はどうするべきか………)

そんな事を考えていると、なにやら人の気配が遠ざかっていく。周りを歩いていった人がこの場から去っていった。

自身も帰ろうかと思ったが、思いとどまった。以前に同じ感覚を味わったことがあったからだ。

(これは確か、人払い、<sup>Opilia</sup>だったか?)

おそらく魔術師がいるのだろう。影宮はとりあえずその場から去った振りをして、近くに身を隠す。そうしてその場から誰もいなくなつた後、誰かが近付いてきた。足音からして三人ほど。鎧でも着ているのか、その音は重厚だ。

(目に見える範囲にはいないが、確かにいる。機を伺っているのか?)

少しすると、三沢塾の入り口から誰かが出てきた。あれは………

・  
「上条当麻?」

そのままふらふらと歩いてどこかに行ってしまった。上条は間違いなく今回の件に関わっている。ならば向こうの後を付けるか………  
・・?

(……いや、上条当麻よりも今はこっちだな)

そう判断して、影宮はそのまま待機を続けた。

そして、上条が去ってから完全に人氣がなくなった時に、昔から西洋で着られていたような全身鎧を着た人が三人現れた。なにやら儀式の準備を行っているようだ。

（状況と情報からしてあの鎧はローマ正教の魔術師だろう。そして行うのは攻撃魔術、いや、広域殲滅用の魔術か？三沢塾ごとターゲットを確実に破壊する、か……。『多くの救いの為に少数の犠牲』……。王道の十字教らしい考え方だ。さて、どうするか……。）

すると、先程どこかへいった上条が走って戻ってきた。

（？どういうことだ？何故戻ってきたんだ？）

疑問に思いながらも影宮は様子を伺う。

上条が何かを伝えているが、それを鎧は聞き流して、腰に吊るしてあった剣を抜き、空に掲げた。そして振り下ろす。遠吠えのようにラッパの音を響かせて、

次の瞬間、世界から一切の音が消えた

血のように赤い光が何百何千と束ねられ、一つに融合された紅蓮の神槍が、天上から雲を引き裂き、三沢塾のビルの一つに降り注ぎ、貫いた。

直撃をうけたビルは元の高さの半分ほどまでに圧縮され、その直撃の余波で、隣接していて渡り廊下で繋がっていた二つのビルも倒壊を始める。

崩れた建物からは砂が零れるように人が落ちていき、瓦礫は周りの建物に飛散し、被害を拡大していく。

（凄まじいねえ。おそらく、アレはあの鎧一人によるものではなく、大人数の力を合わせて始めて出来るモノなのだろう。どれほどの数かはわからないけど・・・・・・）

上条が叫びながら三沢塾の方へ走っていく。その時、異変が起きた。

（？なんだ？）

巻き上げられた粉塵が三沢塾のあった場所に流れていく。いや、それだけではない。先程跡形もなく崩れ去ったはずのビルが

ビデオの巻き戻しのように元に戻っていく。

まるで、何もなかったかのように。

「……………こんなこともできるのか。錬金術師……………興味が出てきたねえ」

そうならば行動あるのみ。

影宮は気配を絶って立ち止まっている上条達に近付き、誰にも気付かれないように上条の影の中に潜り込んだ。

（ついでにキミも見極めよう。上条当麻）

### 三沢塾の夜（後書き）

というわけで今回姫神の出番はありませんでした。姫神ファンの皆さんは次回に期待してください。

木山先生編（教え子恢復編？）ですが、テレスティアーネさんの口調が思い出せなくて……。本編にはあまり関わらない予定なのでわざわざ伏線を張ったのにそれを無視して後回しにさせてもらいました。

とりあえず、書かないという事はない（はず……。？）です  
ので書き終えたら追加で投稿したいと思います。

## 和解（前書き）

この話書いてて、アウレオルスというキャラがすごく気に入ってしまいました。こんな味のあるキャラだったとは……

## 和解

錬金術師アウレオルスⅡイザード

彼はカンセラリウス隠秘記録官として所属していたローマ正教を裏切り、三年もの間姿を眩ませ、遂に錬金術師にとっては悲願のアルスⅡマクナ黄金錬成を完成させた。この科学側のトップである学園都市で、というのは皮肉だが。

さらに『ディープフラッド吸血殺し』も手に入れた。彼女を利用し、次は『カインの末裔』吸血鬼をこの手に収めて見せる。そう考えていたのだらう。

彼がそこまでした理由は、たった一人の少女を救う為だった。

## 禁書目録

一年周期に記憶を消さねば生きていけない少女。彼は彼女の教師役として接し、救おうとして救えず、そして忘れられた。

彼は救いたかった。彼女を。誰の他でもない、自分の手で。魔道書も黄金鍊成も『吸血殺し』もその為の手段に過ぎなかった。

しかし、その願いは叶わない。

何故なら彼女はすでに救われているからだ。どこの誰とも知れぬ赤の他人の手によって。

救われた人間をもう一度救うことはできない。もう、自分の隣に彼女が立つことはない。たとえ、黄金鍊成をもつてしても、それは、不可能だ。

そして、捕らえられたインデックスが目を覚ました時、彼女は彼の事など一切目に入れなかった。彼女自身の身など二の次で、ただ、上条当麻の無事な姿を見て、笑ったのだ。彼女の為に全てを捨てたかつてのパートナーなど気にもせずに。

自身を支える柱が折れ、どうしようもなくなった彼が取った行動は彼女を救ってしまった人間への八つ当たりだった。

たとえ禁書目録が彼に救われなかったとしても、彼には禁書目録を傷つけることは出来なかった。それほどまでに大切だった。

黄金鍊成によって言葉一つで殺せる。実際、彼の一言で上条当麻やステイルⅡマグヌスは地に押さえつけられた。

しかしそれでは彼の自我が保てないだろう。倒す為ではなく楽しむ為に攻撃する。

そこへ

「待つて」

姫神秋沙が立ち塞がった。ただ上条達を守るためだけではなく、崩れつつあるアウレオルスも心配して。

しかし、彼にとって必要だったのは姫神秋沙ではなく『吸血殺し』、もつといえは禁書目録を救う為の手段である。

インデックスを救う事ができない今、姫神秋沙が『吸血殺し』だろうが関係なく、自分を邪魔する障害でしかなかった。

「邪魔だ、女——」

上条はその事に気付いて、何とか拘束を右手で壊して、姫神を突き飛ばそうとしたが、

「——死ね」

その言の葉は、姫神の命を容易く絶った。

外傷はなく、病気の類でもない。しかし、確実に姫神は死に陥った。まるで体から魂を抜き取られたかのように。

糸の切れた人形のように仰向けに倒れていく姫神。

その顔はくしゃくしゃに歪んだ笑顔だった。

それはあらかじめ覚悟していた、しかし変える事のできなかった結末に対する表情だ。

誰にも求められず、最後までモノのように扱われた少女は、最後までヒロインになれずに、あっさりと死に逝く事が決定した。

それが、上条にとっては許せなかった。

錬金術師の行動が、ではなく、姫神がこのまま死んでいくことが。

錬金術師など今は目に入らない。上条は倒れ逝く姫神に飛び掛った。

「っけんじゃねえぞ、てめえ!!」

そうして、姫神の身体を抱きかかえた。その身体はやけに軽かったが、身体を抱える右手からかすかな鼓動を感じられる。

「な……我が黄金の錬成を、右手で打ち消しただど?あり

えん。確かに姫神秋沙の死は確定した。その右手、聖域の秘術でも内包するか！」

錬金術師が何かを言っているが、上条当麻にとってどうでも良かった。

ただ、彼の身を本当に案じていた人間に怒りを押し付けて、一人満足する。

そんな彼の行動を認めない。認めるわけにはいかない。それだけだった。

それは、記憶を失くす前の上条当麻がインデックスを助けた理由と酷似していた。

目の前の理不尽を認めたくない。認めるわけにはいかない。あの時  
もただそんな思いだけで一人の少女を救ったのだ。

「いいぜ、アウレオルス・イザード。テメエが何でも思い通りに出  
来るってんなら——まずはそのふざけた幻想をぶち殺す——！」

この時、ようやくバラバラだった二つの上条当麻は一つに纏まった。

結局、アウレオルスに勝てたものの、10日と経たずに再び入院することになり、戦闘で斬られた右腕も一日でくっ付いてしまった。

その後、ステイルから事後処理について説明をうけ、ステイルが帰っていくのと入れ違いにインデックスが病室に入ってきた。

「そういえば、とうま、ときと何かあったの？」

「?ときって………」

記憶を探る。確か、記憶がなくなってから一番初めに会った友人のことだ。確か名前は影宮刻。寮の部屋のお隣さんで、退院後、インデックス関係で何回かお世話になってる。

「影宮がどうした？」

「ときは前とうまのこと、『かみやん』って呼んでいたのに、今は『上条』って呼んでたから何かあったのかなと思ったんだよ」

ぎょっとした。驚きと焦りが込み上げてくる。

「で、ときに聞いてみたら『色々あったんだよ』だって。色々って何？」

そんな事を聞かれても俺にわかるハズがない。何故なら記憶にないからだ。いや政治家の得意技ではなく、実際にないのだ。

どう答えたらいいのか迷っていると、誰かが入室してきた。

「やあ、上条。お見舞いに来たよ」

「あ、影宮・・・・・・・・」

噂をすれば影。影宮が現れた。

「インちゃん、ちょっと上条と二人で話したいことがあるから外してもらえるかなあ？」

「!？」

何だって？マズイ・・・・・・・・二人で話したいことってなんだ・・・・・・・・？コイツに俺の記憶があっても、俺にはコイツの記憶はないんだぞ。

「えー？二人で話って何？はっ！もしかして私を除け者にして二人でおいしいものを食べに行くつもりなの!？」

こいつの頭の中は食い物でいっぱいなのか？

「違うから。それじゃ、これで夕張メロン味のポテトチップでも買ってきたさい」

そういつて影宮はインデックスに小銭を渡す。

「うん！わかったもん！」

するとインデックスは走って病室を出て行ってしまった。

「……………さて、上条当麻。互いに腹を割って話そうか」

落ち着け。冷静になって、ばれない様にしないと……………

「腹割って、て何の話だよ？別にお前とそんなシリアスになるような話なんて——」

「キミ、記憶がないんだろ？」

「——」

絶句した。

な、何でコイツがそれを知ってた！？

お、落ち着け！たぶんコイツは憶測とかでそんな事を言ってるだけだ。今焦ったら相手の思う壺。

それにコイツはインデックスとも交友がある。コイツからインデックスにその情報がいつてしまうかもしれない。

それだけは絶対に阻止しなければならない。

「はあ？何言つてんだお前？そんな冗談みたいな話があるわけねーだろうが。お前あれか？少し寝不足でおかしくなってるんじゃない——」

「誤魔化す必要はないよ。これはもう確定情報だ。キミが生まれた日に盗み聞きしてたからねえ」

「……何だと？それじゃコイツは初めて俺と会った時から、

すでにその事実を知っていたということか？

「安心しなよ。別に誰かに言うつもりはないしねえ。キミの偽善使フォックスワいに付き合っドてあげるよ」

「……どういうことだよ」

「言葉の通りさ。ただ、キミの事を知っている人間がいるという事を知っておいてもらっただけさ」

「そういうことじゃねえ！何で最初から知ってたのに知らねえような態度してたんだっつってんだ！！」

「…………それはねえ、俺がキミに『上条当麻』の情報を必要以上に与えないようにする為だよ」

「何だと？」

「俺がしようと思えば、キミに情報を与えて、キミを以前の上条当麻のように見せることも可能だった。でもそれじゃあ面白くないだろ？」

「面白……………？」

「キミが俺の思う『上条当麻』のように動くようになって、それは『上条当麻』の行動ではない。彼の行動は俺が予想できる範囲で動く時と、予想できない範囲で動く時があった。それを俺が再現できるはずもないし、それだったらキミが自分で考えて動いてもらった方が面白い結果になるだろう？」

「そ、それだけの理由で？」

「ああ、そうだねえ。俺にとってはそれが結構重要だったりするからねえ」

面白いかどうか。これが影宮にとって大事な事らしい。まあ何が面白いのかはわからないが……………

「実際、この一週間ほどでキミの人格を見せてもらった。もちろん昨日の戦いもねえ」

昨日の戦い？それって……………

「三沢塾のことか？」

「当然。それ以外に何かあるのかい？」

見てたって……どこにいたんだ？

「それを踏まえて、俺はキミを俺の友人の『上条当麻』として認めようと思ったんだ。だからこうしてここに来たんだ。これからは今まで通り、カミヤンと呼ばせてもらうねえ」

そういうと、影宮は部屋の出口の方へ歩いていった。

「あ、何か困ったことがあったら連絡してくれ。『レンタル』として格安で手伝ってあげるよ」

「おい！おま——」

引き止めようとした時、

「ただいまー！あれ？とき、もう帰るの？」

インデックスが、ポテチの袋を持って病室に入ってきた。

「ああ、話も終えたしねえ。また来るよ、インちゃん、カミヤン」

「うん、またねー」

「お、おう………」

インデックスが戻ってきたことで影宮を引き止めることはできなくなった。

## 和解（後書き）

姫神のセリフは一言でした。姫神ファンの方は残念でした。

上条と影宮は和解はしたものの上条は少ししこりが残っているように感じています。まあ、二人とも気が合うのでそんな感触もすぐになくなるんでしょうね。

次はついに欠陥電磁編および一方通行編ですね。頑張ります。

### ミサカ（前書き）

更新が大いに遅れて申し訳ございませんでした。

短いですが今回から欠陥電磁編です。

## ミサカ

8月15日

その日、影宮の部屋で二人の男が密談をしていた。

「——というわけで、キミにはフラグ乱立能力があるんだよ」

「はっ！そんな事言ってこのカミジョーさんを騙そうったってそうはいきません！この俺がそんな夢のような能力を持ってるわけねーだろーが！..」

「いや、実際持つてるんだけどねえ……」

相手は隣の部屋の住人、上条当麻であり、記憶喪失者である。その記憶の齟齬を埋める為にこうして事情の知っている影宮を訪ねているのだが、影宮のいう事をどれも信じようとしない。まあ、影宮自身も信じないだろうな、という事実ばかりを教えているので無理なのだが。

ちなみにあの敬虔な子羊、暴食シスター、インデックスはというと、上条の部屋にてテレビにかぶりついてアニメを見ている。

「と、そろそろ時間だ」

「？どっか行くのか？」

「今日は保護者の家に泊まる予定なんだよ。それに依頼もあるしねえ。というわけでさっさとあの暴饮暴食シスターのお守りに戻ると

いい」

「保護者？お前の保護者って学園都市内にいんの？」

上条が疑問に思ったことは不思議ではない。この学園都市は基本学生しかいないのだ。大人は教師や研究者などの少数しかおらず、大抵学生の親は外にいることが多いので学生が保護者に会いに行くのは滅多に出来ないだ。

「うん？そういえば言ってなかったな。黄泉川愛穂っていう俺達の学校の体育教師だよ。緑のジャージの」

「げ。もしかして俺と面識ある？」

「安心するといいよ。そんな名前を呼び合うような仲じゃないさ。精々コイツ顔見た事あるなーぐらいの面識だねえ」

「そ、そうか……」

安心してホッと息をつく上条。

「もし下の名前を呼び合うような仲間ったら殺す」(ボソッ)

「え？」

「さて、そろそろ戸締りしないとねえ」

「ちょちょ！今何かボソッと怖いこと言わなかったかおい？」

「と言うわけでさっさと帰ってくれ」

「ちょ、そんなに押すなよおい！」

そついいながら影宮はぐいぐいと上条を玄関に押していく。

「あ、そういえばカミヤん、モエちゃんがそろそろ補習の補習を始めるって言ってたよ。明日ぐらいに連絡行くんじゃないかなあ？」

「は！？何だよそれ！？補習の補習っておかしくねーか！？」

「補習サボり続けたキミが悪いんだけどねえ。というかさっさと出て行ってくれ」

「前の俺は補習すらサボったのかよ！？つーかお前少しは俺を労わるうとか思わないのかよ！？」

「ない。自業自得だろ？」

その言葉を最後に、上条は影宮に蹴り出された。

「……友達から見放されるなんて……ふ、不幸だ……」

今日も些細な不幸が降りかかり続ける上条だった。

今日の依頼内容は『子猫探し』。まあ、ベタと言つか何と言つか……

その最中、影宮はとある人物と出会った。

「で、キミは何をしているんだい？」

「誰ですか？とミサカは首を傾げます」

それは御坂美琴、ではなくその姿そのままの別人であった。

彼女は『絶対能力進化（レベル6シフト）』計画の為に作られた  
二万人いる御坂美琴のクローン『妹達』<sup>シスターズ</sup>の一人である。

「俺？俺は影宮刻。でキミは何番？」

「…ZXC741ASD852QWE963」。とミサカは符丁<sup>パス</sup>の  
確認をとります」

「別に取りなくていいよ。知ってるから。まあ大体9000から1  
0000辺りかなあ？」

「了解しました。とミサカは勝手に理解します。ミサカの検体番号<sup>シリアルナンバー</sup>  
は9983です。とミサカは投げやりに返答します」

そついうとミサカクローンは歩き出した。

「9983か……結構進んでるなあ」

彼女がどこに向かっているのかは知らないが、なんとなく同じ方向に歩いていく。子猫探しといっても範囲が広すぎるのでのんびりやっ歩いていくつもりだったし問題はない。

「？あなたは実験の関係者ではないのですか？とミサカは疑問を抱きます」

「一応関係者といえば関係者になるんだろうけどどうなんだろうねえ」

「この人胡散くせー。とミサカは率直に思ったことを内心に止めます」

「止めてないよねえ……ん？」

そんなやり取りをしていると、路上駐車してある車の側に、見覚えのある、というか自身の保護者であるジャー<sup>アンチスキル</sup>ジをきた女性警備員がなにやら慌てているのを発見したので影宮は声をかけることにした。

「や、愛穂。そんなに慌ててどうしたんだい？」

「刻！？こんな所でどうしたじゃん？つてそれどころじゃなかったじゃん！実は車内に赤ん坊が取り残されててもしかしたら熱中症になってるかもしれないじゃん！」

「大変だねえ。誰か呼んでこようか？」

どうしようかと悩んでいると、

「ミサカが何とかしましょうか？とミサカは人事に首を突っ込みます」

ミサカクローンが口を挟んできた。

「何とか出来るじゃん？」

「ミサカ的能力は『エレクトロマスター発電能力』なのでこのような電子ロックなら…」

そついいながらミサカクローンは車のドアに手を触れ、放電した。すると、ドアのロックが外れ、ドアが開くようになった。

「この通り解除可能です。とミサカは胸を張りながら宣言します」

「おお、サンキューじゃん！」

そついつて黄泉川は車内から赤ん坊を抱え出す。

「これは——！急いで処置しないとマズイじゃん！！」

「それじゃ車の持ち主がきたら説明しとくから病院とかに連れて行ってあげなよ」

「悪いけど頼むじゃん！一応警備員も呼んどくから！」

そう言つて黄泉川は赤ん坊を抱えて走つていった。

「……ん？ミサカはどこに行った？」

いつの間にかいなくなっていたミサカクローンがどこにいったか辺りを見渡すと、そこにはミサカが二人いた。

片方は先程まで隣にいたクローン。そしてもう一人は態度や挙動がらして、オリジナルの御坂美琴だと予想できた。

「あんた…何者？」

なにやらシリアスな雰囲気の流れる中、ミサカクローンはこう言った。

「ミャー」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

シリアスな雰囲気がぶち壊しだった。

「は？」

美琴も何を言ってるのか理解できず、混乱している。

「…と鳴く四足歩行生物がピンチです」

そうミサカクローンが指差す木の上に子猫が縮こまっていた。

「あ、ちょうど依頼されてた子猫だ」

ミサカクローンの説明によれば先程のロックを開けた時の電撃に驚いて木の上に駆け上っていき降りれなくなったそうだ。

「そんなことはどーだっていいのよー!」

「ならお姉さまはあの生物が地面に叩きつけられても構わないのですね。とミサカはお姉さまのあまりの薄情さにドン引きします」

「ちょ!?!?ドン引きって……」

そんなやり取りをしている横で、地味にピンチの子猫はというと…

「よつと」

影宮が木の幹を利用した三角跳びをして救出されていた。

「これで依頼完了つと。」

「てか何でアンタがここにいんのよ!!」

美琴のイライラの矛先が影宮に向かった。どうやら影宮の存在に今更気付いたようだ。

「今更気付いたのかい？さっきからいたんだけどねえ」

「……まあいいわ。これで子猫も助かったわけだし、アンタの事を聞かせて——」

「お姉さまはその胡散臭い人よりも使えないんですね。とミサカはお姉さまに侮蔑の視線を向けます」

「な！アンタはあ……!!」

『にゃー』

影宮の手の中にいる子猫が鳴いた瞬間、美琴の顔がふにゃっと崩れた。

「……ち、近くで見ると可愛いわねこの子猫」

「コネコ？それがこの生物の名前ですか？」

二人して影宮の手の中の子猫に顔を近づける。

「猫の子供だから子猫よ。でも怯えられちゃうのよねー」

「？」

「私の体から出てる微弱な電磁波に反応されちゃうの」

そういつて美琴が子猫のほうに手を伸ばすと子猫がビクビクと震え始めた。

「どうやらミサカもダメなようですね」

ミサカクローンも試してみるが同様の結果だった。

………

「そーじゃなくなつて!-!」

突然の美琴の大声で、影宮の手の中にいた子猫が逃げ出す。

「あ。ちょっと待て」

それを追いかけていく影宮。幸い、子猫はすぐに捕まえる事が出来た。

もう一度戻ってきたら、二人のミサカはなにやら話しているようだった。

「——そこでアンタの製造者をとっ捕まえて直接聞くことにするわ」

どう行動するのか決まったのか、ミサカクローンが歩いていき、その後を美琴が付いていく。

「それじゃ、ミサちゃん。またねー」

影宮は車の持ち主か警備員がくるまで車の側にいなければならないので別れの挨拶をかける。

「出来ればアンタとは二度と顔を合わせたくないわ」

そう返答し、美琴は去っていった。

この時、美琴は気付かなかった。影宮が美琴にしか「またね」と言っていない事に。

そして、それがどういう意味を持っているのかという事に。

二人の姿がみえなくなってから、影宮は一人呟く。

「……これで、あの実験に『超電磁砲<sup>レールガン</sup>』が関わる。これで俺の計画が少しでも進むといいけどねえ」

その顔に、いつもの笑みは浮かんでいなかった。

## 研究所襲撃戦

御坂美琴は知った。その実験の存在を。

『絶対能力移行計画』  
レベル6シフト

学園都市最強の超能力者、第一位『一方通行』アクセラレータをレベル5から6に進化させる為の実験。

『樹形図の設計者』が出した演算結果では、『一方通行』は『超電磁砲』ルガンを128種類の戦場にて128回殺害することで絶対能力レベル6へと進化する。

しかし、『超電磁砲』を128人も用意するのは現実的に不可能。

そこで目を付けられたのが超電磁砲の量産計画『妹達』シスターズだった。

スペック性能では劣る超電磁砲のクローンを代替とする事で計画を継続しようと思ったのだ。

そして、『樹形図の設計者』が出した演算結果は『超電磁砲のクロイン2万體とあらゆる条件で戦い、これらを全て殺害すること』であつた。

当然、美琴にそれを見逃せるわけがなかった。正義感といったものもあつたが、目の前で先程まで一緒にいたクローンが殺されたというのが一番の理由だつた。

故に挑んだのだ。第一位・一方通行に。

しかし、何も出来なかった。

電撃の槍も、砂鉄の刃も、磁力も、果ては超電磁砲も、

一方通行の能力の前には何一つ通用しなかったのだ。

絶望に打ちひしがれる美琴。

しかし、彼女は諦めない。

超電磁砲は一方通行には勝てない。ならば――

布束砥信。

彼女は『絶対能力移行計画』の前身である『レディオノイズ量産型能力者計画』に関わっていた。

実験の凍結により、一時離れていたが、『絶対能力者計画』の始動にあたり、再び呼び戻された。

その時に、関わったミサカのクローン体を見て、彼女を単なる造り物だと思えなくなった。

故に、彼女は行動を起こした。

その結果は――

――8月19日

Sプロセス社脳神経応用分析所にて

「超速やかに上に運んでください」

「は、はい……」

学園都市の暗部である『アイテム』。彼女らが受けた指令は『研究所を襲う謎の侵入者を撃退しろ』というものだった。

『アイテム』の一員である絹旗最愛はこの指令に従い、二基あるうちの二基にて待ち伏せをし、この区画にやってきた侵入者、布束祇信を文字通り鎮圧した。

もう一基の方では彼女の仲間が別の侵入者と交戦しているが、絹旗の任務はこの研究施設の防衛。向こうは向こうで何とかやるだろう。

「あっちのカプセル？中に何か入ってるような……」

「仕事と無関係な物を超ガン見していると口封じに超消されたりしますよ」

絹旗のその言葉を聞いた下っ端の男は、慌ててソレを視界から外した。

「コイツはどうなるんですかね？」

侵入者の女を担ぎ上げたもう一人の下っ端が訊いてくる。絹旗はそれに対する答えを口にする。

「さあ？私達は超仕事しただけですから。利用価値があれば命だけは助けて貰えるんじゃないですか？命以外何もかも失った超クソッ

タレな人生がお待ちかねですけど」

そうして、地上に戻ろうとした時に、異変が起きた。

「ぐあっ!？」

「ぎゃっ!？」

殴るような音の後に悲鳴が二つ。その声は下っ端の二人の声だった。

「!？まだ動け——!？」

絹旗が振り返るとそこには倒れた下っ端二人の他に、先程までいなかったはずの男がいた。彼はフードを被って顔を隠しており、その両腕には気絶した侵入者の女が抱えられていた。

(コイツ、テレポーター空間移動能力者ですか!？だったら——)

「彼女はもらっていくよ。悪いねえ」

「そんなこと超させるとでも思ってるんです、かつ!」

言い切る前に拳を撃つ。『オフエンスアーマー窒素装甲』を纏った拳。当たり所によっては死もあり得る攻撃。相手は女を抱えていて両手が塞がっている。避ける暇もテレポートの為に演算する時間も与えるつもりはなかった。しかし——

「!？」

絹旗の拳は空を切った。相手の能力発動の方が速かったのだ。

「今のは……」

ただ、絹旗は見ていた。相手は消えたのではなく、沈んだのだ。地面に向かつて。そしてそこにあったのは……

「影……？」

美琴は逃げていた。

『絶対能力者移行計画』を潰す為に、今まで寝る間も惜しんでいくつもの研究所を潰してきた。

そして残す所、ここともう一基の二箇所にまで数を減らすことが出来た。

しかし今、妨害が入り、今は無様に逃げている。

施設の破壊を優先して、相手に特定されない様、迂回して移動しているのだが、未だ攻撃を受けている。

相手の能力は不明。

一人は壁などの遮蔽物も関係なく貫いてくる光線を撃ってくる長髪の女。

この攻撃は一発でも喰らったら終わりだろうが、何故かどこから来るのか感じるようになってきた。

もう一人は、爆弾を入れたぬいぐるみを所々に設置して、その都度導火線で発火してくる金髪外国人の女。

この攻撃は防ぎやすいが、数が多く、嫌な場所に隠しており、光線に気を取られすぎると爆弾の餌食になってしまうので軽視はできない。

そして何より厄介なのが、相手に特定されないように動いている自分の動きを、何らかの方法で特定する能力を持った黒髪の女だ。あの黒髪の女がいるからこそ、他の二人の攻撃が、自分に向かって飛んでくる。

「くそ… 一体いくつ仕掛けて……」

磁力操作で爆破を避けて宙に浮かびあがったその時、能力の使いすぎによる疲労で一瞬意識が飛んで、一瞬能力が途切れた。

「っ！？しまっ…！！」

着地点にあったぬいぐるみが爆発する。

それを何とかかわしたが、爆風に飛ばされ、空中に放りだされた状態になった。

その時、あの光線が来ると感じた。

（マズい、くる！かわせない！）

そう思い、一か八か、自分の立てていた仮説を実行しようとした時、

「なっ！？」

（何これ！？影が！？）

影が美琴を捕らえ、引きずり込んだ。

結果、光線からは避けられたが、美琴はそのまま影の中に飲み込まれた。

「……………」

能力を発動させていた滝壺理后がビクンツと体を動かせた。

「？…どうしたの？」

「検索対象のAIM拡散力場の消失を確認した」

「そ、じゃあお仕事はおしまいつてことね」

「最後は呆気なかったね」

それを聞いた麦野沈利とフレンドは戦闘態勢を解いた。

「ただ……」

「？何？」

「AIM拡散力場の消失と麦野の攻撃と時差タイムラグがあつたような……」

「でもさ、滝壺がAIM拡散力場を感じ取れなくなつたつてことは、結局あの女が死んだつて事じゃない？」

滝壺の能力、『AIMストーカー能力追跡』なら、たとえ地球の裏側に逃げたとしても相手のAIM拡散力場を辿つて追うことが出来る。それが消えたという事は相手が死んだと言うこと以外考えられない。

「……気のせいなのかな？」

「ま、とりあえず私達のミッションは終了つてことでいいわね？帰るわよ」

「わかった」

「了解」

こうして『アイテム』は施設から去つていった。

「けほっけほっ……」

何が起こったのかわからない。

状況把握のため、回りを見渡すと、そこは白黒の空間であった。広さにしては十畳ほど。椅子、机、パソコンなどが置いてあったがそれら全てがモノクロであった。

色があるのは自分だけで後は白と黒の世界だった。

「一体何が……？」

「やあ、ミサちゃん。4日ぶりかなあ？」

声の方に顔を向ける。そこにいたのは――

「影宮…刻」

いつも薄い笑みを浮かべている気に食わない男、影宮刻だった。

「実は依頼を受けてねえ。『謎の侵略者<sup>インベダー</sup>を撃退しろ』っていう」

それはつまり、コイツもアイツらと同じ、実験の加担者ってこと。

「アンタ…アイツらが何やってんのか知ってるんでしょ？」

「ああ」

悪びれもせずに肯定した。それが、無性に癪に障った。

「だったら何でこんな実験に加担するような事すんのよ!？」

「俺はねえ、助けを求められたら条件によつては助けてやる。俺の興味を引いたら助けてやる。彼女たちにはそれがなかっただけ」

「アンタ、何様のつもりよ…あの子たちには、生きる価値すらないつていうの!？アンタはそんなに偉いのか!？」

「いや、そんな事はないよ。ただ、彼女たちには生きる意志がないだけ。生きる意志のないものを助けるほど俺はお人好しではないんだよ。そんなのは、正義の味方とか偽善者とか、いわゆる主人公<sup>ヒーロー</sup>にでも任せればいい」

「だったら…私がその主人公<sup>ヒーロー</sup>になってやるわよ!あの子たちを助ける主人公<sup>ヒーロー</sup>に!!だから……!!」

「無理だね。今回キミにその資格はない」

「どうして!？」

何でアンタにそんな事を言われないといけないのよ!そう思ってた。だからこそ聞き返したのだ。

それに対するコイツの回答は、たった一言だった。

「キミは、アクセラレータ一方通行から逃げ出した」

「!？」

たった一言。しかし、その一言は私の思考を止めるのに十分なものだった。

「強大な力の差を前に、ただ逃げ出し、『妹達』を助けるために選んだのは彼に関わらないよう済む方法。悪いとは言わないけどさ、これで主人公になると言われてもねえ」

「……アンタに」

「ん？」

「アンタに何がわかるっていうのよーーーーー!!」

次の瞬間、私からアイツに向かって電撃の槍が放たれた。

電撃が当たり、爆煙が上がる。

「アンタが何と言おうと私はあの子達を助けてみせる。だから、アンタを倒して先に進ませてもらうわ!!」

そう断言する。そうだ。私はあの子達を助ける。たとえば、どんな手を使っても！

「そう。ならいくつか教えておくよ」

煙の中から声が聞こえる。

煙が晴れると、そこには直撃したハズのアイツが無傷で立っていた。

「二週間ほど前、『樹形図の設計者』を搭載した人工衛星が何らかの攻撃で撃ち落された。これだけ言えば、どういうことかわかるよね？」

「え……？」

『樹形図の設計者』が……もうない？

この実験は『樹形図の設計者』が出した演算結果を元に行われている。

「実験に不具合が起こっても、再演算は不可能。演算機器に頼りきりの研究者じゃ、どこが間違っていて、どこが合ってるのか、なんて分からないだろうねえ」

だったら……

「実験の前提を崩してやればそれだけで実験は凍結する」

実験の前提

それは一方通行が絶対能力者になるための条件

一方通行があの子達を殺すのは何故？

元々は私を、『超電磁砲』を128回殺す実験だったはず。

その後、再演算して、殺害対象があの子達になった

だったら……

私に、それだけの価値がなかったら？

私が想定以上に弱かったら？

一方通行の攻撃の一撃も耐えられないような弱さだとしたら？

「……今、真っ先にキミの頭に思い浮かんだ方法が、“自己犠牲”なんてものだとしたら」

「!」

「キミは、絶対に主人公にはなれない。おとなしく部屋に帰って寝ていればいい。それで万事解決さ」

「——うるさいっ!」

凶星だった。だからこそ私は再びアイツに向けて電撃を放ったのだ。

「だからさ……」

しかし、電撃の先にアイツはすでにおらず、すぐ目の前まで来ており、そこから腹に膝蹴りが入った。

「がアッ……!」

想像以上の痛み。腹への衝撃は内臓に染み渡り、胃の中の物が口に逆流する。ここ数日何も食べていなかったおかげで口から出たのは胃液だけだったが、痛みと今までの疲労で倒れこんでしまった。

「いくら第三位でもそんなコンディションじゃ俺には勝てないよ？もちろん第四位にもねえ」

「げほッ…！」

第四位？……あの女が…

「全く、明後日は大仕事があるっていうのに」

ヤツはめんどくさそうに頭をかく。それを見て、イラッときてしまった。

「……アンタは…」

「ん？」

思いが口から溢れ出した。止めようとしても出来なかった。

「アンタには力があるのに…、実験の事を知ってるのに…、何であの子達を助けてあげないの？どうして私の邪魔をするのよ？こんな力を持つてるのに…！！」

我ながら無様だと思った。

自分が何とかすると言いながら、何も出来ずに地べたに這い蹲り、こうして他人に懇願する。少しでも思いが通じるように。

でも私のその思いに対して、アイツはこう言った。

「力があれば何でもできる。知っていれば行動できる。キミはそう思ってるのかい？ だったらそれは間違いだ。その考えは捨てておいたほうがいいよ」

それってどういう……？

「力がないからこそ、知らないからこそ、できることもあるのさ。適材適所っていうやつさ」

ってヤバ……視界が暗くなる…

「言っただろ？ こういうのは主人公ヒーローに任せればいいって」

その言葉を最後に、私は意識を手放した。

「もしもし、依頼はこなししたよ。報酬はいつも通りに頼むねえ」

公園のベンチ。影宮はそこに座って依頼達成の報告をして、電話を切る。

「……主人公ヒーローがどうなる事かと思ったけど、何とかできそうだねえ」

たとえ、それがアレイスターの計画通りだとしても構わない。この件に関しては、どうせ自分は動けないのだから。

「だったら、それとは別の所で好きに動かせてもらっよ」

そっういとベンチに寝かせた二人の少女を抱える。

「……まずは病院かな」

次の瞬間、影宮たちの姿は影に消えていた。

## 騒乱の幕開け（前書き）

三ヶ月近くも更新せずに申し訳ありませんでした

そして今回の話も短めでゴメンなさい

## 騒乱の幕開け

8月20日

「——どうということ……？」

御坂美琴は今、Sプロセッサ社脳神経応用分析所にいた。

影宮との戦闘の後、目が覚めるとそこは病院の一室だった。頭の中で状況を整理していると、幻想御手事件の時に世話になったカエル顔の医者が現れて色々と説明された。

どうやら私は昨日の夜、病院の前に倒れていたらしい。

倒れていたのはもう一人にいたらしいのだが、彼女はまだ目覚めていないそうだ。

ケガ自体は大したことはないらしく、眠っていた原因の大半が過労だったようですぐにでも退院していいと言われた。

ということですぐさま病院から出て行って、昨日潰し損ねた二基の研究所を見に来たのだが……

「もぬけの殻じゃない……」

人の出入りがないどころか電子機器すら稼動していなかった

罨かと思ったが、入ってみると中には誰一人としておらず、データ

も全て消去済みであつた。

それはどちらの研究所でも同じ事だつた。

疑問を感じた美琴が携帯端末を調べてみると、Sプロセッサ社の経営破綻が報じられていた。

美琴の頭に色んな考えが入り混じる

――実験はどうなつたの？

――昨日の時点でもう存続でしなかつたの？

――昨日の攻防戦で継続を諦めたの？

――わからないけど……奴らを撤退まで追い込んだんだ……

――やった……？やった！？

――まだやらなくちゃいけないこと、たくさんあるけど

――『あの子達妹達』はもう……死ななくても……

「あれーッ!？」

そんな時、近くで聞き覚えのある声が聞こえてきた。

声のした方を見してみる。

「おつかしーなあ」

そこには自販機の前で立ち往生している、見覚えのあるツンツン頭の少年、上条当麻がいた。

「ひょつとしなくても故障ですか!？マジで!？」

そんなある意味日常の象徴である人間を見た美琴は肩の荷が下りたような気がした

「ちよろつとー」

上条に突っかかる、その行動によって自身も日常に戻れるような気がしたから――

——記憶を失った幻想殺しの少年と超電磁砲の少女が交差するとき、物語は始まる——

8月21日

とある学生寮の一室、日が沈み暗くなってきたその部屋に影宮は一人ベッドに腰掛けていた。

「さてと……それじゃ、よろしく頼むね、ナナシ君」

影宮は誰もいないはずの空間に声をかける。

『めんどくせーな。まあ金はもらったわけだし仕事と割り切ってやってやるよ』

それに対する返答が、ここではないどこかから返ってきた。どうやら念話能力テレパスによって話をしているようだ。

「レイとんも頼むよ」

『任された、ってミサカは刻に頼まれるのを嬉しく思いながら返事をする』

そうして、念話能力は途切れる。今、これ以上何かを話す必要はないからだ。

「期は満ちた。準備も整った。それじゃあ始めようかなあ」

そう言って、一息ついてから宣言する。

「ミッション・スタートだ」

一昨日謎の襲撃者と戦った研究所に、第四位『メルトダウン原子崩し』麦野率いる『アイテム』はいた。

既に役目を終え、もぬけの殻となっている研究所から人通りのない路地を通って歩いていく。

「で、麦野は何を超気にしてたんですか？」

「ん？この前の依頼なんだけど、何か釈然としないのよね」

「釈然としない？超どついうことですか？」

襲撃者との戦闘時、もう一基の研究所にいて三人とは別行動していた絹旗が尋ねる。

「何かね、滝壺が言うには攻撃と検索対象が消えたのにはタイムラグがあつたらしいのよ」

「それは超本当ですか？」

「うん。確かに時間差タイムラグがあつたと思うけど」

「それに結局、ギアラも最初の分よりも少なかったしね」

実はギアラが当初提示されていた分よりも多少減っていたのだ。

それを担当上司に訴えると、「そんなの知らないわよ！アンタたちの手際が悪かったからじゃないの！っていうかコレでも私は忙しいのよそんなことで私の手を煩わせるなこのクソガキどもー！！」と返答してきた。

その後もギアラ交渉（という名の口喧嘩）を続けた結果、当初提示されていた分のギアラを手にかけることができたのだが、それもよく考えるとおかしいことであつた。

そういつた事があつたので実際に戦場となつた場所を見に来たのだが……

「でも見た感じ、変なところ wasn't ね」

「……思い過ごしかしら？」

「そつだよ。結局、麦野の『原子崩し』喰らって生きてる相手なんていないよね」

「はんつ。第四位の攻撃喰らったからって死ぬとは限らねえだろ」

「——！？誰！？」

声に反応して振り向くと、そこには、頭に土星の輪のような装置をつけている男子にホステスのようなドレスを着た小柄な女子、そしておそらくリーダー格であろうチンピラとホストを足して2で割ったような高校生くらいの男が立っていた。

「急に呼び出し食らったと思ったら、こんな雑魚の相手をさせるためかよ。ダルイ仕事押し付けやがって……ていうかこいつのは獵<sup>ハ</sup>ウンドドッグ犬部隊の仕事だろうが」

「……雑魚？」

“雑魚”という言葉に麦野が反応するが、それを気にせずチンピラとホストを混ぜたような男は続ける。

「確か『アイテム』だったか？まさか同じ学園都市の暗部組織を潰す事になるとは……まっ、あるとは思ってたがな」

「同じ暗部組織？どの組織かは超知りませんが、超同じ学園都市の組織である貴方達が何故私達と戦うんですか？」

それは当然の疑問。よっぽどの理由がない限り、暗部組織同士がぶつかり合うことなど認められない。

しかし、相手側にはそのよっぽどの理由があった。

「それは上からの命令だからだ。気に入わねえが今回は従うことにしたんだよ」

「え！？嘘！？何で？！」

「知るかよんなモン。自分の胸に聞いてみるよ」

考えてみるが、思い当たることが全くない。確かに多少の素行は悪いかもしれないが、だからといって始末されるような事はしていない。

そんな事を考えていると、今まで黙っていた麦野が不機嫌そうに口を開いた。

「で、この私を潰せると思ってるの？」

超能力者、第四位の威圧感ある言葉にチンピラだかホストだかそんな感じの男はこう返した。

「当たり前だろ？」

その言葉に『アイテム』のメンバーは驚いた。

自分たちが『アイテム』だということを知っているのなら、麦野のことも知っているはずだ。事実、先程この男は麦野を『第四位』と呼んでいた。

その事実を知っていてなお、あの言葉を出せるなんてその自信はどこから来ているのだろうか？と思わざるを得ない。

「ん？何だ？そんなに意外なこと言ったか俺？」

「そ、そんな余裕ぶっこいていられるのも今のうちじゃない？結局、第四位の麦野に勝てる奴なんてそうはいないわけだし」

「……ああ、そういうことか。一応自己紹介しておくぜ」

何か納得したように笑みを浮かべると、男は『アイテム』の面々に自身の名前を教えた。

「俺は垣根帝督<sup>かきね ていとく</sup>。学園都市の第二位<sup>かくした</sup>『未元物質<sup>ダークマター</sup>』だよ。理解できたか、第四位？」

「げ！？第二位！？」

その言葉に驚愕が走る。

第二位

それはつまり、第四位である麦野よりも上の超能力者だということ。

「ということは周りの人たちは『スクール』というわけですか……」

「なあに、安心しろ。大人しくしてりゃ、痛くないようにすぐに潰してやるからよ」

「……ブチ殺し確定ね」

——ここに、『アイテム』と『スクール』の戦いが勃発した。

エマージェンシー  
緊急事態発生！

暗部組織同士における戦闘が勃発

普段ならば放置しても問題ないが、超能力者同士による戦いの為、規模が拡大し一般人に被害が及ぶ可能性がある。

直ちにこの戦闘を停止させよ。

なお、その際に相手の生死は問わない

繰り返す……

暗闇の中、電気もつけずベッドに腰掛けている影宮。

「さて、そろそろかなあ？」

そう呟くのとほぼ同時にケータイの着信音が鳴り響いた。

「もしもし？……はいはい。……あー成程、了解しました。では依頼料は？……良いでしょう、お請けしますよ。では情報を受け取り次第動きますねえ」

そう言ってから通話を切り、少しすると携帯端末に依頼に関する詳しい情報の書かれたファイルが届けられた。

それに目を通してからそのファイルを七篠に送信し、念話能力によって声が聞こえるであろう七篠に話しかける。

「じゃ、予定通り『アイテム』の相手を頼むねえ、ナナシくん」

『了解だ。しくじんなよ？』

「気をつけるよ」

最小限の会話を終えて念話を切り、

「そろそろ俺も動くのでしょうかなあ」

———そうして、『レンタル』影宮刻は動き出す

## 騒乱の幕開け（後書き）

レールガン6巻を読んで、アニメ版で出てきた春上さんの名前が出てきてました。

ということでポルターガイスト編とかの話を追加するかもしれません。

そういえば、垣根帝督の容姿を自分はチンピラホストという風に認識していました。というか原作にそう書いてあったと思ってました。しかし、15巻を見直してみるとそんな言葉は書いてなかったのです。

あれ？どこでそんなチンピラホストなんて言葉を見たんだろう？

## 介入開始（前書き）

二ヶ月強ぶりの更新です。

……いや、ホントに更新遅くて申し訳ないです……

## 介入開始

どうやっても、何をやっても、実験は止まらなかった。

『力があれば何でもできる。知っていれば行動できる。キミはそう思ってるのかい？ だったらそれは間違いだ。その考えは捨てておいたほうがいいよ』

あのいけ好かない少年の言う通りだった。自分の力があっても、それ以上の力の前にはどうしようもなかった。知っていても何も出来なかった。

私に出来ることはあと一つだけ……あの時に真っ先に思い浮かんだ、あの……

『今、真っ先にキミの頭に思い浮かんだ方法が、“自己犠牲”なんてものだとしたら』

そこまで考えて、身体が震えた。一万人もの人間を死なせておいて、自分が死ぬと思うと震えてくる。

「……助けて……助けてよ………」

思わず出た呟きが闇夜に消えていく。

怖い。でも、あの子たちを助けるためには、これしか方法が……

その時、どこからか猫の声が聞こえてきた。

声のした方を見てみるとそこには一匹の黒い子猫が。そして――

「……何やってんだよ、お前」

見覚えのある一人の少年が闇を引き裂いてやってきた。

――まるで先程の少女の救いを求める呟きを聞いて駆けつけた主人公のように――

……と、御坂美琴ヒロインの下に上条当麻ヒーローが駆けつけた頃、

一人の少年、浜面仕上も戦っていた。

ただしスポーツカーの鍵穴とだが。

浜面仕上は無能力者レベル0である。

いくらスポーツ選手並に身体を鍛えても、いくら鍵開けが簡単に出来るぐらい手先が器用でも学園都市では『無能力者』というだけで

見下される。

そんな扱いが嫌だったから浜面は武装無能力集団スキルアウトになったのだ。まあ彼の所属しているチームのリーダーである駒場利徳の方針でそこまで過激な事はしないのだが。

そして彼は今、先程も述べたように一台のスポーツカーに格闘していた。格闘といっても当然殴り合いなどというわけではなく停めてあった車の鍵を開けて盗ってしまおうという魂胆なのだが。

「——浜面氏！」

「——っ！？って郭ちゃんか……」

褒められた事ではないこと（というか犯罪行為）をしていた浜面は、突然声をかけられて驚いたが、声の主が誰かわかりホッと息をついた。

声をかけてきたのは郭という色々といじくられた浴衣を着ている女の子でどうやらくノ一らしい。浜面としては以前、彼女の忍術（色仕掛けとも言ふ）によって痛い目を見たので少し苦手意識があったりなかったりする。彼女は何か目的があり学園都市に來たらしいが、その目的と言ふのが……

「半蔵様を見ませんでしたか！？」

自身の悪友でもある半蔵を探しに來たという、なんとも男としては羨ましいものであった。

「……あいつならさっきあっち行っただぜ？」

「ご協力ありがとうございます！」

それを聞くと郭はすぐさまその方向へ走っていった。

悪友・半蔵を女が追いかけているのを見て、自らの女運のなさに浜面は少し悲しくなった。

「はあ……いつか世紀末覇者HAMADURAとか呼ばれるようになったり……しねーよな……」

そう呟きながらようやく鍵開けに成功した浜面は早速運転席に乗り込む。そして気晴らしにかつ飛ばすか、と考えながらエンジンキーに針金を数本突っ込み、エンジンを始動させようとして、ふと助手席に誰かが座っているのに気付いた。

「——え！？」

誰も乗っていないのは確認したぞ！？と助手席を見てみれば座っていたのは見覚えのある少年。

「やつほーハマーン」

知り合いである影宮刻が当然のように座っていた。

「誰かと思えばお前かよ……っーかそのハマーンって呼ぶのやめろって言ってるだろ？」

「キミのあだ名だよ。いい感じだろ？」

「どこかだよ。つか普通に名前で呼べよ」

浜面は影宮のことを好きになれなかった。会う度にハマーンという変なあだ名で呼んでくるし、なんとなく信用できなかった。

駒場の知り合いだったのか、時々スキルアウトの溜まり場に顔を出してくるのでその時に浜面と知り合ったのだが、影宮は誰に対しても薄い笑みを浮かべながらにこやかに接してくる。

どうやら保護者があの巨乳警備員らしく、彼女に惚れたらしい半蔵にだけは厳しかったりする。マザコン？いやでも血は繋がってないらしいからマザーじゃないのか？

俺たちと同じ無能力者らしいが、それにしても色々顔が利きすぎるし、自分達とはどこか違うし、かといってスキルアウト以外の無能力者ともどこか違う。実は能力者なんじゃないか？と疑っているのだが、まあ気にしないようにしている。

「ハマーンがダメならバニ面になるけど？」

「何バニ面って！？」

「バニーちゃん大好き浜面仕上、略してバニ面。どうかなあ？」

「やめろおおおお！！てかバニー好きで何が悪いんだああ！？」

……あとこんな風にイジってくるからというのも好きになれない理由の一つだった。

「とりあえず送っててくれないかい？急ぎの用があるんだよ」

「……はあ？何で俺が？」

「送らないと愛穂にチクるよ。バニ面がまた車パクッたって。俺の口を封じるには俺も共犯者にしてしまうのが最善だと思うんだけどねえ」

「やめろおおおお！？わかったよ！！出せばいいんだろ！！てかバニ面もやめてっ！！ハマーンでいいから！」

そう泣き叫びながら浜面はスポーツカーを走らせ始めた。

「これ借りーでいいからねえ。今度何かで返すよ」

「何かってなんだよ？」

「そうだなあ……バニースーツとか？」

「彼女いねー男に何渡そうとしてんの！？渡されてもどうしよーもねーじゃん！！どーしろって言うの！？」

「……自分で着るとか？」

「フザケてんのか！？俺が着たとして誰得だよ！？」

「少なくとも俺得ではないねえ。あえて言えばそっち方面に目覚めたバニ面得？」

「バニ面言っんじゃないやねえええええッ！！」

浜面の悲痛な叫びが学園都市に響いた。

「クソが！！真っ先に死にやがってあの野郎！！」  
先程まで四足歩行ロボットを操っていた暗部組織『メンバー』の構成員、馬場芳郎はそう叫ばずにはいられなかった。そこがネットカフェの一室であつたもそんな事は今の彼にとって些細な問題でしかなかった。

今日の夕方過ぎ、急に舞い込んできた指令に、馬場は『メンバー』の構成員として参加した。

その指令の内容は『アイテム』と『スクール』にそれぞれいる超能力者同士の戦いを鎮圧する

そのために参戦したのだが、結果としてそれは失敗に終わった。

二つの組織の戦闘に『メンバー』以外にも複数の組織が割り込み、そしてその結果、戦場が広がってそれぞれがバラけたのだ。結果として被害を拡大してしまう事になった。

馬場は『スクール』の第二位『未元物質』を追って『メンバー』のリーダーでもある博士のサポートの為に一緒にいたロボットを操縦していたのだが、博士のナノサイズの兵器、オジギソウをすぐさま

攻略され、死亡。操作していたロボットは破壊された。

「クソッ！すぐにここから離れないと……！！！」

そう言つて、自分の荷物を掻き集める。いつこの場所がばれて始末しに来るかわからないからだ。

「それにしても今回の指令、何かおかしくないか？戦闘を止めるところか火に油注ぐことになってるし……」

あの指令を出したらこうなる可能性があったことを上層部が気付かないはずがない。にもかかわらずその指令を出した。

こういう荒事の揉み消しの専門である『ハウンドドッグ 獵犬部隊』や『スパークシグナル 迎電部隊』などの出動はなく、『メンバー』や『ブロック』などの少数精鋭の暗部組織、それも複数の組織に指令が下っているようであった。

これではまるで――

「騒動を大きくする為に指令が来たみたいじゃないか……！？」

そう口に出した次の瞬間、背中からズブリッ、という何かが刺さる音がした。

「あ……え？」

何が？と考える、感じたのは痛みと熱さと寒さというごちゃごちゃした感覚。

誰だ？と考える、思い浮かんだのは、同じ『メンバー』の構成員で人

の背後という限定付きの空間移動能力者。

「さ、査楽……？お、前……」

その言葉を最期に、馬場は息絶えた。

「……………」

馬場を刺した査楽は、倒れた馬場に視線を向けることもなく虚ろな目で虚空を見ていた。

まるで、彼に自我というものが欠けているようだった。

そのまま、査楽は姿を消した。空間移動テレポートで別の場所へ向かったのだ。

磁力狙撃砲の利点は音が全く出ないことだ。射程距離は低くなってしまうが、それよりも狙撃は気付かれない事が重要視される。

なにせ一発の威力が低かろうと、その銃弾が人を撃ち抜けば相手が死ぬことに変わりはないのだから。

それは能力者であつたも同じである。

今、視線の先に一人の小学生ぐらいの年齢の少女が走っている姿が映っている。ターゲットである『アイテム』の一人だったはずだ。

狙うのは頭。的の広い心臓付近を狙ってもいいが、それよりも脳を潰せば確実だし、もし死の瀬戸際に能力を発動されそうになってもそのための演算が出来なければ怖くはない。

狙いをつけ、引き金を……引く！

銃身から音もなく弾が発射され、想像していた通りの軌跡を描き標的の額に命中した。

「殺った……？ いや、今の手応えは……」

念の為、もう一発心臓部にも撃ち込んでおく。

当然のように標的の胸部に命中したが、弾が当たった衝撃では説明が出来ないほど後方へ飛んでいった。撃たれた衝撃に合わせて後ろに跳んでいるのだ。そのままの勢いで遮蔽物の影に隠れたことから銃弾が効いていない事が推測される。

「……ちっ！ 殺り損ねた！」

というよりも相性が悪い。あれがおそらく『暗闇の五月』計画の被験者である絹旗最愛なのだろう。『オフエンスアーマー室素装甲』という室素による自動防御能力を持っている相手に威力の低い磁力狙撃砲ではまず勝てない。

まずは場所を変える。狙撃において場所がバレるのが一番マズイ。磁力狙撃砲を分解する時間すら惜しい。

急いで狙撃ポイントから離れ、階段を下っていると先程いた辺りから爆発音が聞こえてきた。

おそらく携行型のミサイルでも撃ってきたのだろっ。揺れはしたがこの建物は耐震構造のため崩れはしない。

相手も遠距離からの攻撃では仕留められないと思ってこのビルに来るだろっ。

急いで銃を分解して、収納する。

そして一階の出入り口からではなく、三階の窓から隣のビルに飛び移る。

建物の入り口で鉢合わせなどしたらそれで終わりだからだ。

「———こんばんはー」

「———なッ!？」

だが、飛び移ったビルの先には黒いフードと仮面で顔を隠した黒マントの男が待ち構えていた。

「まーとりあえず……大人しく寝とけや!ー!」

その言葉と共に顔を殴り飛ばされ、意識を手放していた。

「——ったく……他の組織まで絡んでくるなんざ聞いてないんだがな。どういうことだ？」

（結局、どうしてこうなったのよー！？）

フレндаⅡセイヴェルンは命の危機に立たされていた。

『アイテム』の仲間とはぐれ、よりにもよって遭遇したのが『スクール』の超能力者<sup>レベル5</sup>『末元物質』<sup>ダークマター</sup>垣根帝督であった。『アイテム』にも超能力者がいたが、彼女が手も足も出なかった相手なのだ。能力のない自分がどうやっても勝てるわけがない。所謂積みの状態であった。

「……で、お前らはいざという時の集合場所とか決めてんのか？あるんだったらさっさと教えろ」

「け、結局、言っても言わなくても私は殺される訳でしょ？それだったら……」

言っても言わなくても殺されるのなら仲間の情報は言わないでおくそれがフレндаの選択であった。まあ時間を稼げば誰かが助けに来てくれる可能性もあるわけだし、という考えがあつてのことだが。

しかし、ここで垣根の口から悪魔のような囁きが聞こえてきた。

「ならお前は見逃してやるよ」

「え？」

「その後は逃亡生活になるのかも知れねえが…… まあそれでも死ぬよりはマシだろ？」

「え？だって結局アンタはウチラを潰しに来た訳でしょ？それで逃がしたら……」

「『アイテム』を潰せとは言われたが、お前らの核さえ潰せばそれでいいんだろうな。とりあえず麦野と『AIMストーカー能力追跡』さえ潰せばそれでいいわけだ。その命令も本当に上からきたのか怪しいモンだな。で、どうする？」

「……………」

先程は助けに来るかもしれない、という希望的観測だった。しかし今度は言えば確実に生き延びられる。垣根が嘘を吐いている可能性もあるが……

「言うならさっさとしろよ。俺も暇じゃないんだ」

フレンドの直感が語りかけてくる。

必要な情報を手に入れば垣根提督はフレンド「セイヴェルンを必要としなくなる。」

そしてこの男は必要としないものは問答無用で処分する、といったタイプの悪党ではない。

興味から失せたものを処分するのにわざわざ自分から労力を割こうとしないタイプの悪党だ。

ならば『アイテム』の隠れ家さえ告げれば、自分は助かる可能性が高い。それに他の『アイテム』のメンバーがそう簡単にやられると

も思えない。

「……結局嘘だった、ってことにはならないわけよね？」

「当然だ。俺はそんなつまねえ嘘は吐かねえよ」

その言葉を聞き、フレンダがアイテムの隠れ家を告げようとした、その瞬間――

「――ッ!？」

垣根の姿がぶれて、いなくなったと同時に黒い服の男が現われた。

「……………へ？」

ポカン、と口を開いているフレンダ。

それは仕方ないことだろう。先程まで自分の命を脅かしていた相手が、いきなりとんでもない勢いで蹴り飛ばされて飛んで行ったのだから。

(……………って呆けてる場合じゃない!結局、何が起こったのか、

現状を整理するのが先決よね)

気を取り直して、フレンダは考えを纏めていく。

まず先程までいた垣根はどこにいったのか？

それはよく思い出せば答えが出てきた。

この急に現れた男が垣根を蹴り飛ばしたのだ。

蹴り飛ばしたと言っても、蹴り飛ばされた垣根は凄まじい速度で吹き飛び、凄まじい衝撃を伴って壁に激突して、普通なら死んでいてもおかしくない程の威力だったが。

(結局、生身の人間に出せる威力じゃない訳なんだけど……！？)

次は現われた男の姿を観察してみる。

黒いＴシャツに黒のズボン、そして漆黒の肌……

(あれ？結局、首から下の肌の色が明らかに人間の肌じゃない訳なんだけど？)

……いやいや、そんな事よりも今重要なのは垣根帝督がとんでもないスピードで吹っ飛んでいったという事。

それはつまり……

「結局、私は助かったって訳？」

「——いや、そう結論付けるのには早過ぎると思うけどねぇ」

フレンダの呟きに黒い服の男こと影宮が律儀に答えた。

「い、いやいや結局あんな攻撃喰らって立ち上げれる奴なんている訳——」

「——なんだ今の攻撃？ただの蹴りにしちや威力が異常だったんだがな？」

瓦礫の中から声が聞こえた。煙が晴れて視界が良好になったその先に、白い繭のようなモノがあった。

「生憎だけど自分の能力をベラベラと喋るほど、余裕はないんだよねえ」

その繭に対して言葉を投げる影宮。そして当然のように繭から返事が返ってくる。

「ま、そりゃそうか。だが不意討ちとはいえ俺に一撃入れられるほどの力を持つてる奴がいるとはな。誇ってもいいんだぜ」

そして、繭のようなモノが解けていき、繭の正体でもある天使のような白い六枚の翼を背から生やした垣根がゆっくりと羽ばたいた。

「メルヘンだねえ。似合わないよ。」

「心配するな。自覚はある。」

——その言葉を合図に、両者はぶつかり合った。

「……あれ？結局私はどうなる訳？」

“闇”の中の戦い（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありませんでしたorz

## “闇”の中の戦い

この状況を見れば、誰もが無謀と答えるだろう。

能力もない一人の男子高校生が、世界中を敵に回しても勝利を収められる程の力を持つ第一位に、徒党も組まずたった一人で挑むなど、蟻が象に挑むようなものだ。

だが――

「――離れるよ……」

「ああ？」

「ぐちゃぐちゃ言ってるねえで御坂妹から離れるつつってんだろ、この三下……」

少年は退かなかった。

第一位を倒して最強の座を手に入れるのではない。かといって他の研究プロジェクトからの妨害でもない。

ただ、一人の女の子を助ける為に駆けつけたのだ。

無能力者が第一位に挑んだのは、女の子を救う過程において第一位を倒さなければならなかったに過ぎない。

こうして無能力者は超能力者に戦いを挑む――

一方その頃、浜面はというと……

「つたく、こんなトコに何のようがあるんだよ……」

そうばやきながら先程まで助手席にいた影宮が出て行った方を見ていた。

「ちょっといいかしら?」

「ん?……って助手席に女の子がああ!?!」

声をかけられ振り向けば、さも当然であるかのようにホステスのような服を着た少女が助手席に座っていた。

「(こ、これは……ついに俺にも春が!?!……いやいや待て待て。

んなわけねーだろ。まさかこれは噂に聞くハニートラップ!?……  
わざわざ俺にそんなモン仕掛けて得する奴はいねーか……だったら  
なんだ? 売春にしても俺金持ってそうには見えねーだろうし……」  
様々な考えが浮かぶ中、その原因の少女はニコリと笑ってこう言っ  
た。

「少し近くまで送ってくれないかしら?」

「ってまたタクシー代わりかよ!?……ったくどいつもこいつも……  
…」

そつばやきながらも浜面は車を出そうとする。初対面であるはずの  
女子の言葉に従って――

「(――あれ? 何で俺この子の指示に従ってんだ?……まあいい  
か)……で、どこまで行きゃいい――!?!」

そんな事を考えながら、行き先を聞いていなかったたので尋ねようと  
再び振り向いた時、一人のナイフを持った男が、少女の背後にいた。  
背後とは言っても助手席の後ろに、ではない。少女が座っている助  
手席の背もたれに腕と首から上以外の身体が埋まった状態でいたの  
だ。

「――危ねえ!!」

「――え?」

咄嗟に浜面がその男を殴ろうと拳を振るった。しかし、その拳は空  
を切った。拳が男の顔面に当たる直前に男が消えたからだ。

「——何?!消えた!?!」

浜面は相手がおそらく空間移動能力者だと予測を付け、周囲を見渡そうとした時、突然『パァン』という銃声が鳴り響いた。

銃を撃ったのは助手席にいる少女。

撃った弾は浜面の顔、の横スレスレを通り、浜面の背後にいた先程の男の眉間を貫いていた。

「——全く、厄介な相手だったわね」

「……え?え?」

「さてと、……ご協力感謝するわ。とりあえずこの車は乗り捨てた方がいいわよ。あと、この事は忘れる、って言っても無理でしょうから他言無用にしておいた方がいいわね」

「ちょ、ちよつと待て!」

どういうことだよ!と、問い詰めようとしたその時、浜面はやっと気付いた。彼女が左腕を手で押さえていることに。

おそらく先程までこの少女はこの男に襲われていたのだろう。その時に腕を切られた。そして状況を打破する為に適当な車に乗り込んだ。

「それじゃ、さようなら」

そう言つて丁度やつてきたタクシーに乗り込む少女を浜面は呼び止める気にはならなかった。

タクシーに乗り込んだ少女――『メジャーハート心理定規』と呼ばれる少女は運転手に行き先を告げてから一人思考する。

「（それにしてもあのテレポーター……とりあえず『キルポイント死角移動』とでも仮称しておくとして、私の能力が全く効いてなかった。それに車に乗り込んだ後も身体がシートに埋まるのも気にせずに死角に移動してきたことも考えると洗脳系の能力で自我が無くなってたのか、もしくは既に死んでいたのを能力で動かされていたのかのどちらか……？でも例え洗脳されてたとしても私の能力なら多少は効く筈。だからといって既に死んでいたとしてたらしもそも能力発動は出来ないし……とりあえずこのよくわからない騒動が収まった後である死体を車ごと回収してもらえばいいかしらね）」

「——今の所は問題なし、ってミサカは独り言を呟いてみる」

レイナがいるのは病院の一室。そこにあるパソコンの前に座っていた。

目を閉じて、微動だにしない姿は異常ではあるが、今レイナは能力で接続しているネットワークに集中しているのだ。

ではレイナが接続しているのは何のネットワークなのか？

簡単に言えば、それは学園都市におけるほぼ全てのネットワークである。

学園都市内に存在するネットワーク内では様々な情報を送受信されている。

例えば、学生同士でのメールのやり取り

例えば、風紀委員同士での情報の交換

例えば、研究所での実験内容の入出力

例えば、約1万もの少女達による巨大な思考回路

例えば、統括理事会のメンバー同士の会話

例えば、上層部から暗部組織への指令

今回レイナが介入したのは上層部への誤情報の発信とそれに対して行動する組織の選択である。

まず麦野沈利率いる『アイテム』に関する誤情報を与え、それを『スクール』に処理させるように指示を出させて垣根帝督を表に引っ張り出し、超能力者《レベル5》同士の戦闘を阻止するという尤もらしい理由付けで他の暗部組織も引っ張り出す。

これは全て影宮の計画であつた。

そしてレイナはそれを計画通りに事を進め、誰にも気付かれぬままに完了させた。

電子ネットワークの完全掌握

これが、御坂レイナ的能力、『サイバーハック 電脳支配』である。

そして、その“支配できる電子ネットワーク”というのは機械によるモノだけに限らない。

「……そういえば『人形 死角移動』はそろそろ止まった頃かな？ ってミサカはなんとなく悪役ぶってみる。そっちの方の処理もおこな

いと、ってミサカは情報の漏洩を防ぐ為に下部組織に偽指令を出してみる」

人間の脳もまた電子ネットワークの一つである。故に時間は掛かるが、対象の脳が死んでいなければ『電脳支配』の能力で操作・洗脳も可能なのだ。そして脳が死んでいないのならば、その対象の能力を発動させることも可能である。

そう、先程まで『心理定規』と浜面を襲っていた『死角移動』こと査楽はレイナの『電脳支配』によって洗脳されていたのだ。いや、今回は単なる洗脳ではなく死体操作と言った方が正しいかもしれない。浜面が襲われたのはあくまで偶然だが。

このレイナの一手によって、『心理定規』が抱いた疑問は解決する事なく闇へと消える事になる。

ここでいう下部組織というのは『レンタル』のではなく学園都市の裏側で働く下部組織に、である。そもそも『レンタル』に下部組織など存在しない。少なくともレイナは聞いていない。

「（調べようと思えば調べられるかもしれないけど、ここは我慢して刻の信頼を勝ち取ろう、ってミサカは恋の戦略を心の中で吐露してみる）」

そんな事を考えながらも、学園都市のネットワークは未だにレイナの手中に収まっていた。

遠距離から撃ってきた狙撃手を潰す為行動していた絹旗最愛は、一人の男と対峙していた。

「お前、『アイテム』の一人だな」

「……貴方、超誰ですか？」

その男は黒いフード付きのマントで顔を見られないようにしていた。その格好は最近の任務で現れた男と同じような格好だったが、中の人が違うのか、体格が違っていた。

「『アイテム』を足止めしろっていう依頼を受けてな。つーわけでここでじっとしててくれねーか？」

「超お断りします」

ここにいればいつまた先程の狙撃手が撃ってくるかわからない。絹旗自身は問題ないし、麦野の心配などするだけ無駄だ。

しかし滝壺とフレンダは違う。

あの二人にはあの狙撃を防ぐ術はないのだ。ならばさっさと潰しておく必要がある。

「……しゃーなーな。だったら、腕尽くでもじっとしててもらうか！」

次の瞬間、絹旗の腹に拳が突き刺さり、数メートルほど飛ばされた。

（不意打ちとはいえ、近接戦闘に慣れてる私が反応する前に攻撃された。一歩で距離を超詰められて、その上その威力も高い。相手の能力は超おそらく身体能力の強化の類ですか……）

「……ですが、相性が超悪かったみたいですね」

「……痛ーな、おい」

しかし殴られた絹旗は何事もなかったように立ち上がり、殴った黒マントの男が手を振って痛みを誤魔化していた。

絹旗の能力は『窒素装甲』。自身の周囲の窒素を固めて制御する能力。圧縮した窒素の塊を操ることによって自動車をも持ち上げ、銃弾をも防ぐ事が可能なのだ。もっともその効果範囲は極めて狭く、体から数センチの位置が限界なのだが、それでも強力な能力には違いない。

そもそも絹旗に接近戦を挑むのは愚行とも言えるのだ。

いくら攻撃力を上げた所で、生身では窒素の壁はそう簡単には破れない。

いくら防御力を上げた所で、生身では窒素の塊による力にはそう簡単に耐えられない。

故にこのまま殴り続けても負けるのは黒マントの男の方になる。

「攻め方を変えるか……」

「超させません」

そして敵が自らの土俵に上がってきたのを逃す絹旗ではない。

相手が距離を取る前に自ら距離を詰める。

それに反応して相手が殴りかかってきたのを左に避けてカウンターを放とうとして

腹部に衝撃を受けた。

「——ッ!？」

拳ではない。かといって蹴りでもない。これは……

（——爆炎!？）

爆炎の規模はそこまでではない。が、絹旗は咄嗟に腹部に腕をかざした。

その腕に黒マントが一撃が命中する。

（『窒素装甲』の対処方が超バレてる……）

『窒素装甲』は先程も述べた通り、周囲の窒素を纏っている。ならば対処法としてはその窒素を吹き飛ばせばいいのだ。

先程の爆炎は絹旗にダメージを与えるものではなく、彼女が纏っている窒素を吹き飛ばすための物。そしてなくなった、もしくは薄くなった箇所に攻撃を放ってきたというわけだ。

ただし……

（超念の為ガードしましたが、あの程度の威力の爆炎なら拳でダメージを与えられるほど窒素は削り取れないでしょう。それよりも超気になるのが……）

今の炎、どうやって出した？

パツと見た限り、周囲に何か破片が落ちている様子もないことから手榴弾などの道具を使ったわけではない。

ならばあの爆炎は黒マントの能力によって出されたはず。

しかしあの黒マントの能力は身体強化能力ではないのか？

身体強化能力が黒マントの能力ならば、あの爆炎は出せないはずだ。

あの爆炎が黒マントの能力ならば、身体強化はできないはずだ。

いやもしかしたら能力は爆炎の方で身体を極限まで鍛え上げているのか？

いくつもの考えが浮かび、それを否定していく。キリがない。

「……気にしても超仕方ないことですか」

そう呟き、絹旗は改めて意識を戦闘に集中させる。

今は答えの出ない問いに頭を悩ますより、能力がわからずとも目の前の男を何とかするのが先決なのだから。

「その能力、影か？本来は物理的に存在しない影を能力で物理的な武器に変換してるってところか」

「さあねえ」

「誤魔化すなよ」

途轍もない速さの戦いをしながらも、垣根と影宮の二人は軽口を叩きあっていた。

そんな中、垣根はある違和感を感じていた。

その違和感とは、影宮の能力についてだ。

垣根帝督の『<sup>ダイクマター</sup>未元物質』はこの世界の常識に沿わない物質を生み出すことだ。

そしてそれに近い性質を影宮の影から感じ取った。

『未元物質』の能力は垣根以外には発現していない最優の能力。

正確には違うとはいえ、自身に近い能力を他の能力者が持っているはずがないのだ。ある例外を除いて。

そして、何度目かのぶつかり合いの後、垣根は感じていた違和感の答えを得た。

「……もしかしてお前『天上の使徒』計画の被験者か？」

その言葉に影宮がピクリと反応した。

「第二位である俺の『<sup>パーソナルリアリティ</sup>自分だけの現実』を植えつける事で『未元物質』と似たような能力を生み出そうとした、『暗闇の五月』計画の二番煎じみてえな実験。結局、実験対象となる特殊な能力者が少な

すぎたのと、思った以上に実験の成果が出ずに途中で予算が下りなくなつて中断、『暗闇の五月』計画に合併されただっけか？確か成功体も生存体もないって聞いたんだがな」

「博識だねえ。ちなみに『天上の使徒』っていう計画名はキミのその翼を生やした姿が天使みたいに見えるからだそうだよ。知ってたかい？」

「そんな事はどうでもいい。で、俺の劣化能力者であるお前が『未元物質』（オリジナル）の俺に勝てると思つてんのか？」

「御託はいいよ。面倒だ。そろそろ終わらせるようかなあ」

「……はっ、じゃあ望み通り、すぐにでも終わらせてやるよ！」

そして純白の六枚の翼が影宮を貫くために動きだす。

その攻撃を防ぐべく影が蠢き、槍の如くその翼を串刺しにしていく。翼を串刺しにされれば動きが止まる。それが普通の翼ならばそれで終わりなのだろうが、生憎と『未元物質』は甘くない。

次の瞬間には、翼は無数の羽として散らばり、すぐさま翼が再生していく。

「こんなモンで俺を止められると思つてんのか？」

「そこまで自惚れてはないよ」

そつ影宮が口にした瞬間、垣根の周囲360°、上下左右前後から

無数の影の槍が垣根を貫くべく射出された。

「まあどっちでもいい。宣言通り、そろそろ終わりにするぜ」

その攻撃に何の脅威も感じていないのか、垣根が翼を大きく羽ばたかせた。

その時、世界が変わった。

「な……？」

垣根を串刺しにすべく放たれていた影の槍が、ある地点からその姿を失くしていく。いや、それだけではなく、垣根の周辺にある普通の影すらも消えていつていた。

「俺のパーソナルリアリティを埋め込まれてるっていつても、お前の能力の元になってんのは影だ。だったら話は簡単だ。その影を消しちまえばいい」

「影を消すだつて？ そんな事出来るはずが……」

「俺の『未元物質』に常識は通用しねえ」

「異物の混じった空間。ここはテメエの知ってる場所じゃねえんだよ」

「……常識を塗り替える能力とは聞いてたけど、これ程とはねえ……」

そう呟く影宮は片手で口元を隠した。

垣根から見れば、劣勢になった自身の表情を隠しているようにしか見えない。

が、影宮は垣根に気付かれない程度に軽く咳をした。それによって口内に血の味が広がる。  
能力の使用限界が近付いている証拠だった。

「……そうか、どつかで見たことある顔だと思ったら、アレか。お前『レンタル』の影宮とかいう奴か」

「……そうだけどそれがどうかしたのかい？」

「いや何。お前の噂は色々と聞いたことがあってな。その中でも俺が気になったのはお前がアレイスターと対等に取引できる存在だっという噂だ。コレってマジか？」

「どうだろうねえ。少なくとも俺は中立を心掛けてるからあながちハズレとも言えないかもしれないけど」

「それはつまり、アレイスターとの直接交渉権があるってことだな？」

「どうだろうねえ」

「……俺の質問に答える。テメエにはアレイスターとの直接交渉権があるのか？お前の回答によってはその命、見逃してやるよ」

この垣根の言葉は、『お前は俺の敵になるのかどうか』とも言い換えられる。

自身の妨げにならない格下ならば危害は加えず、自身の妨げになるものならば容赦なく処分する。

それが垣根帝督の、悪としてのやり方だ。

もし影宮が質問に答えなければ敵として処理するだけ。

「それって依頼かい？」

「命令だ。で、YESかNOか、どっちだ？」

この絶対的な優位に立っている垣根の問いに答えなければ影宮の運命は死。

影宮は質問に答え、

「だったら答える義務はないねえ」

——なかった。

この場では絶対的弱者であるはずの影宮は、いつも通りにそう答えた。

その返答に対し、垣根は特に表情も変えることもなく淡々と宣告する。

「そうか、じゃあ死ね」

影がなく、能力を使えなくなった影宮に対し垣根は容赦なく純白の翼を振りかざした。

丁度その瞬間、遙か彼方より現れた眩い白光が闇を塗りつぶした。

黒マントと絹旗の攻防は未だ続いていた。

黒マントの戦法は爆炎で窒素を吹き飛ばした所に拳を撃ち込むというのを基本にしており善戦しているが、そのパターンに絹旗は慣れできていた。

そして……

「——超ここですッ！」

「——ッ!!」

ついに絹旗の拳が相手を捕らえた。

黒マントは咄嗟に両腕でガードしたが、絹旗の一撃による勢いに負けて壁まで吹き飛び、腕を折った感触が絹旗に伝わった。

「腕を折ったわけですし、超決着……というわけにはいきませんか」

吹き飛ばされた黒マントの方を見ると、見てわかるぐらいバッキバキに折れた腕が目に見える速さで正常な状態に戻っていく。

これで絹旗は確信する。

コイツは『デュアルスキル多重能力者』だと。

そして男は、ポツリと言呟いた。

「ようやく……覚えた!」

“闇”の中の戦い（後書き）

今回の話で色々な事実が露見しましたねー

『天上の使徒』計画の計画名については作者である自分のネーミングセンスの問題ですので、残念ながら諦めて頂くしか……

## 能力の秘密（前書き）

長らくお待たせしてしまいまして申し訳ありません

## 能力の秘密

「喰らえよ！」

「そんな超大振りの攻撃——！？」

絹旗は黒マントの大振りの攻撃を最小限の動きでかわし、ある違和感に気付いた。

「それは……『オフエンスアーマー窒素装甲』！？」

そう、相手の黒マントは絹旗の能力である『窒素装甲』を纏っていたのだ。

自身の能力を相手が使ってきた事に驚き、そしてそれが示す事に思わず苦虫を噛みつぶしたような顔を浮かべる。

絹旗は効率よく相手を制圧するために、相手の能力について考察していた。

それによってわかった事は、この敵は最初から複数の能力を持っているわけではないという事。

もし最初から『窒素装甲』が使えたのなら今このタイミングで使ってくる意味がわからない。それならば最初から使うなり、最後まで使わないなりすればいいのだから。

つまり敵はこの戦闘中に『窒素装甲』を取得したということになる。

これはまだいい。条件が何なのかはわからないが、いきなり使ってくる能力が増えるわけではないのだから今は関係ない。

絹旗にとって重要なのは一点のみ。

それはつまり、相手が自分と同じ『室素装甲』を使ってくるという事。

『室素装甲』の能力の強さはおそらく使い慣れている絹旗の方が上だろう。しかし問題は絹旗の能力に干渉できるということだ。

室素装甲は周囲にある室素を纏うことで強大な攻撃力や鉄壁の防御力を生み出している。そして同系統の能力者ならば干渉して阻害する事が出来る。

簡単に説明すると、相手の能力が自分と違う能力ならば攻撃力や相性など話は単純な能力のぶつかり合いという事で済むが、相手と同じ能力の場合は違う。能力の制御権争いになるのだ。

例えば絹旗の『室素装甲』の錬度を100とし、相手の『室素装甲』の錬度を80とする。この時、両者の能力発動範囲が被った場合、当然錬度の20程高い絹旗が勝つだろう。しかし、絹旗がいつも通り能力を発動させる事が出来るのかと訊かれれば答えは否だ。

相手は『室素装甲』を纏うことが出来なくとも、相手の能力に干渉することは出来る。黒マントが『室素装甲』の能力をフルに妨害に

使えば、絹旗が得られる窒素の恩恵は単純計算しても20しかない。  
なる。

もちろん実際にはこんな単純な計算ではなく、膨大な演算による見えない攻防戦が繰り広げられるのだが、大まかには間違っていないだろう。

ならば先程まで絹旗に優位だった戦況が揺らぐ。絹旗の殺人的な攻撃力が大幅に削られるのだから。

しかしそれ以上に防御面での問題が大きい。

相手が使ってくるのが『窒素装甲』だけならば絹旗にあまりダメージは与えられないだろう。わずか20程度とはいえ、『窒素装甲』の堅さは並ではないのだから。

だが相手が見えるのは『窒素装甲』だけではない。相手は『デュアル多重能力者』なのだ。  
スキル

制御を乱されて薄くなった『窒素装甲』を貫くための攻撃力を、この黒マントは持っているのだ。

「——こっつ！」

「しまっ——！？」

考えるのに意識が行き過ぎて出来た隙に、能力干渉によって『窒素装甲』が薄くなった腹部に身体強化能力によって強化された拳が叩き込まれる。しかも今回は拳に爆炎も追加されていて、僅かに纏っていた窒素すらも吹き飛ばされて、モロに攻撃を喰らってしまった。

「——かはっ——！！」

『室素装甲』がなければ単なる女子の耐久力しかない絹旗にその一撃を防ぐ事はできず、そのままの勢いで壁に激突した。

激突の衝撃は『室素装甲』で防げたが、その前の一撃によって絹旗は意識こそ保っているものの、これ以上の戦闘は厳しい状況であった。

「ぐ……うう……超失態です……」

「さてと、次は……——ッ!？」

黒マントはターゲットである一人の無力化に成功し、一息吐いた所で悪寒を感じた。  
すぐさま振り向けばそこにいたのは二人の女。

『アイテム』の構成員、滝壺理后と、

『アイテム』リーダー、第四位『原子崩し』メルトダウン 麦野沈利——

「（——ヤベッ!?!）」

直感を信じて咄嗟に右に身体を倒し、地面に転がると、先程まで胴体があった空間に一条の光線が通り過ぎた。

「アンタが接近戦で苦戦するなんて珍しいわね、絹旗。そんなに強かったのこいつ?」

麦野がまるで今日の献立を聞くかのような軽い口調で絹旗に尋ねる。

その片手には戦利品である血や肉がついた土星の輪のような装置があった。

それは『スクール』のメンバーの一人が頭部に装着していた装置だが、彼がどうなったのかは言わずともわかる事だろう。

「……やりにくかったのは、超確かですね。……そいつ、『多重能力者』です」

「『多重能力者』？ふーん……ホントにいたんだ。ま、どうでもいいわ」

そして手に持った装置を放り捨てて獰猛な笑みを浮かべた。

「さつさとコイツ潰して『スクール』の馬鹿共に反撃するわよ。ついでにフレンダの馬鹿も見つけたら拾つとくか」

「……出し惜しみしてる場合じゃねーな、おい」

——そして第四位『原子崩し』である麦野沈利と、『多重能力者』だと思われる黒マンツの戦闘が始まる——

「——な……！？」

訳がわからない。それがまず垣根帝督の頭に浮かんだ言葉だった。

未元物質によって影が消え、止めの一撃を放とうとした瞬間に光が刺してきた。それによって垣根は動けなくなった。

別に光に目が眩んだわけではない

文字通り、光が垣根の身体を刺し貫いたのだ。

痛みはさほどなく、出血もしていない。ただ、動けない。四方八方から垣根の身体を貫いた光の槍が垣根の体の自由を確実に奪っていた。

そして今それを為し得る人間は一人しかいなかった。

「——ふう、巧く騙されてくれて助かったよ」

先程まで垣根が追い込んでいたはずの男、影宮刻がそう言って、ポケットに手をつ込んだ。

それはまるで勝負がついた事を示しているようにも思えた。

「ど、どういう……ことだ!？」

「影ってどういうモノか知っているかい？簡単に言えば、影とは光

の当たらない場所の事を指す。だったら影を自在に移動させることの出来る俺が、逆に光を操ることが出来てもおかしくはないだろう？」

「ま、まさか……！？」

「そう、元々影宮刻という人間は特殊な『光子能力者』フォトンハンドラーだったんだよ」

影使いだと思っていた相手が光も使えることに驚きながらも、垣根は状況を打破するために自身を貫く光の槍の解析を急ぐ。相手の能力の解析が終われば形勢は再び逆転し、一瞬でケリを着ける事も出来る。

が、それを許す影宮ではなかった。

「さて、念には念を入れて置こうか」

影宮がそう宣言した瞬間、先程まで『未元物質』によって消えていた影の刃が再び垣根の周囲に現れ、垣根を貫いた。

「——ガッ！？な、何故……！？」

先程の光同様、今回も痛みはない。ただ、やはり動けない。

しかしそれ以上に垣根に衝撃を与えたのは別にあつた。  
今現在、『未元物質』の効果で垣根の周囲半径10メートルにおいて影は存在できないはずなのだ。

にも拘らず、影は垣根を貫き、捕らえた。

それはつまり、自身の能力が無効化されたことになる。

「そんな事が、あるはずねえ……！」

「キミが俺の能力を解析できるように、俺もキミの能力を解析した。ただ違うのは、キミが解析しようとしたのは俺の能力の一端に過ぎず、俺が解析したのはキミの能力の底までだ」

「バ、かな……テメエ如きに、この俺の『未元物質』全てを理解し切れるハズが……」

「はつきりと言わせて貰うとねえ……」

「キミの能力の底は浅かったよ」

「——ブッ、殺すッ!!」

そう言つて未元物質を発動しようとする。しかし、

「無駄だよ。キミの能力の底は見えたつて言つただろう。今キミを縫い付けている影は動きを封じるだけでなくキミの能力も封じているんだよ。未元物質は発動しない。外側は当然として内側にもだ。無理に動こうとすると身体が細胞レベルでバラバラになるかもしれないよ?」

影宮の言う通り、今垣根は能力を発動させる事が出来なかった。そして身体に力を入れてもピクリとも動かない。口や目蓋が動くのが格下であるはずの影宮に情けをかけられたようにも思えてさらに腹が立った。

「あえてこの言葉で贈ろう。俺の能力に常識は通用しない」

「――」

一刻も早く解析を終わらせる為には冷静でいる必要があるのはわかつているが、格下に自身の決め台詞を使われたことに腹がたった。

「さて、じゃあキミの処遇について話そうか。第二位を殺せばアレイスターから何か嫌がらせがくるかもしれない。かといってキミを野放しにしたら俺にリベンジにきて面倒な事になりかねない。ということで――」

「俺が第二位になる事にした」

「な、んだと……？」

「情報を取り込んで、解析し、再現して、キミ以上の『スベアプラン第二位候補』になれば、何の問題もない」

「で、テメエ、まさか——」

「『未元物質』、貰い受けるよ」

「ふ、ざけんなアアああアッ——」

再び翼を生み出そうとするが、一向に発動しない

「無駄だよ。キミがいくらあがいた所で何の効果もない。キミがその縛っている影を解析している間に俺もまた別の法則を影に入力している。キミに勝ち目はないよ」

垣根帝督に黒いナニかがさらに絡まっていき、上空から引きずり落とす。その向かう先は地面に広がる影。その影はまるで水面のように波打ち、獲物を喰らおうとその深い闇を覗かせる。

「——ッッ——！」

その先の見えない闇に、垣根はゾツとした。

一度中に入れば二度と出る事は適わない。

それを一目見ただけで理解させられた。

そしてあの影の中に引きずり込まれる事に垣根は恐怖した。

今まで数々の“闇”を渡り歩き、散々浸かってきた垣根帝督が、心の底から恐怖したのだった。

「ぐ、ガアアアアアアアアア——！」

恐怖から逃れようとする人間の性に従い、その影に沈むのを良しとしない垣根は抵抗を続けるが、攻撃が影宮に届かない、自身を絡めとる影を緩められない、所ではない。まず攻撃を発動する事すらできない。

まずは足が、まるで溶かされるかのように闇に沈んだ。その感覚はない。

「（——いや、違う！足の感覚がなくなっただけ！？）——」

闇に飲まれた部位、足から先の感覚がなくなっていた。ただ痛みはなく、まるで最初からその部位などなかったかのような自然さに、逆に違和感を抱かざるを得なかった。

そのまま、垣根帝督という存在をを溶かすかのように影は闇に引きずり込んでいく。

「殺す！ テメエだけは絶対に殺してやる！ どんな手を使ってもだ！ 俺は死なねえ！ こんな所で死んでたまるかよおおおお！」

最後の抵抗とばかりに垣根は悪意を込めた叫びを撒き散らす。

それに対する影宮はというと、相変わらず薄い笑みを浮かべてその言葉を聞いていた。

そして――

「イタダキマス」

――翼をもがれた天使は、闇に堕ちた。

黒マントの男こと七篠無頼は危機に陥っていた。

「（あー……これマジでヤベーな。気抜いたら一瞬でお陀仏じゃねーか）」

そんな事を考えながら飛来してくる『原子崩し』を避ける。そのついでに念動力で鉄骨を麦野沈利目掛けて飛ばすが、光線を楯のように張る事で難なく消滅させられた。

「（つか、どうすれば勝てる？今の状況で使える能力で遠距離から一撃で倒せる能力はねーぞ……）」

七篠の能力は正確に言えば『多重能力者』ではない。

どちらかといえば『多重能力』というよりも木山春生が使っていた『多才能力』マルチスキルに近いだろう。

七篠の本当の能力は『能力倉庫』A I Mバンク。相手のA I M拡散力場を解析し、その結果を記憶・記録し、保管する能力である。

図書館で例えるとわかりやすいかもしれない。保存されている本を、能力

自身の使いたい時に取り出し利用する。

保存される能力は大本と比べ多少劣化してしまうが、それを差し引いても有力な能力である。

ただこの能力は自身のレベル以上の能力を使う事は出来ない。保管は出来てもそれを使うことは出来ないのだ。

それに例え彼が千の能力を覚えたとしても、咄嗟に使える能力は限られており、その数は10にも満たないだろう。いくら能力を記録しているからといってそれらの能力の詳細をすぐさ思い出せる物はそう多くはない。記録された能力が膨大な数になればなるほど、その時使いたい能力の検索に時間が掛かってしまう。そういった問題もあって七篠が時間をかけず、咄嗟に使える能力は普段見慣れていたたり、記録した時期が最近だったり、比較的有名だったりする能力に限られるのだ。

その辺りの問題は彼のレベルが5になれば話は変わってくるのかも  
しれないが、生憎今の彼のレベルは4。ない物ねだりをした所で現  
状は変わりはない。

「——とりあえず『原子崩し』の解析・記録完了」

七篠は牽制代わりにレベル4相当の電撃の槍を放つ。並大抵の相手  
なら問題もなく貫くだろう。

が、電撃の槍は相手に当たる直前に不自然に軌道を変え、明後日の  
方向に飛来する。能力に干渉され、曲げられたのだ。

「その程度の電撃撃たれてもねえ。せめて第三位くらいの電撃じゃ  
ないとねエ！」

麦野にとって先日電撃使いの最高峰である御坂美琴と戦ったことも

あつて、レベル4程度の電撃など何の脅威にも感じないようだ。まあ麦野自身、その時の相手が第三位だったと認識していないのだが。しかし七篠にとってあの電撃の槍は確認に過ぎなかった。

「（電撃を曲げたつて事はやっぱり『発電能力』と『原子崩し』は根幹が同じつて事で正しいわけか……なら相手と同じように攻撃を逸らす、ことは流石に出来ねーだろーが、察知する事は出来る）」

そう判断した七篠は使用するメインの能力を『発電能力』に設定し、攻撃の来るタイミングを事前に察知する事で麦野の撃ち出してくる光線を避けながら、電撃や火炎を撃ち出していく。

「（今のこの状況を打破するにはやっぱり不意を付くしかねー。……一応だが種は撒いた。この一回が勝負だな。というか殺傷能力ありすぎだろこの光線！」）」

七篠は殺人光線を避けながら電撃と水流を放つ。

しかし麦野は顔色を変える事もなく、向かってくる電撃を捻じ曲げ、光線で水流を掻き消す。

「（そして仕掛けるタイミングとしてはあの女が俺に避けきれない攻撃を撃ち込んだ瞬間——）」

「……そろそろ飽きてきたし、終わらせようかしらね」

そういつて麦野はポケットから取り出した『シリコンバーン拡散支援半導体』を放り投げ、それに向かって『原子崩し』を放った。

それによって拡散した無数の小さな光線が七篠の逃げ場を完全に塞

いだ。

「——くっ！」

それでも七篠はその無数の光線を、能力を駆使し、さらに左腕を犠牲にして最小限の負傷で避け切った。が、そこまでだった。

「これで終・わ・り」

今の攻撃に対処する為に完全に足を止めてしまった七篠に、無慈悲な一撃が撃ちこまれた。

足は止まり、体は硬直し、避けようがない攻撃。誰もがその一撃で終わったと確信した。

「（——今ッ！）」

その瞬間、光線の射線上にいた七篠の姿が消え、

「——そうだな」

その声と共に、麦野の真後ろに突如として現れた。

「——ッ!？」

——確かに七篠はレベル4の能力までしか使えないし、咄嗟に使える能力は10にも満たない。

——だが、風紀委員の後輩が毎日のように使っている『空間移動』テレポートはその許容範囲内であった。

「——これで終わりだ」

そして麦野が振り返る前に勝負を決めるべく、彼女の体に触れた。

その瞬間、麦野の姿は消え、

「——は？」

すぐ側にあるビルの壁に移動していた。ただし下半身が突き刺さっ

た状態で。

何が起こったのか。簡単に言えば、麦野をレポートさせてビルに埋め込んだ。これだけの事である。

「あー、腕痛ーなおい……」

「て、テメエ！？一体どういつつもりだ！！」

麦野が怒りの声を上げながら攻撃しようとするも、発射口たる腕はビルの壁に埋まっていて動かせない。

「俺の目的は別にアンタらを“殺す事”じゃなくてあくまで“足止めする事”だ。無理に殺そうとは思ってねーよ」

それにあの一瞬の間に麦野を一撃で仕留められる能力が思い浮かばなかったという理由もある。それに何故だか致命的な攻撃を喰らわせても、生き延びて手痛い反撃を食らう気がした。

「テメエ、フザケてんじゃねえぞ！！」

格下に『無理に殺そうとはしない』とナメた口を利かれ、麦野の顔が怒りに染まる。このまま放っておくと全身から『原子崩し』を出しかねない。

「まー、しばらくはそこで大人しくしてくれ」

もしそうなくても被害がこないように足早に立ち去ろうとした時、背筋に悪寒が走った。

「——なんだ？」

そこにいたのは、

滝壺理后

先程の麦野との戦いで七篠が逃走を図ると思ったのか、彼女は既に体晶を使用し、能力を発動させていた。

「……そーいや、もう一人いたんだっとな。さっきの悪寒はコイツから？」

疑問に思った七篠が滝壺の能力を解析し、記録しようとしたその時、異変が起こった。

「——！？」

「あ……が」

「う……あ」

滝壺と七篠が同時に苦しみ出したのだ。

滝壺理后の『AIMストーリー能力追跡』

この能力は、相手のAIM拡散力場を解析・記憶し、それをどこまでも捕捉し続ける能力である。

七篠無頼の『AIMバンク能力複製』

この能力は、相手のAIM拡散力場を解析・記憶し、それを自身内に取り込むにする能力である。

結果は違えど、この二つの能力の根幹は“AIM拡散力場に干渉する”という共通したモノである。

それが互いに干渉し合えば、どうなるのかわからない。何せ『能力追跡』の能力は暴走状態での発動が常であり、『能力複製』の能力は正式に確認されていない未知の能力なのだからお得意のシミュレーターでシミュレートする事も出来ない。

そしてその結果が――

## 騒乱の終結（前書き）

とあるの方を更新して欲しいとメッセージが着たので比較的早めの更新  
ただ早めといっても一月経っているという……orz

## 騒乱の終結

音一つない静けさが、先程まで二人が戦っていた戦場及び周囲一体を包む。

まるで先程までの激戦が嘘であったかのように静まりきっていた。

「えーっと……？」

そんな静寂を破ったのは、その激戦を唯一間近で目撃していたフレンドであった。

彼女は影宮と垣根の最初のぶつかり合いによる衝撃で吹き飛ばされ、その後はひたすら続く人外な戦闘に手を出す所か身動き一つとれず、結局どこぞの家政婦の如く一部始終を見ていたのだ。

ようやく戦闘が終わって逃げられる状況になったのだが、ふと「このまま戻ってもいいのだろうか？」と疑問に思ったのだ。

おそらく麦野あたりは『スクール』に反撃しようとするだろう。

そこで戻ったフレンドが麦野に「第二位は死んだよ」と言っても信じてもらえるだろうか？ いや、信じないだろう。

もし信じなかったら、麦野は垣根を見つけるまでフレンドたちを引っ張りまわすだろう。そんな絶対に見つからない人間を探し続けるなんて苦行は絶対御免である。

せめて誰が殺したのかをはっきりさせないと麦野は信じてくれない  
ということ黒い乱入者の身元をはっきりさせようと身を隠しながら  
近付いてきたのだが……

「……結局、コイツは生きてる訳？」

フレンドが影宮のすぐ近くまで来てもピクリとも動かない。という  
か指で突っついてても何の反応もしないのだ。

というのも垣根帝督が影の中に吞み込まれると、影宮はいきなり血  
を吐きながらその場に蹲り、そのまま動かなくなっていた。

もしかして死んでるのでは？と思ったフレンドだったが、呼吸は一  
応しているので生きてはいるのだろう。

「……解析完了」

「（——！？やっぱり生きてた！？）」

咄嗟に身を隠すフレンド。

「ふう、単なる思い付きだったけど、うまくいったみたいだ。それ  
にこの能力はあの『幻想猛獣<sup>AEMバースト</sup>』や『正体不明<sup>カウンターストップ</sup>』と密接な関係にある  
みたいだねえ。根が同じ能力ってことか」

より深い解析を行う必要があるな、と影宮は思いながら先程までの  
戦闘を振り返る。

「それにしても、何とか勝てたなあ……」

今回の戦い、実は影宮は確実に勝てるとは考えてなかった。確率としては五分五分と言った所だと予測していた。

故に事前に何通りもの戦闘を想定して、かつ垣根帝督の思考の幅を狭めるように誘導した。

結果、影宮は垣根帝督に勝利した。そして――

――  
バサアッ！！

「……え？」

影宮の背中から六枚の翼が現われた。

それは先程まで対峙していた垣根帝督の『ダークマター未元物質』による翼に酷似していた。

が、純白の羽は全て漆黒に染まっており、天使ではなく、まるで黒

く堕ちた堕天使のようにも見えた。

「なん、で…… あれは第二位の能力なんじゃ……」

フレンダから思わず戸惑いの声が漏れる。

その声に反応したのか、影宮の浮かべる笑みが濃くなりそのまま空を見上げてこう呟いた。

「さて、アレイスター。見ての通り第二位『未元物質』は入れ替わったよ。出来れば名前は出さないで欲しいけどねえ」

誰もいないはずの虚空を見つめ、そう宣言した影宮の目には、一体何が映っているのだろうか――

「……『未元物質』を取り込んだか」

フラスコの中、アレイスターは学園都市の全てを観察していた。当然の如く、先程までの戦いも、影宮の宣言でもある。

「あの能力は……一体なんだ？」

影宮の能力は学園都市の全てを知っているアレイスターですらわかりえないものだった。

いや、正確に言えばわかっていたはずだった。

影宮の学園都市での認識は無能力者である。しかし、学園都市の全てを視ているアレイスターは影宮の能力がどういったものかというのを知っていた。

影を物質化し操作する原石。それがあの実験にて突発的に削られ、磨かれたモノ。それが影宮刻の能力のはずだった。

しかしそれは他人の能力を取り込むという異常な能力ではなかったはずだ。アレはもう応用力でなんとかできるレベルではない。

アレイスターが持っている情報から影宮の能力を推測し直すことは出来る。

しかしその推測が導き出した能力は存在し得ないモノだ。こたえ

それは、最凶にして最弱の能力

だがしかし、それはあくまで机上の空論と言える能力だ。

能力の原則を破る能力にして、その原則故に使用が不可能な能力。

故に存在していたとしても、その存在を実証するどころか確認する事すら不可能であるはずなのだが……。

「……まあいい。『プラン』に影響はない。それにこういうイレギュラーが在った方が楽しめる」

ただ、この程度のイレギュラーではアレイスターは動じない。

例え影宮の能力がそのありえない能力だったとしても、アレイスターにとってこの程度のイレギュラーは娯楽でしかない。

垣根を失ったといっても『未元物質』の能力者が垣根から影宮へと変わっただけで、『未元物質』を失ったわけではない。

それに奪われたのはあくまで『スベアプラン第二候補』。アレイスターにとっては特に痛手というわけではないのだ。

「やはり興味深いな、『レンタル』影宮刻。私の計画の前に立ちはだかるのは、もしかすると君なのかもしれないな」

そう呟きながら、『人間』アレイスターⅡクロウリーは笑みを浮かべた。

——例えそうなったとしても計画に支障はなく、それもまた娯楽の一つでしかない、とでも言うように

「さて、そろそろ行こうかと思うんだけど……どうするかなあ？」

そう呟いて影宮が視線を向けた先には瓦礫の影に隠れているフレンドの姿が。

「え？もしかしてバレバレだった訳？」

隠れているのがバレて、身体中から冷や汗があふれ出す。

今のフレンドには、自慢ではないが、影宮と戦闘になったら勝てる負ける以前に勝負にならない自信があった。そして逃げられる気もなかった。

「……とりあえずフレノンドにしておくかなあ？」

「何か不吉に聞こえた！？音的には変わらないけど結局不吉な事が起きそうな予感がした訳なんだけど！？」

「……まあとりあえず保留ということで」

その言葉にホッと胸を撫で下ろすフレンダを横目に影宮はケータイを取り出してレイナに電話をする。

「今のところどんな感じ、レイとん？」

『特に異常なし、って言いたいけど、少し異常ありだよ。よくわからない現象がある地点で起きてた、ってミサカは念のために刻に伝えておく』

「よくわからない現象？詳しく教えてくれるかい？」

『了解、ってミサカはクールに決めてみる。一つは現在進行形で巨大なプラズマが発生してる。こっちは多分例の実験が関係してるんだと思うよ、ってミサカは自分の憶測を伝えてみる。もう一つは正体不明の発光領域の出現だね。こっちはもう治まったみたいだけど、ってミサカは首を傾げながら事実だけを伝えてみる』

「正体不明の発光領域？……そこには誰がいたかわかるかい？」

『うーん、確か七篠無頼とフレンダ、セイヴェルン以外の『アイテム』三名がいた、ってミサカは記憶を振り絞ったような感じで言うてみる』

「……という事はナナシ君以外に麦野沈利、絹旗最愛、滝壺理后がいたって事か」

少しの間考え込み、ある憶測に辿りついた。

「……もしかしてA I M拡散力場の暴走による急速な収束と解放……?」

『というと?』

「簡単に言えば能力同士の共鳴反応の可能性があるってことさ。ま、憶測の域を出ないけどねえ。それで、今その領域があつた場所はどうなってる?」

『多少の破壊痕はあるけど、『メルトタワー原子崩し』によるものだね。今そこにいるのは小学生くらいの女子だけだよ、ってミサカは特徴だけ言うてみる』

「小学生くらいの女子……絹旗最愛が今もいるという事は、発光領域自体に攻撃性は皆無。それなら他の面子が何故いないのかが謎だねえ……」

そう呟いて少しの間考え込んでいたが、今考えてもわからないので置いておく事にした。

「……まあそこら辺は置いとくとして、とりあえず作戦終了って事で撤退するよ。ナナシ君にも連絡よろしくねえ」

『了解、ってミサカはメンドクセーし別に連絡しなくてもいいかと思うたりしながら返事をする』

いやそこはちゃんと連絡して、と言う前に電話が切れてしまった。

「大丈夫かなあ?」

「あ、あの〜……」

少し不安になったりしていると、恐る恐るといった感じでフレンドが話しかけてきた。

「どうかしたかい？」

「結局私はどうしたらいい訳？」

影宮にとって、フレンドがどうしようが別に構わなかったので少し考える素振りを見せた後に。

「帰ったらいんじゃない？俺はもう帰るけど送っていいとか？もちろんタダじゃないけどねえ」

送る発言に輝いていたフレンドの表情が、タダじゃないという言葉で一変した。

その後、百面相のように顔をしかめながら考えて考え抜いた後に結論をだした。

「……遠慮しとくわ。そんな所麦野に見られたら結局ブチ殺しされかねない訳だしね〜」

「じゃあ今回の借りはいつか返してもらうつとして、頑張って生き延びてねえ」

「え！？借りって何の事！？」

そう言い残し、影宮は背中黒い翼で飛び立っていった。

フレンドにとって借り云々と言われたのは予想外だったが、まあもう会うこともないだろう、と安心して、ふと影宮の言葉に違和感を覚えた。

「……ん？『生き延びて』？どういう事？」

「——フレンド……アンタ、『未元物質』と何を話してたのかなあ？」

「へっ!？」

フレンドの後ろには、攻撃的な笑みを浮かべた麦野沈利が立っていた。

麦野の服は所々汚れてしまったり、破けていたりしているが、怪我らしい怪我は皆無のようで元氣一杯殺る氣も一杯のようだ。

「——ってこの状況で殺る氣一杯って結局マズイ訳じゃ!？」

「

——この後、フレンドは麦野にブチ殺されないよう、必死で言い訳をするのだが、それはまた別の話……

一方、七篠はと言つと……

「……ここは………どっかの裏路地か」

学園都市のどこかの路地裏にある薄暗い通りにいた。

「一体、何が起こつたつていうんだよ……クソツタレ」

悪態をつかずにはられない。

何せ、急に頭が痛みだしたかと思えば、能力が暴走して目の前が真っ白になり、気付けば暴発したと思われる空間移動能力テレポートによってこの場所に飛ばされていたのだから。あの場にいた他の連中も空間移動能力で飛ばされた可能性がある。

まあ一応あの危険集団から無事に逃げられたのだから良しとする。  
………というかそうしないとやってられない。

ひとまずは能力関連に関して異常がないか確認していく。

先程の頭痛と発光が能力の暴走によるものだとしたら、何らかの影響が出ているかもしれない。

そしてその予想は当たっていた。

「記録したはずの能力がなくなってやがる………いや、なくなつてはねーが、ゴチャゴチャになってるってどこか………」

図書館に例えるなら、本棚が全て倒れた状態で、どの本がどこにあるのが全くわからなくなっている感じだろうか。

「時間は掛かるが元には戻るか。なら次の問題だな……」

どんな状況でも冷静に分析して、現状を把握する。それは誰にでも出来ることではない。

しかし、それだけでは打破できないこともある。

「まあ空間移動したのはまだいい。だが、何でこんな中途半端に……」

「——でさー、ソイツムカツクからちょっとやってやろうと思っ  
つてさー」

「マジで？そんな時は俺も呼べよなー」

ふと裏路地の入り口の方から声が聞こえてきた。

どうやらどこにでもいそうな不良少年たちがこの路地裏の通路を歩いてきているようだ。

不良少年達の声はだんだんと七篠に近付いてくる。

そして互いの姿が見えるくらいまで近くにきて、彼等が七篠の顔を  
見た途端、

「……………え？」

「あ……………う、うわああああああッ!？」

「ちよつ、待ってくれ!腰が抜けて……………!ひ、ひいいい!？」

不良少年達は叫びながら必死になって逃げていつてしまった。

別に七篠に対してのトラウマを彼等が持っていたわけではない。

第一相手が七篠の事を知っていたとしても仮面で顔を隠しているの  
で相手は七篠のことを誰だかわからないだろう。

なら何故逃げたのか？

それは逃げる不良少年のセリフを聞けばわかるだろう。

「な、なんでこんなトコに生首があんだよ……………!？」

そう、彼等は首から下が地面に埋まった七篠を生首だと思って逃げ  
たのだ。

いくら不良だからといって人の死体に耐性があるわけではない。

空間移動能力は移動先の座標に物体がある場合、その物体を押し退けるように移動する。

先程、七篠が麦野沈利相手をコンクリートに転移させて身動きが取れなくしたのは、空間移動能力のこの特性を利用したもので、今度は自分がその状態になってしまっているわけである。

最も超能力者<sup>レベル5</sup>に近いとも言われていた空間移動能力者が、座標指定ミスで片脚がコンクリートに埋まって大怪我を負ってしまった、それがトラウマとなり自分自身を空間移動させる事ができなくなった、という話はある筋では有名な話だ。

だが今回は無理に動かしたら皮膚が剥がれて大怪我になる、とかそういうレベルの話ではなかった。

そもそも首から下が見事に埋まってしまっているので、無理にも動かす所か身動き一つとれない状態なのだ。まあこの場合は怪我をする心配がないという点で不幸中の幸いとも言えるだろう。

さて、問題はここからである。

この状況を打破するには、空間移動能力で脱出するのが一番簡単な方法だ。

重機で掘り返すにしても他の能力で掘り返すにしても、七篠の身体

が無傷で掘り起こせるとは思えない。

その点でいえば、座標地点の設定さえキチンとすれば、無傷で、しかも一瞬でこの場所から抜け出せるだろう。

しかし、先程言ったように、今、七篠は記録した能力の使用が出来ない状態にある。

かといって誰かに助けを求めようにも、場所が場所だけに人があまり来ない。その上に来ても先程の有様である。

こうなった以上は、早急に自身の能力を復興させるほかない。

「……メンドクセーな、おい」

ここに、七篠の孤独かつ地味、そして何よりも重大な戦いが始まった

——この日から、学園都市の都市伝説に『深夜の裏路地に現れる仮面生首』が加わった。

この日、学園都市において大きな出来事がいくつか起きた。

最強の超能力者、第一位『アクセラレータ一方通行』の敗北。

第一位が負けたという事実だけでも驚愕の事実ではあるが、その相手は単なる無能力者の少年だったのも驚愕を大きくしている。

これによって最強の座を狙う者達によって勝者の少年が狙われる可能性があるので、騒ぎがひと段落するまで一時的に学園都市の外に出す事になる。

学園都市の暗部組織同士による戦闘。

それに伴い、超能力者同士の戦闘が勃発。この戦闘を治める為、他の暗部組織にも要請をかけこれを鎮圧した。その犠牲は少なくなく、多くの死傷者を出してしまった。

後に調べてみると、これらの戦闘が起きたそもその理由は上層部から暗部組織への誤った指令の伝達によるものと判明した。

しかし何故そのようなミスが起きたのか、その原因は未だにわかっておらず調査中である。

学園都市第二位『未元物質』に関する情報の変更。

詳細は不明。能力名は変わらず、ただ能力者の名称が不明になっただけで、何故変更が必要になったのかという理由は一切謎に包まれており、『書庫バンクに納められている情報が凄腕ハッカーによって書き換えられた』『書庫の情報を書き換える指示が統括理事長から下さ

れた』『第二位が死亡したのを後になって隠蔽するために書き換えられた』など、様々な噂が流れているが、真偽は不明である。

その他、学園都市の都市伝説が増えた、などという瑣末なこともあったが、以上の事が起こったことにより、学園都市の上層部は一時的にパニックを起こしかけたのは仕方ないことなのだろう。

「くっそー……… どの時もこいつも俺を扱使いやがって……… でもあんな所に何しに行ったんだ影宮の奴？ まあいいか」

浜面はあの後、少女の助言通りあの車を乗り捨てて別の車に乗り換えていた。当然の如くその車も自慢のピッキング技術によって手に入れたものである。

ブツクサ文句を言いながら浜面は家に帰るべく、車を走らせていた。その時、視界が真っ白になった。

「…………… ツ！？ め、目があー！？ 目があぁッ！？」

夜にも関わらずまるで太陽のような強烈な光に、馬鹿なセリフを口にしながらもブレーキを踏む。

こんな視界で運転してたら事故を起こしかねない。そう思っただけで起こした行動は、彼にある一つの出会いを齎した。

「くそ……なんなんだこの光……？」

腕で目を覆いながら光の方を伺う浜面の耳に、今度は前方からドコツという何かモノが落ちてきたような音が聞こえてきた。

「……え？」

恐る恐るそっちの方を見ると、そこには少しへこんだ車のボンネットの上に横たわる一人の少女の姿があった。

「……ええええ！？ちよ、ちよつと待てよ！？何このシチュエーション！？」

少女の服装はジーパンに白のＴシャツとデザインよりも機能性を優先させているのがわかる。が、今はそんな事どうだっていい。

「あ、あの……アンタ大丈夫か？」

今日の出来事から少し警戒した風に話しかける浜面。

しかし少女の様子を目にした途端、少女への警戒心がなくなった。なぜなら少女の様子がどこかおかしかったからだ。

「おい！大丈夫か！？」

浜面が声をかけるが、返事がないのでおそらく意識がなく、顔も赤くて汗が止まらず、呼吸も荒い。

自分で聞いておいてなんだが、素人である浜面から見ても大丈夫ではなかった。

「きゅ、救急車！……いや、それはヤベエ……！」

救急車を呼べばそれに伴い警備員も来るだろう。そうすると現在進行形で無免許運転及び車の窃盗という罪を犯していて尚且つ前科持ちの浜面は問答無用で留置所送りになってしまう。他人のせいで自分が捕まることになるのは嫌だった。

だからといってこの少女を放っていけるほど、浜面はまだ人間腐っていないかった。

「……どうする？」

スキルアウトの溜まり場にいくにしても危険だ。リーダーである駒場の方針で女子供を狙うなど言われてはいるが、もし駒場がいなければそれを守らない輩もいるかもしれない。

影宮に頼るのは最終手段だ。借りを作りたくないし、顔も見たくない。うまく預けたとしても全幅の信頼をおける相手ではない。

「……どうする！？」

救急車を呼んで自分は逃げるなり、車で直接病院に連れて行くなりすればいいだけの話なのだが、浜面はそれに気付くことはなかった。

「……どうする、俺！？」

——この時の判断が浜面仕上の、そして倒れていた少女、滝壺利後の人生を変える事になるのを、浜面自身思いもしなかった。



## 騒乱の終結（後書き）

ということで騒乱は終わり、影宮の謎は深まるばかり……一体どこに向かつてるのだろうかこの主人公……

あと最後のシーンで滝壺がボンネットの上に落下した時に浜面に「親方あ！空から女の子がつ！」と言わせたけど、言わせるタイミングがなかったからボツにw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4356k/>

---

とある中立の貸借稼業

2011年12月3日21時46分発行